

裏切りの代紋（後編 1 淫獄編）

饗宴の後

前回大亜門戸会の組員40人を一度に相手にした稼ぎは、相当な額となって女達にも支払われる筈で有ったが、乱痴気騒ぎを繰り広げた男達の飲食費や、酔った男達がこぼした酒や食い物で汚れたり、男達から面白半分に大量浣腸された結果として糞尿で汚した大広間の畳や襖の交換費用など、色々な名目を付けて天引かれ、女達の手元に残ったのは僅かな額であった。

剛沢としては、村崎親分を迎えるに当たって、古くなっていた畳や襖の交換の必要が生じたが、幸便に女達に畳替えや襖替えの費用を押し付けたのであった。

更に自ら放出した糞便に塗れて着れ無くなってしまっていて廃棄した衣類の交換のため新たに購入した衣装代が、逆に剛沢からの借金を嵩上げする事になってしまった。

また、その後の村崎親分の接待の時は、村崎親分から取りはぐれたと理由を付け、花代は全て女達に押し付けてしまっていた。

「銀座の女でも客から、売り上げを回収出来ない時は、女達の持ち出しだろう。」と、3人の女を前にして剛沢が隣に立つ亜紀チラッと見ながら言った。亜紀も同意するように首を縦に振った。

「それとも、お前達、素っ裸で村崎親分の所に行って代金を回収してこれるか？」と、剛沢に凄まれ、3人とも泣く泣く借金の積み上げを飲まされる事になってしまったのだった。

元より剛沢にとって村崎親分に花代を請求出来る訳もなく、本来剛沢が支払うべき所を、自分の懐が痛まないように、陰険にも犠牲となった女達に押し付けてしまったのだ。

これまでも、一日の休みも与えられず、大金持ちの変態客から連日連夜、毎回性の拷問のように激しく責め捲られ、生身の女体をすり減らして、相当額を大亜門戸会に稼いでいるはずであるが、結局女達の手元に残るのは僅かな額となり、週一度の性病予防の身体検査を受けて、社宅の使用代と称するプライバシーの全くない檻の家賃と、浣腸の具と男達があざ笑う、量は多いが決して美味では無い賄の費用を筆り取られると、漸く利息に充てる程度しか

金は残らなかった。

剛沢は借金さえ完済すれば、何時でも大手を振って、ここから出て行って良いと言っているが、このままでは借金完済の目処は立たず、大亜門戸会のために一生ここで、ボロボロになるまで、身を売らなければならないことは明らかであった。

赤石や元目高組の幹部達は傷が癒えたので、既にこの屋敷から出て行ったと、剛沢や大亜門戸会の連中は言っているが、今や強大となった大亜門戸会に手も足も出ないのか、組を再興して自分達を救出しようとする兆候は見られなかった。

寝物語りにそれとなく客からS市の現状を聞くと、赤石達元幹部は、今は大亜門戸会のシマとなった盛り場で何度か騒ぎを起こした事が在ったが、大亜門戸会の用心棒達からこっぴどく締め上げられ、そのまま恐れをなして、ほうほうの体で街から逃げ出したようで、その後の行方は、判らないとのことであった。

彼ら古参幹部はこれまで奈和親分からさんざん恩を受け、その上、彼らの命乞いのため、組も解散し全財産を失ってまでして、命を救ってやったというのに、その恩を忘れて、大亜門戸会の前にオメオメと尻尾を巻いて逃げ出したと聞いて断腸の思いとなるのであった。

最大最強の味方であるはずの村崎親分も今は剛沢の側に就き、外部から救助が来る希望は益々無くなっていた。

その反対に、目高組のシマを奪い豊富な資金源を得て、その上、村崎會の後ろ盾まで得た大亜門戸会は、何らの不安要素も無くなり、新入りの組員も次々と加入しているようで、これまで見た事も無かった新しく組に加入を認められた男達も目に好色な光を浮かべて、ネットリとした視線で全裸の女達を上から下まで嘗め回し、責めに加えて貰える機会を窺うようになっていた。

目高組を裏切って大亜門戸会に鞍替えした三下組員の下にもこれらの新入りが配下として加わり、長年大亜門戸会の組員を続けていたかのような態度で、いっばしの兄貴風を吹かせて、恩義在る目高組の女達に対して尊大な態度で接するのであった。

そして、大亜門戸会への殴り込みに参加して警察に逮捕されていた下っ端の組員のかなりの数は、既に刑務所から出所して来ていたが、出所して来ても行き場もなく、殆どの組員は先に剛沢の杯を受けた仲間を通じて大亜門戸会へ加入させてもらい、これまで受けた恩義もあっさり捨て去り、喜々として晴江達をいたぶる仲間に加わるのであった。

一方、殴り込みの首謀者である若親分や若頭の青沼が当分出所してくる当ては無かった。
この様に、全くの新入りの組員以外にも目高組を見限り大亜門戸会の杯を受けようとする裏切り者が次々と現れ、組員の人数もどんどんと増加して、日増しにその勢力を伸ばして強大化する一方の様であった。
これまでの状況は、大亜門戸会に取って益々優利となり、自分たちにとってどんどんと不利となることばかりで、こうしている間にも、状況は時を追って悪くなるばかりで在る事は、明らかであった。

テツ

「テツの兄貴、^{ムシヨ}刑務所でのお務めご苦労さんでござんした！」
「兄貴は止してくれよ・・・此处（大亜門戸会）では、お前の方が先輩だ・・・」
今は大亜門戸会の組員となっているかつて自分の下に居たチンピラから兄貴と呼ばれて、こそばゆそうに応えた。

目高組が大亜門戸会の巡らした罠に嵌り崩壊した夜に警察の包囲を掻い潜って逃走をはかり、かろうじてお竜に連絡した直後に逮捕された元目高組組員のテツであったが、刑が確定し、刑務所暮らしの末に、先日出所していた。

しばらく娑婆の生活と隔絶している間に S 市の状況は大きく様変わりしていた。
かつての目高組事務所や目高組が運営していた施設には、大亜門戸会の組員がのさばり、目高組の組員の姿は街には見られず、かつて同僚だった男達も大亜門戸会から杯を貰って鞍替えしている状況だった。

既に S 市は大亜門戸会の支配によりかつての組同士の抗争も無くなり安定を取り戻していた。

出所して来たテツにとって最大の関心事は、行方の分からないお竜や親分達の情報であった。
情報を求めて、今は大亜門戸会の組員になっているかつての同僚に接触すると、「彼女奴等^{あいつ}は大亜門戸会に捉えられ性奴隷となって客に身体を売っている。」と、卑猥な笑い声を上げながら嬉しそうに話すのだった。

かつての恩義ある女達を責め罵った経験を嬉々として話す男に怒りを覚え、また性奴隷とい

う言葉にショックを受けたが、表情に出さないようにして、その男に大亜門戸会入会の仲立ちを依頼したのであった。

晴れて大亜門戸会の組員となったテツが廊下ですれ違ったかつての自分の下にいた顔見知りの組員をつかまえて尋ねていた。

「ところで・・・噂では・・・大姐やお嬢やお竜姐御が此処に捉えられていると聞いたが・・・本当か？」

「へへ・・・彼女奴等^{あいつ}の今の姿を見たら兄貴も腰を抜かしやすぜ・・・」

半信半疑の表情を浮かべるテツの顔を見詰めながら何やら自慢そうに応答した。

「本当は許可が無ければ地下室には降りることは許されていないのですが、遅かれ早かれ兄貴も彼女奴等の身の回りの世話をすることになるはずですから良いでしょう・・・ご案内しますぜ。」

今はすっかり大亜門戸会の生活に慣れたチンピラが、かつての兄貴分に文字通り主客転倒してしまい目高組の頂点に君臨していた女達を今は自分たちが女奴隷の様に扱っている現状を自慢したくて、組事務所の地下に設けられた牢舎の方へと案内するのであった。

入口の階段を降りて一番奥に頑丈な鉄格子が設けられた一郭が目映った。

そして、其処に行くまでの薄暗い地下室の中にも何やら淫靡な雰囲気^{なま}を醸し出す道具が幾つも並べられており、男に案内されるまま歩を進めるテツは陰惨な気配を感じ取っていた。

先に進むチンピラがガチャガチャと音をさせて鉄格子の大きな扉の鍵を解錠し、どうぞと言うようにテツを招き入れた。

鉄格子の大扉を抜けると、中央の通路を挟んで二つずつ合計4つの牢が在ることが判った。

牢舎内は消灯されており僅かに薄暗い常夜灯が灯るだけであった。

視界が明瞭で無い分、嗅覚が冴えたのか、饅^すえたコンクリートの臭いに交じって何やら媚めかしい牝の匂いが鼻腔を擦るように感じた。

「これが今的大姐の姿でさ・・・」

さも愉快そうに懐中電灯を灯すと牢内のベッドに寝る晴江に向けて光芒を放った。

客との交接により疲労困憊してベッドで熟睡していた晴江は、懐中電灯の光を受けてわずかの間、布団を捲って光の方を見やったが直ぐに頭から布団を被ってしまった。

「こちらがお嬢・・・」

男が暁美の寝ている牢に光を向けた。

「こちらが奈和親分・・・」

懐中電灯の照らす光芒の中に浮かぶ奈和は目を覚ましているようではあったが、其処にはかつてテツが見知っている精悍な大親分の姿は無かった。

すっかりやつれ果て何やら小声で意味不明の言葉を呟いている奈和の姿を認めて、心の中で
‘お^{いたわ}しや・・・’と呟いた。

「そして、こちらがお竜姐でさ・・・」

異様な気配に目を覚ましベッドから半身を起こしていたお竜を懐中電灯の光が照らし上げた。

その光の輪の中に、裸身を布団で隠す、まぎれもないお竜の姿を認めて、「お竜姐！」と、思わずテツの口から叫ぶように声が漏れた。

その声に反応したように「テツ？テツなの？」と逆光で姿の見えない二人に向かって問いかけた。

「今晚はこれ位にしておきやしょう。明日になれば客の前に引き出される綺麗に着飾った彼女奴等の姿を拝めやすぜ・・・」と、言うとなつてテツを牢舎から連れ出すのであった。

翌朝女達を客の前に連れ出す一団の中にテツも交じっていた。

鼻歌を鳴らしながら好色な笑みを浮かべて、ずかずかと女達を閉じ込めた檻の中に入り込み、乱暴に布団を引き剥がし、檻の外に全裸の女を追い立てる男達の姿を醒めた目で見つめていた。

その姿は厩舎から家畜を乱暴に押し出す牧童の様に映った。

布団を筆り取られ、腕や身体を掴まれて無理やりベッドから引き起こされるお竜の姿を目にして、話に聞いた通り女達は一糸纏わず睡眠していたことが判った。

お竜のミルクを流したような白くきめ細かい肌と艶美な柔肌に鮮やかに彫り込まれた極彩色の肩から上腕に続く龍の刺青が鮮やかなコントラストとなって胸を締め付けた。

そして、何より、豊満な乳房や豊かな腰回り、そして股間にひっそりと繁茂した夢の様に霞む黒い叢が思わず眼底に焼き付いた。

テツは好色な笑みを浮かべ淫靡な目で見つめる男達の陰からその様子を窺っていたので、お竜達はテツの存在に気づいていないようであった。

男達に引き立てられるままに通路の奥に置かれた鏡台に腰を降ろし、化粧を始めたお竜の後姿を男達の陰からジッと見詰めた。

鏡に映ったやつれたて見えたお竜の顔が見る見る目高組当時の美貌を取り戻して行くのが目を捉えた。いやそれ以上に、目高組で賭場を預かっていた時の研ぎ澄まされた氷の様な怜悯な美貌から打って変わって何か妖艶な媚めかしさを漂わせ始めたお竜の後姿を憑かれた様に見続けていた。

客との交接が終わり女達を牢舎に連れ戻す男達の一団の中にテツも交じっていた。一步お竜が男に身体をひさぐために使っている部屋に足を踏み入れた途端、男と女の淫液が混じり合った異様な臭いや強烈な汚物の悪臭が鼻を衝いた。

呆然と戸口に佇むテツの姿に気付いたかつての弟分が、「テツの兄貴は今日が初めてだからビックリしたと思いますが、毎回の様に嗅いでいれば、こんなもんすぐ慣れなすよ。」と笑いながら話しかけた。

床には大小のバイブレーターや様々な女体責めの道具が転がっているのが目に入った。そのような淫靡な器具に責め立てられ脂汗を浮かべて身悶えるお竜の姿が連想された。いまだお竜の淫液に塗れ艶々と濡れ光る筒具を目にして、自分たちが送り出した後の数時間にお竜が変態客からどんな惨い目に遭ったのか想像できた。

「どうした？どうした？音に聞こえたお竜姐さんもこれしきの事で腰を抜かしたのか？」変態客からの激しい責めを受けて全裸のままベッドの上に力無く横たわるお竜を周囲を取り囲む男達が小突いたり足蹴にしたりして起き上がって歩行するよう促した。居た堪れなくなったテツが男達の中から抜け出すとベッドに寄り付き、お竜の手を掴んで自分の肩に担ぎ上げる様にした。

テツに身体を預けふら付く腰つきで歩みを始めたお竜は、「テツ？テツなの？」と弱々しく問いかけたが、意識はまだボウッとしている様であった。

お竜を抱きかかえる様に歩くテツの身体に温かく柔らかいお竜の身体が密着していた。そしてお竜の全身から放散される媚めかしい牝の芳香が鼻腔を擦った。

お竜の腕を首の後ろに回し両肩で支え、自分のもう一方の手を豊かに左右に張った腰に回して支えた。

目高組時代から畏敬の存在であった女性がこんなにもしっとりとした柔らかな肌を持っていたのかと実感した。

お竜に肩を貸して歩みを進めながら、グラリと態勢を崩した時、偶然に腰を支えていた手が股間に触れた。

指先にお竜の優しい茂みが絡んだ。

そして、その奥が何やら淫猥な粘液でぐっしょり濡れていることが分かった。

瞬間、残忍な客から秘奥に禍々しい陰具を突き立てられ苦悶の表情を浮かべるお竜の姿や、複数の男達に取り囲まれ、背後から豊満な乳房を揉みしだかれ、口には醜い男のモノを突き立てられ口腔による奉仕を強要され、前後の穴を同時に突き立てられ悲鳴を上げることも封じられ脂汗を流して悶える姿や、大量の浣腸液を腸内に注入され飛沫を上げて汚物を噴出する陰惨な姿が臉に浮かんだ。

目高組当時からお竜の近くに接することが出来たテツは、何時しかお竜に憧憬の念を抱くようになっており、お竜の意思に反して無理やり親分の愛人にさせられていると思い込み一方的に同情の念を持っていた。そして、大亜門戸会に捉われた今は残酷な客に身体を苛まれていると想像すると、一刻も早くこの地獄から解放してあげなければならないと思うのだった。お竜のたわわに熟れた柔らかな乳房が薄いシャツの生地一枚を通してテツの骨ばった胸に接していた。

お竜を牢舎に連れ戻しながら、お竜と密着する至福感に酔うテツであった。

深夜の寝静まった牢舎の中に、密かに忍び込むテツの姿があった。

「姐さん、姐さん、起きておいでですか？」

お竜の檻の前に立ち止まったテツが鉄格子を握り締め中の様子を伺いながら小声で呼びかけた。

その声に疲労困憊して熟睡していたお竜の身体がピクリと反応するのが分かった。

「姐さん、目高組時代にお世話になったテツでやすよ・・・」

「まあ！やっぱりテツだったのね！」

と、驚いて布団を胸に纏ったまま上体を跳ね起きさせた。

大亜門戸会襲撃に向かった三下ヤクザ達の多くは釈放された後、大亜門戸会から杯を受けて、かつての恩義も忘れて自分たちを嗜虐する側に回っている。テツもその一人なのと思った。

「姐さん、^{あつし}私は奈和親分の言い付けで姐さんの^{いえ}妾宅と親分の間を^{ベシリ}使い走りする役を仰せつかっていました。そして姐さんの家を訪れる度に何て美しい人だろうと思っていました・・・それで・・・姐さんの電話番号も空で言えるまでになっていました・・・それで、あの時、組事務所に電話して継がらなかった時、咄嗟に姐さんの番号が浮かんだんです！」

奈和親分はお竜との連絡にテツ一人を使っていた。奈和親分から預かった金品や伝言を届け

る度に自分の方に熱い視線を送るテツの姿を思い出した。

自分を情熱的な瞳で見つめる若者が単に自分に対して憧れのようなものを通り越して熱い気持ちを抱いていることは理解できたが、お竜の心は奈和親分一人のものであり、この若いヤクザに関心を持つことは無かった。帰りがけにお駄賃やお菓子を渡すと満面の笑みを浮かべて受け取る若者の印象だけが記憶に残っていた。

自分に熱い瞳を向けていた、今や敵側の組織に回った、あの時の若者が夜に紛れて自分を犯しに来たのかと身構えた。

「姐さん！済まねえ！あの時^{アッシ}私が姐さんに電話を掛けてさえいなければ、姐さんもこんな目に合わずに済んだものを！許しておくんなさい！」

鉄格子を握り締めたまま泣きじゃくるように声を上げた。

慙愧の念に打ちひしがれ嗚咽する若者の姿に、お竜も心を打たれた。

「もう良いんですよ・・あの時捕まっていなくても悪辣な剛沢の事だから陰謀をめぐらし、捕まえられて今と同じ事になっていた筈ですから・・」

鉄格子を握り締めたまま膝を着いて嗚咽するテツを慰める様に優しく言葉を掛けた。

「姐さん！今すぐ此处から私と供に逃げましょう！」

突然のテツの言葉に息を呑み込んだ。

そして、これは陰険な剛沢が新たな責めを課すために仕組んだ陰謀では無いかと一瞬心をかすめた。

「無理よ・・こんな警戒嚴重な所から逃げ出せる筈が無いわ・・貴方^{あなた}、私を檻から連れ出して、その後の策は在るの？」

一刻も早くお竜を檻から連れ出すことしか考えていなかったテツはお竜から問いかけられて、膝を着いたまま力無く首を横に振った。

そのガックリと項垂れる姿からやはりこれは直情径行な若者の衝動的な行動でしか無かったと理解してフッと溜息を吐いた。

此处から脱出するなら奈和親分も含めて四人揃わなければならない。そして、脱出に失敗したときの剛沢の報復を考えるとテツの申し出を断るしか無いと考えた。

「今は無理よ・・でも必ず機会はある筈だわ。その時を待ちましょう。」

と、自分の浅はかさに啜り泣く若者を慰める様に声を掛けた。

この様子は赤外線暗視カメラで牢舎内を監視し、マイクで牢舎内の音を拾っている監視室の

男達に捉えられていた。そして、緊急連絡を受けて駆け付けた剛沢も監視モニターの前に陣取り成り行きを窺っていた。

「どうしやす？テツの野郎を捕まえて絞め上げやすか？」

剛沢の方を振り返って監視人が問いかけた。

「いや、しばらくこのまま泳がしておこう・・・」と、ニヤッと片頬を歪めて応えた。

栄転祝い

その夜大亜門戸会の内部は異様な緊張感に包まれていた。ある意味前回の村崎親分と村崎會幹部を迎えた時以上の緊張感が漂っていた。

牢舎に閉じ込められたままの三人にも朝からその異様な雰囲気は伝わっていた。

とっぷりと日の暮れた闇の中で一台の黒塗りの国産高級車が大亜門戸会の敷地内に音もなく滑り込んで来た。

剛沢や黄原を始めとして大亜門戸会の幹部が居並んで高級セダンの到着を出迎えた。

後部座席のドアを開いて50年配の男と30代の半ばくらいの神経質そうな男が降り立った。

車を運転して来た50代半ばくらいの男が遅れて降り立った。

剛沢や幹部連中が、お待ちしておりましたと、一番若い男に恭しく挨拶した。

剛沢達は三人を売春部屋が設けられた建物の一郭に在る日本間に案内した。

部屋には既に膳が用意されていて三人分の脇^{きょうそく}息（座敷用のひじ掛け）と分厚い座布団が敷かれていた。

30代位の男を間に挟んで二人の50男がどっかりと座布団の上に腰を降ろした。

待ち受けていた剛沢の愛人たちが笑顔を振り撒いて男達に酒を注いだ。

「私の送別会を開いてくれると言うからついて来たけど、料亭だと聞いていたけど、随分風変わりな処だね？」

真ん中に腰を降ろした男が居心地悪そうに、左右の男達に視線を送りながらたずねた。

悠然と腰を落着けた両隣の男達は、亜紀達から注がれた酒を旨そうに咽に流し込みながら、

「いえいえ、緑川署長のご栄転のお祝いですから、普通の料亭では物足りませんので特別に趣向させて頂きました。」と、笑みを浮かべて喋った。

両側に座る二人の泰然とした態度に少し落ち着きを取り戻して、美女の注ぐ酒を咽に流した。緑川はS市の警察署に署長として赴任以来、署内で悪い噂の絶えない、この二人の警察官をなるべく避けて来たのだったが、最後の夜であった事と、目高組撲滅の手柄を自分に譲ってくれた事実上の功労者である二人に負い目もあり、個人的な送別会だとする誘いを断れずに連れて来られたのだった。

上等な料理と美酒に酔いしれ場が落ち着きを見せ始めた頃、右隣に座った次長の朱藤が切り出した。

「ところで本部長、目高組の解散の話は覚えていますか？」

「ああ、勿論覚えているよ。」

緑川が署長としてS市の警察署に赴任して来た頃、S市は古くから街を支配していた大暴力団の目高組と新興暴力団の大亜門戸会の抗争が絶えない治安の悪い地域であった。同期の上級公務員の中では緑川は貧乏籤を引いたと同情する声が上がっていた。

しかし、同席する朱藤と暴力団対策課の目黒の働きにより、目高組を銃刀法不法所持で検挙することに成功し、目高組を解散に追い込むことに成功したのであった。それ以来S市では、暴力団同士の抗争も無くなり、治安の安定した市と目されるようになっていた。

その目高組の解散と治安の回復の働きが大いに評価されて、今回他県の県警本部長に栄転することになったのである。

若くしての大抜擢に、この調子で昇進していけば、何時かは警察庁長官も夢ではないと噂された。

本部長の役職は転属後の役職であり現時点では署長のままであるが、朱藤も目黒もお世辞で本部長、本部長と持ち上げた。

「その目高組の元大姐が本部長にご挨拶したいと申しております・・・」

左隣に座った目黒がニヤッと笑って口を開いた。

朱藤も目黒も古くから市警に勤務し、実質的に市警を牛耳っている男達であった。

警察官は清濁併せ呑むだけの度量が必要と常々口にはしているが、実際のところ裏では暴力団との癒着が噂される男達であった。

目高組の大姐と聞いて緑川の顔がサッと引き攣った。

「まあまあ・・・大姐も今ではすっかり心を入れ替え、別に本部長に復讐しようなんて気持ちは全く有りませんよ。」

緊張感を浮かべる緑川に余裕の表情で笑い掛けた。

「どうぞ後ろをご覧ください。」

緑川に背後を向くように促した。

障子が左右にサッと開けられ、其処は時代劇に出てくるお白州のセットの様であった。

玉砂利の敷かれた庭の上には筵が敷かれ、浅黄色の囚衣を身に纏った三人の女が後ろ手に女囚縛りに緊縛されて粗筵の上に正座させられていた。その女達の背後には江戸時代の捕縛の役人のような恰好をして着物の裾を端折った股引き姿の男達が六尺棒を手にして直立していた。

「目黒！何だ、これは？」

詰問するような目で睨みつける緑川の視線を逸らすと、

「まあまあ、栄転祝いのほんの座興ですよ・・・」と、しれっと応えた。

「中央に座るのが目高組の元大姐の奈和晴江、その右に座るのが娘の奈和暁美、左に座るのが賭場で壺を振っていた二つ龍のお竜こと、本名鮫島常子という阿婆擦れ女ですよ。」

と、面白そうに説明した。

黄原達により牢から引き出され、何も下着を着けない裸の上から直接囚衣を着せられ、後手に縛り上げられ、30分ほど前からこのお白州を模した庭の粗筵の上に正座させられていたのであった。

正面の日本間の室内の灯りに照らされ障子に三人の男の後姿の影が浮かび、室内では宴会が行われていることは理解できたが、障子を開け放たれ室内に居た男の姿を見て、晴江もお竜もハッと息を呑んだ。

中央に座る若い男に面識は無かったが、両側に座るのは何度か目にしたことのある朱藤と目黒であった。

この二人の悪徳警官としての噂は裏の世界では有名で、捜査情報を金で売ったり、事件を揉み消す代償に金品を要求されることもあった。

考えようによっては、裏社会の人間に取って便利な存在とも言えたかも知れないが、昔気質のヤクザで一本気な奈和親分は、'ヤクザよりよっぽど悪人だ！'と露骨に嫌悪していた。

その朱藤と目黒が酒に酔った粘っこい目で女囚姿の女達をジッと見詰めていた。

女囚姿であるので女達の長い髪は、結い上げられず、後ろに流したままであり紐で襟足の所に一本に括り上げられているだけであったが、逆に女本来のぞっとするような艶美さを醸し出していた。。

庭の各所に設けられたスポットライトの光に照らされ、素肌が透けて見えるような薄い囚衣一枚を身に纏っただけの女達の妖艶な姿に緑川の咽がゴクリと鳴った。

老獺な目黒と朱藤は、この緑川の小さな変化を見逃さなかった。

悪徳警官の二人はこれまで随分とこの若い署長を自分達の都合の良いように教育して来た積りであったが、今回他県への転出に当たって、正義感を呼び覚まし、監察にでも訴え出られたら堪らないと、自分たちと同じ悪業を積ませるため此処に連れ込んだのであった。

女達の目に、警察の三人の背後に剛沢が立ちニヤニヤと笑っている姿が映った。日本最大級の暴力団の団体組織である村崎會に自らの地保を築いただけで無く、既に警察権力にまで癒着してしまった剛沢の圧倒的な力をまざまざと見せつけられる思いであった。

驚愕の目で階上の男達を見詰める晴江達に後ろに立った役人の姿をした男達が、「お奉行様に対して頭が高い！」と、手にした六尺棒で背中を押し付け、無理やり土下座の姿勢を取らせた。

男達の手で顔面を玉砂利の上に押し付けられながら、このような悪徳警官にも屈服しなければならぬのかと、悔しさに歯噛みした。

「目高組大姐奈和晴江以下三名！賭博開帳、一般市民への暴力、売春斡旋、麻薬販売など、その方等の罪は明白である！」

目黒が立ち上がって、日本間から濡れ縁に進み出て芝居がかった声を発した。

「本部長、お裁きを・・・」と、朱藤が詰め寄った。

どう対応したら良いのか判らずドギマギする緑川を見て、

それでは私が代わって・・・と口にする、「その方等三名に磔刑を申し渡す！」と、手にした扇子を突き出して、これまた芝居がかった大きな声を発した。

たちまち庭の奥から白木の磔柱を担ぎ上げた男達がわらわらと登場した。

玉砂利の上に三本の磔柱を横たえ、粗莖の上で土下座させられていた三人を立たせて磔柱の方に歩ませた。

これからまた残忍な男達により陰惨な目に合わされるのか―と、覚悟した女達は白木の太い角材を組んだ柱の方に追い立てられて行った

「朱藤、目黒、これはどういう事なのだ？」

何かこれから非合法な事が始まるのでは無いかと不安を感じた緑川が、二人の方を見て問い詰めた。

「なに、お芝居ですよ！お芝居。本部長栄転をお祝いしてのほんの座興ですよ！」

と、磔柱に拘束されていく女達を淫靡な目で見つめながら笑みを浮かべて答えた。

磔柱は男柱で両手を十字に横棒に固定するだけで無く、キの字に組んだ下方の横棒にも両脚を扇のように開かせて固定した。

囚衣の下は腰巻も何も一切の下着を身に着けていなかったの、階上から眺める男達に向かって大きく股間を開く姿勢を取られ、縄掛けの作業をする間に白い大股の間に秘められた部分がチラチラと男達の目に映った。

上体を柱に固く固定するよう、豊かに盛り上がった胸の前で X 字型に交差するよう縄を掛けられ縄止めが終了した。

女達が磔柱の上で身動きできないように強く緊縛されていることを確認した男達は最後の仕上げとして、囚衣の襟を掴むとエィ！と左右に引き開けた。

広げられた囚衣の前からこぼれ落ちる様に豊かな乳房が露出した。

その瞬間、緑川が息を吞んで身を乗り出した。

次に扇の様に広げられていた股間の中心部が露わになるよう囚衣の裾を捲り上げ、腰を縛った縄の間に裾を通して固定した。

この悪徳警官達に秘奥を晒す屈辱に柱に固定されたまま、奥歯を噛み締め、悔し気に身悶えた。

今や緑川は、声を上げることも出来ず、血走った目で女達のその部分を見詰めていた。

「どうです？ツルツルで中まで丸見えでしょう・・・事前に女達のアソコの毛を剃り落しておいたんですよ・・・」

驚きのあまり棒立ちとなる緑川の背後に近づいた剛沢が小声で説明した。

見開いた目が注視する先には、柔らかな股間の媚肉を縦一文字に割る蠱惑的な亀裂が走っていた。

夜の闇の中、庭の中に幾つも設けられたスポットライトが浅黄色の囚衣の下から雪白の素肌を晒す女達を照らし上げていた。

女達を磔柱に固縛し終え、準備が全て整うと、何人もの男達が集まって磔柱を抱え上げ、ワッショイ・ワッショイとまるでお神輿を担ぐように頭上高く掲げて運んだ。

庭には ^{あらかじめ} 予め磔柱を立てるための穴が掘られており、柱の基部をその穴に差し込むと、大勢で女を縛り付けたままの柱を立てていった。

緑川達が居る和室の前面に、申し訳程度に囚衣を身に着けただけで、成熟した乳房と婀娜っぽい淫裂をまざまざと晒す女を固縛した磔柱が三本立てられた。

驚愕の表情を浮かべる緑川はもう一言も発することなく、目前に立てられた磔柱上の三人の女の剥き出しとなった蠱惑的な乳房と妖しい魅惑を漂わす大きく広げられた股間に釘付けとなっていた。

その様子を朱藤と目黒の二人が舌なめずりしながら窺っていた。

時代劇かかった着物を尻からげにした男達が手に手に竹やりを持って走り寄って来た。

男達の手にする竹棒の先には男性器を模した棒状の物が固定されていた。

男達はその淫猥な形状を見せつける様に、磔柱上の女の顔の前で三本の竹やりを交差させた。その毒々しい色彩を帯びた禍々しい形状の淫具をちらりと目にした女達であったが、このように雁字搦めに縛られた状態では、もはや惨めな敗残の姿を晒すしかないと悲しく諦め、目を閉じ唇を固く結んだ。

竹竿の先に取り付けられていたのはバイブレータで虫の羽音のような不快な音が耳に届いた。

左右に陣取る二人の男が手にする竹やりが剥き出しの乳首をチロチロと刺激し、中央に立つ男の手にする竹やりの先端がすっかり剃毛され隠す物を失った股間の谷筋に沿って上下した。

直接手に握り締めて肌を襲うバイブの強い刺激ではなく、長くてしなやかな竹竿の先にバイブが取り付けられている事により、そのもどかしい刺激に逆に性感を掻き立てられるようであった。

何時しか、もどかし気に身体を蠢かせ、ふらふらと揺れる竹やりの先端に自らの性感帯を押し付けようとする淫靡な動きが見られた。

卑劣な男達の目に浅ましい姿を晒すことは耐え難い苦痛であったが、自分達ではどうにもならない絶望的な状況の中でせめて快楽の淵に身を投げた方が救いになると信じる様に、女達は快楽源を求めて身悶えさせた。

「ほら、見て御覧なせい・・・股の間があんなに濡れて来やしたぜ・・・」

今は強制されずとも女達に目が釘付けとなっている緑川の背後から剛沢が囁きかけた。

剛沢の指摘する通り、血走った視線の先には、剥き出しの秘裂から^{おびただ}夥しい愛液を滴り流す女達が居た。

異様な光景を目の当たりにして、緑川の鼓動は早鐘の様に強く激しくなり、股間のモノは痛

いほど大きく膨張していた。

異常な事態の中で緑川自身は気付いていなかったが、実は緑川の飲み物には催淫剤が溶かされていたのだった。その薬の効果が男の肉欲を体内から激しく燃え上がらせていた。

興奮して喉の渴きを覚えた緑川は次々と飲み物をあおったが、それは更に彼の興奮を昂進するものでしかなかった。

「ああ・・・いや・・・」

中央の男の持つ竹やりが、十分に濡れそぼった柔らかな女肉を左右に押し分け、ズブズブと内部に没入し始めた。

胎内を侵食するバイブの振動に併せる様に女達の下腹がブルブルと震えた。

目高組の女達の肉体改造に参加した経験を持ち、女の肉欲を煽り立てるコツを熟知した男達は、女の反応を見ながら、ゆっくりとバイブを抜き差しした。

それに呼応するように左右の男達も竹竿の先端のバイブで乳房や体中の性感を刺激した。

全身にびっしょりと汗を浮かべ、バイブの心地良い振動に身をゆだねる様に陶醉の表情を浮かべた。

「何だ！もう往生しそうか？こんな細いバイブでイッてもつまらないだろう・・・」

と、中央で竹やりを操作する男が妖しく蠢く肉胴からバイブを引き上げた。

女肉を襲っていた竹やりを引き抜かれ、満たされない思いに未練気に穂先を見詰めた。

「代わりにこれで往生を遂げてもらおう・・・」と新たな槍を取り上げて見せつけた。

その太い木の槍と先端に取り付けられた異物の形状に、緑川の方が声を上げた。

それは並みの男性のモノを遥かに凌ぐ形状の物で、直径が6センチ以上ある張型の表面には何個ものイボ状の突起が付けられていた。

「ああ・・・いや、いや・・・」何度も太い張型をその部分に咥え込んで来た女達ではあったが、その巨大なモノに恐怖を覚えたように身を悶えさせた。

「磔の刑で殺されるお前たちだ！これくらいのモノでイッて貰わないと話にならないぜ・・・」

女の恐怖にまるで斟酌することなく、まだ柔らかく口を開いたままの女芯の中心にその巨大なモノをあてがった。

ヒッ！巨大なモノが柔らかく鞣された媚肉の間を分け入って来る感触に、短く悲鳴を上げて身体を硬化させた。

そんな女の反応を逆に楽しむように男は力を込めて槍を突き進めた。

表面のイボイボが周囲の柔らかな襞を巻き込みながら、ジワジワと胎内に沈んでいった。

この様子を緑川は血走った目で見守った。彼の股間は痛いほど膨れ上がっていた。

アッアッと股間から襲い来る強い衝撃に、目は裏返り、激しく胸を上下させてそれを呑み込んで行った。

張型の太い直径を受けて華洞はこれ以上ないほど大きく押し広げられ、ピッシリと隙間なく女陰がそれを咥え込んでいる様子が、何か所も備え付けられたスポットライトの光芒により影も作らず照らし上げていた。

「何が、アッアッだ！本当は気持ち良いくせに！今からこれを動かしてやるからな！」

華洞の最奥まで張型の先端が到達したことを確認した男が残酷に声を掛けた。

「アアッ！イヤ！イヤ！動かさないで！」

ただ膣内に収めるだけでも苦痛なのに、それを激しく出し入れされる激痛を想像して激しく首を振った。

「なに、遠慮するねえ！」

女の悲鳴を無視して男は女の中心を貫いた槍を上下に動かし始めた。

まるで内臓を体外に引き釣り出される様な激痛に悲鳴を上げた。そしてそれを体内に押し戻される力に苦悶の表情を浮かべた。

荒い息を吐き短い悲鳴を繰り返す女の股間に容赦なく槍を突き刺し続けた。

左右の男達もそれに呼応するように竹やりの先に取り付けたバイブで女の性感を刺激し続けた。

張型を先端に取り付けた槍の上下する速さが次第に早く激しくなり、女がイクのも後僅かのみられた。

最後の一突きで女が絶頂に達したと同時に、アーッと緑川が悲鳴のような声を上げた。

見る見る彼のズボンの股間部分にシミが広がっていった。

余りにも扇情的な場面にズボンの中で射精してしまった瞬間であった。

慌てて亜紀達が濡れたおしぼりを手に、ズボンを降ろさせ、下腹を剥き出しにすると、栗の花の匂いがするそれを濡れ布巾で優しく拭いた。

すっかり気が動転してしまっている緑川は、まるで人前でお漏らしをしてしまった子供の様に、大人しく亜紀達の作業に身を任せていた。

催淫剤を盛られた緑川のそれは、放出を遂げたにも関わらず固く緊張したままであった。

下着とズボンは夥しい精液によりびっしょりと濡れていた。

亜紀はズボンとパンツを脱がすと替えのパンツとパジャマのズボンを穿かせた。

「ズボンの洗濯が乾くまで此处から帰れないから今夜は此处に泊めさせて貰うことにしましょう。」

大人しく亜紀に着替えを手伝わせ、しょげ返った表情を浮かべる上司を見詰めながら朱藤が口を開いた。

「そうなさいませ。」

横から剛沢が声を上げた。

「それなら、そんな股の間に濡らしたままでは気持ちが悪いですから、お風呂を使いなせえ。風呂に入っている間に寝床の用意もさせておきます。」

晴江が売春に使うために作られた部屋には大きな露天風呂が設けられていた。

まるで温泉宿の露天風呂のように大きな天然石を幾つも配置して造られた湯船は、大人三人が浸かっても十分に余裕があった。

見上げる漆黒の夜空には幾つか星が瞬き、心地良い湯と共に男達をノビノビとした気分にした。

しかし、緑川のその部分はいまだに勃起状態にあり、先ほど目の当たりにした凄まじい光景が臉から離れず神経は興奮したままであった。

心地良い湯に浸りながら、「それにしても本部長は、流石に、お若いすな！いまだにピンピンしていらっしゃる！」

いまだに勃起を続けているのが催淫剤の影響である事を知りながら緑川のそれを指して朱藤が口を開いた。

朱藤から股間の恥ずかしい状態を目撃され、署内でもとかく悪い噂のある男達から指摘された事を恥じるよう素振りを見せた。

「いやいや、その大きさと云い硬さと云い、私たちの若い頃と比べたら段違いですよ！大きなモノを持っている人は羨ましいですな！」と、目黒がお世辞を口にした。

部下二人の前で醜態を晒してしまった緑川は恥ずかしそうに、二人に挟まれて、無言で湯に浸かっていた。

外目にはショックですっかりしょげ返ってしまった様に見えるが、体内では未だにクスリが効果を発揮し、やり場のない性的欲求に悶々としていた。

緑川自身はそれがクスリを盛られたためだとは疑わず、これまで目撃したことのない凄まじい淫虐の場面の影響だろうと信じていた。

その時、「お背中を流しに来ました・・・」と、三人の女が浴場に入って来た。

ふと見上げるとそれは先ほど磔柱の上で凄まじい往生を遂げた目高組の女達であった。

三人とも大きなバスタオルで胸から腰まで覆っていたが、そのバスタオル越しに見える体のラインとタオルから出た魅惑的な白い大腿に視線を奪われた。

「へへ・・・先ほど申しあげました通り、目高組の大姐たちが本部長に挨拶に参りましたぜ。」湯船に浸かったまま悪徳警官達が相好を崩した。

「そんな所にポーッとつつ立って無いで、三つ指着いて本部長にご挨拶しねえ」朱藤に命じられて三人は天然石を敷き詰めた洗い場の上に膝を着き、両手を前に深々と頭を下げた。

身体に巻き付けたバスタオルの陰から豊かな胸の谷間が奥まで見えそうであった。

三つ指を着いて上体を屈めて正座する女達に、「それじゃ姐さん方、本部長に自己紹介しねえ。」と、本名、年齢、職業を告げる様に命じた。

一番端に正座する晴江に先ず自己紹介するように命じた。

「奈和晴江です。年齢は44歳です。職業は・・・」

「職業は何だ！」言い淀む晴江に目黒が迫った。

「職業は・・・」と、次の言葉が出ず、男達を前にして涙を滲ませて顔を激しく左右に振った。

「職業は売春婦だろう！」と、大声を上げた。

自分達の置かれた立場を再認識させるように卑劣な男から非情な言葉を浴びせられ屈辱感に唇を噛み締めた。

「職業は・・・売春婦・・・です」

惨めさを噛み殺して小さく声を発した。

そして、言い終わるとポーッと貌が赤くなり、嗚咽を必死に堪える様子がうかがえた。

「かつては羽振りの良さを誇っていた大暴力団の親分の女房が今では落魄^{おちぶ}れてしがない売春婦か！」朱藤が大声で笑い上げた。

朱藤も目黒も大きな暴力団の親分の妻であった女に、今の自分はただの売春婦だと口にさせ心の中で快哉を上げた。

「奈和暁美です。 年齢は21歳、職業は・・・職業は・・・売春婦です。」

暁美も涙を堪えて屈辱の言葉を口にした。

「母娘そろって男に身体を売る事を商売にするなんて、何か淫乱の血筋が在ったんじゃないか？」

屈辱の言葉を言わされ打ちひしがれる暁美を目黒が言葉で蹴った。

「二つ龍のお竜こと本名 鮫島常子。年齢は35歳。職業は売春婦です。」

お竜も言い終わって改めて現在の自分の置かれた状況を思い知らされて首を左右に振った。

「お竜姐さんも、そんな色っぽい立派な体を持っているんだから、賭場で骰子を転がしているより、男のタマを転がしている方がよっぽど合ってたんじゃないか？今の職業は天職だと思うだろう？」と、卑猥な言葉で蹴った。

その後も、無理やり自分達が如何に淫らな女で、常に男に抱かれていないと耐えられない等と卑猥な言葉を強制させ、好きな体位や得意な性技等を喋らせ、落魄した女達を精神的に蹂躪した。

「ほら！本部長を見てみろ！お前達のせいでカチコチじゃないか！」

暖かな湯に浸かりながらも催淫剤の影響で半勃起状態が続いていた緑川の股間のモノは艶美な三人の女を目にして再び固く隆起し始めていた。

目黒たちに指摘されて慌てて股間を押えようとしたが、硬直したモノは押さえ付けようとする両手のひらの奥から突き出していた。

「今までの罪滅ぼしに、先ず、本部長の悩みを解いて差上げろ！」

目黒たちに命じられて、三人の女は身体に巻いていたバスタオルを取り去ると、湯船に浸かる緑川の方に向かった。

血走った緑川の目に近づいて来る女達の揺れる豊かな乳房と鮮やかに切れ上がった秘裂が映った。

「止せ！やめろ！」

警察官のトップとしての理性がそう口にさせたが、女達は艶然と微笑むと、周囲から柔らかく緑川の身体に触れ、洗い場に上げ、プラスチックの椅子に座らせた。それはソーブランドで使われる種類の背の高い椅子であった。

「大姐のディープスロートの技は、ヤクザの親分の女房にしておくのは惜しい特技なんですよ！じっくり味わってはどうですか」

背の高い洗い椅子に腰を降ろした緑川の前に晴江が跪き、少し足を開かせると、股の間に顔を埋めて行った。

勉強一図でこれまでこのような経験の無い緑川は晴江の柔らかな唇が屹立したモノに触れた瞬間アッと声を上げ身体を強張らせた。

初心な男の緊張を解くように、隣に立ったお竜が良く張った乳房で緑川の頬を撫でる様に愛撫した。

背後から曉美が豊満な乳房を手で支え、背中性感帯を乳首の先で転がした。

産まれて初めて女性から性接待を受ける緑川は、これが現実のものだろうか？と目眩く刺激と薬の影響にも煽られ、アアー！アアーッと余りの快感に声を上げていた。

巧みな女達の技に煽られ警察官のトップとしての理性も喪失し、何時の間にかお竜の押して出る乳房を積極的に口に含んでいた。

股間に顔を埋める晴江は緑川のモノを口内深く呑み込み、咽喉全体を使って愛撫していた。見下ろす緑川の目には背中に彫られた極彩色の騎龍観音の刺青が毒々しく映り、若い女性として描かれた薄着姿の観音像が奥深い性の桃源郷に誘っているように淫靡に蠢くのが見えた。

晴江のディープスロートを受け入れ、憑かれたように女達の乳房を揉み上げる緑川の様子に、墮ちたな・・・と、湯船に浸かりながら朱藤と目黒が目を見交わしてニンマリと笑った。

今回の朱藤と目黒の計画は警察官の模範となる様な謹厳実直の警察キャリアを自分達のような墮落した警察官におとしめる事であった。

こんな勉強だけの青二才を墮落させるなど容易いことだと、女達の性技の前に感極まった様な声を上げ身体を震わせ続けるのを見て心の中で呟いた。

アアーッ！と一際大きな声を上げると身体をブルブルと震わせて晴江の口内に熱い飛沫を吹き上げた。

晴江は慌てる様子も無くその粘っこいモノを嚥下して舌先で緑川の肉塊を拭った。

興奮の極みにある緑川に、左右からお竜と曉美が交互に唇を押し当てた。

頭の中は濃密な桃色の霧に包まれたように、興奮して理性を失った緑川は夢中で女達と舌を絡め合った。

「それじゃ、早速身体を洗ってもらおうか。」

朱藤と目黒が水音を立てて立ち上がると湯船の縁を跨いだ。

二人とも前を隠すことも無く大股を開いて浴槽から上がったので、股間から醜いモノがデロリとぶら下がっていた。

そして洗い場に並べられたプラスチック製の風呂椅子の上にどっかと座った。

手拭いで股間を隠すことも無く、これ見よがしに大股を開いて座ったので股間の生肉が椅子からはみ出して垂れ下がった。

晴江とお竜が二人の背後に立ち、石鹸を泡立て背中を洗った。

気持ち良さそうに女達に背中を洗われながら、本部長もどうぞと手招きした。

既に二度も放出したのに、いまだ勃起状態を続ける股間のモノを部下の目に晒すことを気後れするのか、手拭いで前を隠し、前屈みになって、そっと目黒と朱藤の間に腰を降ろした。

緑川の背後に暁美が立ち、石鹸で泡立ったスポンジで背中を洗い始めた。

石鹸の泡が背中をなぞる余りの気持ち良さに振返ると、丰满な胸の作る深い谷間が目に飛び込んだ。

先ほどは突然の事態に狼狽していたので意識しなかったが、こうして肌を接するような近さに居ると若い女の華やいだ香りの様なものが鼻腔を刺激する様に感じた。

隣で朱藤と目黒の背中を流す晴江とお竜の方に目にやると、暖かな湯気に当たって上気した肌に極彩色の刺青が鮮やかに浮き上がっているのを見てドキリとした。

「おう！背中だけじゃなくて前も洗ってくれ！」

朱藤が晴江に呼び掛けた。

ことさら股間のモノを見せつけるように、椅子に腰かけたまま股間をガバッと広げた。

ジャングルの様に密生した剛毛の下から黒みを帯びた醜い肉塊が垂れているのを目にして、ハッと目を背けた。

「おう！俺も背中だけじゃなくて身体中洗ってくれ！」

と、隣で腰掛ける目黒が口を開いた。

男達の前に正座した女達が掌でシャボンを泡立て、男の肉を洗った。

敏感な性感帯を石鹸を塗された柔らかな指先で愛撫され、その気持ち良さに呻くように声を上げた。

ふと目黒の股間を洗う晴江の方に視線が行った。先ほどは身に残された囚衣の間からしか素肌が見えずよく分からなかったが、肩から二の腕にかけて、そして両脇から大腿に向かって隙間なく極彩色に彩られた図柄が彫り込まれている様子が目に入った。

ただ首筋から刺青に彩られた乳房の間を通して腹に向かい、更に最も女で在ることを証明す

るなだらかな小丘に架けては、刺青は施されておらず雪の様に白い素肌を晒しており、無駄肉の無い腹の中央に存在する縦長の形の良い臍と、そして何より女の命を閉じ込めた大腿の間に視線が注がれた。

男の博徒の様に素肌に彫り込まれた威圧的な模様の間に、ひっそりと手付かずの女の溪谷美を浮かべており、その媚めかしいたたずまいが、剃毛されているため隠すことも叶わず、まるで童女の様に妖艶な姿を晒しており、男のような勇壮さと少女のような可憐さが不思議な対比を見せており緑川の目を釘付けにした。

緑川の熱い視線が自分のその部分に注がれている事に気付いて、掌で覆い隠そうとしたが、朱藤から邪険に払われた。

「お前も本部長に裸をお見せしたらどうだ！」と、目黒が椅子に腰かけたまま暁美に命じた
「コイツこの女の娘のくせに誰に似たのかデカイオッパイを持っているんですよ」

「その分母親の方はクリちゃんが人並外れてデカいぜ！」と、朱藤が混ぜ返して大笑いした。
目黒の命令で裸身を鑑賞し易いように、洗い椅子に腰を落とす緑川の前に暁美を立たせた。
目の前に腰掛け、恥ずかしそうに未だ怒張を続けるモノを手で覆い隠そうとしている緑川の事を暁美は、ふと可愛いと思った。

これまで此処にやって来た客は女と遊び慣れた男ばかりで、肉欲を満たすため自分の支払った対価以上の快楽を如何にして女達から絞り出すかしか興味の無い男達ばかりだった。

恐らくこの男は今まで女と肌を接せるような遊びも未経験なのでは無いかと想像した。

それでこの場に場違いな初心な男を揶揄してみたくなったのだ。

たわわに垂れた大きな乳房を両手で支えて緑川の眼前で淫らに腰を蠢かせながら振って見せた。

眼前で繰り広げられる淫靡な乳房の舞に、何時しか緑川の目は血走り、その妖しい動きに釘付けとなった。

暁美により劣情を掻き上げられていく緑川の様子をニンマリと笑みを浮かべて二人の悪徳警官が見詰めていた。

股間を覆い隠すのも忘れて、両手を揺れ動く乳房に延ばそうとした。

剥き出しになった陰茎が痛いほど隆起しているのが映った。

そんな緑川の劣情をはぐらかすように腰をうねらせて意地悪く手をそらせた。

そして次に、股を大きく広げて腰を突き出し、両手を秘列の両側の肉丘に掛け、秘園を緑川の前に突き出した。

両指で秘裂を一杯に押し広げ、鮮やかなピンク色に染まった満開の女肉を見せつけた。

淫靡な腰の動きと共に、すぐ目の前で毒々しい女の花が舞い踊っていた。

暁美も自分の恥ずかしい部分をこの初心な男の眼前に見せつけながら、不思議と舞い上がって行くのを感じていた。剥き出しにした花園がじっくりと蜜に濡れて行くのを感じていた。

最早、緑川は市警のトップとしての理性も失い、舞い踊る女の秘奥から立ち上る芳醇な微香を鼻腔一杯に吸い込み、目は剥き出しにされた部分に釘付けとなってしまうていた。

そろそろとその部分に指を伸ばそうとするのをいなす様に身体を離すのであった。

暁美の手中によりすっかり絡め取られてしまった緑川の様子を二人の悪徳警官は笑いながら見詰めていた。

緑川から身体を離れた暁美は今度は背中を向け、尻を鼻先に突き出す様にした。

両指で尻たぶを押し広げ、その猥褻な狭間を見せつけながら、豊かに張った白い尻肉を舞わした。

苛烈な肉体改造により鍛えられた二つの淫孔が、まるでおねだりの言葉を口にするようにパクパクと開いたり閉まったりしていた。

夢遊病者の様に緑川が手を突き出し、指先を蜜を滴らせる花唇に突き立てた。

その瞬間、いや〜ん！と甘えた声を上げ腰を震わせた。

暁美の媚声に、ふと我に返って慌てて手を引っ込める緑川の様子に、二人の悪徳警官は大笑いした。

緑川の脳裏に温かく湿った肉洞の感触が残った。

「もう良いだろう。そのデッカイおっぱいで本部長の背中をお洗いしろ！」

目黒に命じられて、自分の胸に石鹸の泡を擦り付けると、椅子に腰を降ろす緑川の背中に G カップ以上ありそうな巨乳を押し当てた。

柔らかでそして張りのある女の素肌が密着して、その気持ちのいい感触に声が漏れた。

暁美は神経質そうな男の快感を昂じさせる様、背中に乳房を密着させたまま、くねる様に上体を蠢かせた。

僅かに石鹸の被膜一枚を通して密着する若い女の柔らかな体が背中を擦過し、そのヌルヌルとした甘美な刺激が、柔肌と接する皮膚の神経を通して緑川の脳髓を痺れさせて行く。

催淫剤の効果で勃起状態にあった男根がピクピクと痙攣し、下腹に密着するようになっていた。

男に身体を密着させて洗う行為は女の性感も刺激するのか、曉美も口を半開きにして喘ぐようにハアハアと呼吸していた。曉美の口から漏れ出た甘い吐息が緑川の鼻腔を優しく擦った。

目黒が椅子に腰かけたまま無言で右手を横に突き出した。

目黒の意図を察したお竜が自分の股間に泡を塗すと、目黒の手首を握って、差し出された腕を跨いで剃毛され滑々する股間に押し当てた。

そして、尻を振るように腰を蠢かせると、肩から手頸に至るまで亀裂に押し当てたまま往復運動を始めた。

「俺は目高組の殴り込み部隊を銃刀法違反の嫌疑で検挙したあの夜、陣頭指揮に当たっていたんだぜ！あの時の青沼の呆気にとられたような間抜け顔が今でも頭から離れないぜ！」

お竜に股間を使ったサービスを続けさせながら、目黒が突然自慢そうに笑い始めた。

「全くよう！自分たちが騙されているとも気付かずノコノコ自分から罠に飛び込んで来て！全く間抜けな組だぜ！」

呼応するように朱藤もゲラゲラ笑い声を上げた。

剛沢と密約を結び目高組を崩壊に導いた悪徳警官達に我が身を使った肉体奉仕をしなければいけないのかと思うと女達は断腸の思いに駆られた。

しかし、剛沢の圧倒的な力の前に屈した自分達には、もはや逃れられる道は無いと諦めるのであった。

剛毛に覆われた筋肉質の太い腕が、微妙な神経を散りばめた秘奥と触れ合い、お竜の身体に得も言えぬ刺激をもたらしていた。

隠すべき体毛を奪われ、まるで二枚貝のような姿を晒す柔らかな肉壁に挟まれて擦り上げられる腕の感触に浸っていた目黒は、お竜の雌芯から石鹸の泡とは違う何やら温かいものが溢れ出ているのに気付いた。

そして、お竜に手頸を掴まれたまま腹を揺すって笑い上げ、「このアマ、俺の腕にスケベ汁を擦り付けているぜ！」と、大声を上げた。

隣では晴江が両手に泡を塗して、朱藤の前に回り股間のモノを洗っていた。

白くしなやかな指先で陰囊から亀頭の先端まで洗われる快感に酔いしれていた。

両手で包むように幹を洗ったり、股間から垂れ下がった袋を優しく揉むように洗ったり、またまた黒光りする亀頭部分を指の腹で撫でまわしたりして刺激を与え続けた。

晴江の巧妙な技巧に椅子に腰を降ろしたままの朱藤の背中がウッウッと断続的に震える様

になって来た。

晴江が優しく愛撫する亀頭の中央に醗く開いた鈴口から透明の液体が滲み出て来るのが見られた。

お湯を掛けて石鹸の泡を濯ぐと、上体を屈めて股間に顔を埋めた。

ムカつく男の臭いと石鹸の芳香が混じった複雑な臭いを発するそれを口中深く呑み込んで行った。

銀子に仕込まれたディープスロートの技を駆使して、この目高組を崩壊に導いた悪徳警官をきりきり舞いさせて自失に追い込むのが、今出来る唯一の復讐であると思いながら・・・

「前をお洗いしますので立って下さい。」

背後から身体を洗っていた暁美が緑川の前に回って告げた。

椅子に腰掛ける緑川の眼前には、左右に良く張ったボリュームのある腰回りと、剃毛されて剥き出しにさらけ出された肉感的な亀裂があった。

これまでの予想もつかない事態での連続で、自分の頭で考える能力も喪失してしまった様な緑川は暁美に促されるままにフラフラと立ち上がった。

直立した緑川の前に膝ま付いた暁美は、天を向くように屹立する肉塊を両の乳房で挟んで、そこからはみ出した亀頭部分に唇を押し当てた。

Gカップ以上ある巨大な乳房で陰茎をユサユサと揉み上げ、敏感な亀頭部分に優しく唇をはわせた。

その気持ちの良い刺激に呻き声の様な声を上げて腰をピクピク痙攣させた。

鈴口から透明の液が滲み始めたことに気付いて、舌を伸ばして肉棒に穿たれた井戸から男の樹液を舌先で絡め取った。

巨大で柔らかな乳房で緑川のモノを^{しこ}抜き上げながら、最後の手順として剥き出しになった先端部を口中に含んで行った。

「おう！こちらの穴の周りも洗ってくれ！」

剛毛に覆われていた腕を摩擦するお竜の陰唇の心地良い感触に酔い痴れていた目黒が洗い椅子から腰を上げるとそのまま尻をお竜の方に向けた。

この男は全身濃い毛に覆われており、陰茎から後ろに続く股の間もビッシリと剛毛が生い茂っていた。

「へへ・・・お前の舌を使って尻の穴も良く洗うんだ！」

洗い場の床に正座するお竜の目に片脚を洗い椅子に載せて大股を開いたまま剛毛に覆われた肛口を見せつけた。

この大亜門戸会と手を結んで目高組を崩壊に導いた悪徳警官のむくつけき排泄口を見せつけられ怒りと嫌悪の表情を一瞬浮かべたが、抵抗しても無駄であると諦めの気持ちが込み上がって来ると、目を固く閉じると崖から身を投げ出す思いで、憎むべき男の開け放たれた股ぐらの間に顔を埋めていった。

死ぬ思いで、舌先を使ってその周りを覆っていた濃い毛を掻き分け、排泄器官を剥き出しにした。

「そうだ、そうだ！舌を使って綺麗に周りを洗うんだ！」

その周りを丁寧に撫で上げるお竜の舌遣いに満足したように声を発した。

「そうだ・・・上手だぞ！・・・そのまま舌を突き立てて中まで洗え！」

お竜の絶妙な舌使いに下半身をピクピク痙攣させて感激に浸りながら、更に露骨に命令した。声は上ずり、股間の醜いモノはパンパンに膨張し突き立っていた。

目黒に命じられるままに、舌先をすぼめると銀子による調教で鍛えられた舌技により弛緩し始めた輪状の筋肉を押し広げてズルリとその奥に突き立てた。

その痛切な快美感に痺れた様に、ウッと声を上げて背筋を緊張させた。

お竜の口内に汚物の臭いと特有の苦みが広がった。

このような下劣な男に舌先を駆使して奉仕しなければならない惨めさに涙が浮かんで来た。しかし、涙に咽んで懊悩する中で不可思議な被虐の快美感のようなモノがジワジワと込み上がって来るのを感じ出し、甘美なうめき声を漏らし始め、憑かれた様に舌先で不浄の穴を抉るのであった。

目黒がお竜に後口を舐らせるのを目にして、朱藤も晴江に肛門を舐めるように命じた。

今や露天風呂の洗い場は男と女の肉欲の場と化していた。

職権を乱用して街娼を漁って来たような二人の悪徳警官は女あしらいにも長け、絶倫の持続力を見せてつけていた。

また催淫剤により力付けられた緑川も普段では想像できない程精力を発揮していた。

バスタオルを敷いただけの自然石を敷き詰めた床の上に晴江の裸体を横たわせると、その上に朱藤は身体を覆い被らせ、熟女の秘奥を深々と貫き、激しく腰を使っていた。

洗い椅子に腰を降ろした目黒は、四つん這いの姿勢を取らせるお竜に豊かな尻を持ち上げさせ、後ろからその中心を貫いていた。

自分では動かず、平手でむっちりとした尻を叩いて、激しい反復運動を強制していた。女ざかりの熟れた秘孔をこれまで何人もの街娼を貫いてきた豪刀で突き立てながら、指の腹でそのすぐ上のピクピク収縮繰り返す菊の花を撫でた。

目黒の隠微な愛撫を受けてお竜がウッと眉を^{しか}顰めさせた。

椅子に座ったままの緑川を跨ぐように暁美が腰を押し付け、ピッタリと一つに繋がっていた。弾むような若い女肉が緑川のモノを締め付けていた。

互いに相手の背中に両手を回して離れられないようにグッと締め付けた。暁美のゴムまりの様な乳房と緑川の痩せた胸が固く接触し合っていた。

此処に灰色警官に連れて来られた時は、女に対して拒絶反応を示すような潔癖症のエリート官僚であったが、今や目眩く劣情に煽られ、これまでの清廉さをかなぐり捨て、憑かれた様に緑川が暁美の唇を求めている。

暁美も逆らわず優美な唇を差し出した。

互いに舌を絡め合い、甘美な唾液を啜り合った。

洗い場には何時までも男と女の嬌声がこだまし続けていた。

和室には布団が三組敷かれていた。

朱藤らは全員寝間着に着替えており、布団の上に腰を降ろして、剛沢の用意した肴と酒を酌み交わしていた。

自分でも制御できない激しい肉欲の命じるままに黒い噂の絶えない男達と供に女体を^{むさぼ}貪ってしまった緑川は、これで自分も彼ら灰色警官の仲間に堕ちたんだと思うと、逆に太々しい^{ふてぶて}度胸の様なモノが湧いて来て、こうなれば毒食らわば皿までという心境になっていた。

灰色警官達と酒を酌み交わしながら、何度も思いを遂げた暁美の蠱惑的なグラマラスな姿が脳裏に浮かんで、今日三度も放出を遂げたというのにいまだに股間がムズムズするのであった。

「まだ夜は長い・・・もう少し楽しみましょう・・・」

と、意味深な笑みを浮かべると目黒が席を立った。

今は催淫剤の影響も失せ、落ち着きを取り戻した緑川であったが、何度も放出した睾丸が痛

みをもっていた。肉感的美女を思い切り抱いた記憶と共にその痛みは心地良い痛みと言っても良かった。

残された二人で酒を酌み交わしながら、緑川は目黒は何処に行ったのだろう？トイレかな？と、しばらく戻らない目黒の行動を訝^{いぶか}った。

その時外で男と女の声が聞こえて来たように感じた。

襖をガラリと開けて、目黒が部屋に入って来た。部屋に戻って来た目黒の手には紐が握られていた。

「ほら！入るんだ！」と、手にした紐をグイッと引っ張った。

目黒が引っ張る紐に誘導されるように、一列に連なって三人の女が入って来た。女達はあの目高組の女達であった。

女達は全員衣服を身に着けておらず、わずかに下腹を小さな越中褌で隠すだけであった。

女達は麻縄で後ろ手に高手小手に縛り上げられ、余った縄で胸の上下を二重三重に巻かれており、縄に縊り出されるように乳房が前に突き出していた。

三人とも首を紐で巻かれており、数珠つなぎに繋がれており、窒息の恐怖で目黒に紐を引かれるままに部屋に入って来たのだった。

襖を背に、晴江、暁美、お竜が正立していた。

晴江には燃えるような緋色の褌、暁美は濃い桃色の褌、お竜は濃紺の褌を締めさせられていた。

極彩色の刺青を背負った晴江には緋色の褌が良く映え、クリームを溶かしたような滑らかな暁美とお竜の白い肌には濃いピンクと群青の褌が良く似合うと、緑川は感じた。

そして、女達は全員後ろ手に縛られ、乳房の上下を厳重に縄で縛り上げられ、三人の形の良い乳房がこれ見よがしに前に縊り出されていた。緑川は三人の乳房の大きさを見比べる様に眺めまわした。

目黒が三人の首に回していた紐を解いた。

「どうです？本部長、惚れ惚れするような体つきでしょう？」

と、襖の前に立つ三人の裸女を見惚れる様に声を発した。

朱藤の言葉に誘われるように改めて三人の身体を繁々と見詰めた。

「こいつら、ヤクザの女のくせに隠し芸を持っているんですよ・・・それはね、この部分を使って、芸が出来るんですよ・・・」と、含み笑いしながら、薄い布地越しにその部分を指先でグリグリ突き上げた。朱藤の指による悪さを受けて晴江が悲鳴を上げて腰をくねらせた。

「お前たち、本部長栄転の余興にお得意の隠し芸を披露したらどうだ？　・・・もっとも、そんな無粋な禪なんかしていたら得意の芸も披露できないか？」と、腹を抱えて笑った。

「さっさと禪を脱いで得意の芸をお見せしろ！と、言いたいところだが、後ろ手に縛られたままでは自分で脱げないか・・・仕方ないな、お前たち、本部長にお願いして脱がしてもらえ！」と、命じた。

唾棄すべき悪徳警官の命令ではあるが今の晴江達には逆らう術が無いことを自覚すると齒を食いしばるような声で、

「・・・お願いします・・・私たちの禪を脱がして下さい・・・」

と、涙に潤んだ目で懇願した。

その情動的な瞳に緑川はブルツと震えた。そして、フラフラと立ち上がると、今日は朱藤や目黒に誘われるままに警察官にあるまじき行為を繰り返して来た記憶が蘇り慙愧の念が浮かんだが、一方、こうなれば毒食らわば皿までだ！とやけくその勇気を奮い立たせ女の前に進んだ。

暁美の濃いピンク色の前を覆う布を捲り上げた。

薄い布地が舞い上がる時わずかな風を起こして薫風が緑川の鼻を衝いた。

この少しばかりの布に隠された部分に香料を塗り込めていることが分かった。上を見上げると顔も美しく化粧され髪も綺麗にセットされていることが分かった。

他の二人を見ても娼婦として床化粧を施して来たことが改めて分かった。

禪を腰に留めている紐を解いた。支えを失った布地は音も無く足下に滑り落ちた。

目の前には男を誘うように芳香を漂わすくっきりとした割れ目があった。

思わずその部分に顔を埋め甘美な香りを胸いっぱい吸い込みたい誘惑にかられが、二人の部下の手前踏み止まった。

続いてお竜の前に進んだ。

お竜の群青の禪の紐を解きながら、暁美とは違う華やいだ香りが股間から立ち上るのを感じた。女達はそれぞれ自分に合った香料を使っていることを理解した。

筆り取るように禪を脱がすと、成熟した女の本体が現われた。それは、どこか幼さを残す暁美の女性自身より熟した官能美を見せていた。

最後に晴江の前に進んだ。

晴江の股間からはムツとするような爛熟した雌の濃厚な香りが漂ってくる様に感じた。それは雄の劣情をメラメラと燃え上がらせる魔性の香りの様に感じた。

真っ白い肌の上にわき腹から大腿にかけて色鮮やかな刺青が施されていた。

緋色の褌で遮断されていたそれらの極彩色の模様が、褌を剥ぎ取った瞬間一つに繋がった。

刺青が彫られておらず練り絹の様な光沢を放つ股間には、まさに爛熟した女性があった。しかし、それは同時に剃毛され二枚貝の様な柔らかな峡谷を刻み、童女のその様にも見えた。

そして、柔らかな媚肉の間に隠されるように存在していたモノに目が行った。

「本部長、見てくださいよ！コイツはこんなにでっかいクリを持っているんですぜ！」

朱藤が両手で二枚貝の貝殻を押し開きそれを露わにした。

そこには幼児の陰茎にも似た大きな肉の柱が在った。

爛熟した陰花を奥に秘めた童女の様な割れ目、その中に姿を見せる男児の様な陰核・・・

衝撃的な光景を目の当たりにして、頭の回線がショートしたように何も考えられなくなった

緑川は、突然晴江の股間に顔を押し付けると、口中にそれを含んで舌先で抜き上げた。

緑川の激しい舌遣いに晴江が舌足らずの悲鳴を上げた。

緑川の取った発作的な行動に二人の悪徳警官は互いの目を見詰めてニヤリと笑みを浮かべた。

「本部長は若い暁美がお気に入りのようですが、母親の晴江の熟した身体も味わって見たらどうですか？親子丼ぶりにするってのもオツなもんですよ。」

と、狂ったように股間に武者ぶりつく緑川に声を掛けた。

寝間着姿の三人の男の前に三人の裸の女が立っていた。

彼女らは麻縄で後手に縛られたまま、脚を肩幅ほどに開いて、剃毛され隠しようの無い雌芯を男達に向かってまざまざと晒していた。

「それじゃ始めましょうか・・・先ず一つ・・・」

三人は左の掌に何個かのピンポン玉を握り締め右手の指で1個摘まむと、女の股間深くに押し当てた。

晴江の前には朱藤、お竜の前には目黒、暁美の前には緑川が胡坐をかいて座り、正面の女の秘奥にピンポン玉を押し付けるのであった。

女の祠に押し当て、下から中指で支えていたピンポン玉であったが、周囲を取り囲む秘園の筋肉がモリモリと蠢き、不可思議な吸引力を発揮してそれを体内に吸い上げて行く様子が目に映った。鮮やかな鮭肉色の秘園の奥に白い球が見る見る消えていく様子に男達は驚きの目で見つめ続けた。

「成程！これが本当の隠し芸だ！」

女達が腹中にピンポン玉を完全に呑み込んだことを確認して目黒が大きな笑い声を上げた。

「それじゃ・・・二つ・・・」

新たなピンポン玉を手にとると再び雌芯の奥にあてがった。

三つ・・・四つ・・・と、男達から埋め込まれるピンポン玉の増えるに従って、体内のピンポン玉が強い刺激を女の身体に与え始めていた。

大量のピンポン玉による膨満感と、肉洞の筋肉を駆使して呑み込んだピンポン玉を奥に注送する度にピンポン玉同士がカチカチと反発し合い、膣壁を取り囲む柔褰に微妙な刺激を与えていた。

「お前たち、そんなダラダラとスケベ汁を垂れ流して、そんなに気持ちが良いのかよ？」

体内に埋め込むピンポン玉の数が増える毎に多くなる樹液に呆れた様に声を上げた。

女達は下腹に収めたピンポン玉と格闘するようにモジモジと下腹を揺らし、額に汗をうかべて、呻くような声を発するのであった。

「ほら、何もたもたやってんだよ！五つ目入れるぜ・・・ほら五つ！」

と朱藤が指先でグリグリと晴江に体内にピンポン玉をねじ込んだ。

「アアッ・・・痛い！もうお許してください！」半泣きになって苦痛を訴えた。

「何を泣き事言ってるんだ・・・もっとシャキッとしろ！背中の観音様に笑われるぜ！」と尻を平手でピシャピシャと叩きながら次のピンポン玉を手にした。

「ほら、六つ目だ！」

「アアーッ！もう無理です！お許してください！」込み上げる激痛に泣き叫びながら身を揉んで哀願した。

「何だ、もうギブアップかよ・・・だらしなないマ███だぜ！」

と、華洞内に収められたピンポン玉の状態を確認するように下腹を撫ぜた。

結局、晴江が5個、暁美が6個、お竜が7個のピンポン玉を収めた。

「それじゃ、見ていてやるから出してみな。」

女達に少し股を開かせて大腿の間に掌を差し入れて命令した。

ウツと女達が眉間に皺を寄せ、下腹の筋肉を緊張させると、鮮やかな紅鮭の様な色をした秘孔を押し開いて白い球が徐々に姿を見せ始めた。

女達の胎内で分泌された粘稠な樹液に塗されたピンポン玉が粘っこい糸を引いて待ち受ける男達の掌の上に落下した。

ウッ、ウッと身体を痙攣させる毎に次々とピンポン玉を産み落とした。
糸の様な淫液を引いて次々と押し出されてくるピンポン玉を見詰めながら、
「まるで、海亀の産卵みたいだぜ！」と、感心したように声を上げた。

過重な肉体を駆使した艶技によって女達はハアハアと息を吐きながら立っていた。
女達の背後に回った朱藤がいきなり尻を蹴り上げて布団の上に転ばせた。
後ろ手に縛り上げられ自由に体を動かせない女達は布団の上にうつ伏せに倒れ伏した。
「へへ・・・コイツらは女同士で愛し合うことが大好きな変態女なんですぜ。組に居た時も隠れて愛し合っていたというスケベ女達でさあ・・・おい！本部長ご栄転の^{はなむけ}餞にレズビアショーを見せてあげたらどうでえ！」
「それなら、この縄を解いて下さい・・・」

男達の無体な要求を断れないと諦めた晴江が目黒に向かって哀願した。
「両手が自由なレズビアンショーなど当たり前すぎて面白くも何ともないぜ！そのままやってみろ！」と、言い放った。

このヤクザより悪人だと奈和親分が言った男達に何を哀願しても無駄であることを悟った女達は諦めたように互いに立膝の姿勢で布団の中央に集まった。

剛沢に協力して目高組を滅ぼす役をになった憎い男達の目に醜態を晒すのは死に勝る苦痛であるが、例え一時的とは云え、その苦痛から逃れるためには我が身を男達の望む醜態の中に墮とすしかないと、倒錯的な諦めをした女達は、好色な目を向ける男達の前で、互いの頬を寄せ合い愛おしそうに頬ずりを始めた。

そして、後ろ手に縛られた胸を突き出すようにして、互いの乳房をこすり合わせた。
「へへ・・・コイツら本来こういう事が大好きな女なんですぜ・・・見て下だせえ・・・乳首がおっ立ってきましたぜ・・・」

目敏く女達の変化に気付いた朱藤が緑川に囁きかけた。
緑川は酒を口に含みながら目を皿のようにして女同士の扇情的な愛欲の図を見詰め続けた。
いた。

この汚辱にまみれた現状から逃避するには、女同士の愛欲に塗れた肉欲地獄に我が身を投げ入れ、燃え盛る快楽の炎で我が身を焼き尽くすしか無いと、心に決めた女達は互いの性感を貪り合うように、乳首を絡め合い、互いの唇を奪い合った。

その燃え盛る女同士の激しい愛欲の姿を好奇の目で見つめていた男達の目に、剃毛され隠す

物が無い股間が次第に湿り気を帯び始めたのが分かった。

フッと力無く暁美の身体が布団の上に崩れ落ちた。

布団の上に仰向けに崩れ落ち、ハアハアと荒い息をする暁美に、晴江が乳房を食るように、お竜が大腿を食るように激しい口吻の雨を降らした。

実の母親から乳首を吸われ、父の愛人から内股の敏感な部分を舌先で撫でられ、仰臥する暁美の身体がピクピクと悶えた。

男達が好色な目で見つめる前で、秘裂を大きく左右に広げ、夥しい愛液を溢れさせる女の花園が露わとなった。

お竜は、その開け放たれた秘園に顔を押し当てるとピチャピチャと音を立てて樹液を掻き出し、喉を鳴らして暁美の胎内から湧き出るジュースを飲み込んだ。

男達に向かって突き出していた熟れた桃の様に良く張った尻に妖しく蠢く二つの秘孔に男達の目は釘付けとなり声を呑んだ。

その女の穴は内部から湧き出す甘美な露で濡れ光っていた。

「全く手が使えないとな不自由なもんだ・・・コイツを啜えてお竜を慰めてやんな。」

目黒が双頭のディルドウを持ち出して来て、その一端を晴江に啜えさせた。

口から一直線に伸びた筒具の先を、お竜の濡れそぼる雌芯の中心に押し当てた。

そして、それをズブズブとお竜の柔肉の狭間に押し入れて行った。

口を使って暁美の股間を愛撫していたお竜が、一瞬仰け反る様に背中を歪めた。

今や、大きく股間を開いた暁美を口を使って愛するお竜とそのお竜を背後から口に啜えたディルドウで愛する晴江が一直線になって、女の愛に没頭していた。

突然、喚く様な声を発した目黒が、お竜を責める晴江を引き剥がし、布団の上に横倒しにした。そして、悲鳴を上げる晴江の上に身体を預けて行った。

女達らの愛欲図に興奮して血が上った朱藤も、痛いほど隆起したモノでお竜を背後から刺し貫いた。

今は理性をかなぐり捨てた緑川も暁美の裸体に武者ぶりついていった。

三組の男女による激しいせめぎ合いの音が響いた。

女達は代わる代わる別の男から責め上げられた。

激しい肉弾戦の応酬の後、女の胎内に思いの丈を放出した男達が、心地良い疲労感に浸る様に布団の上に身体を起こしていた。

傍には悪人達により蹂躪し尽くされた女達が後ろ手に縛られたまま死んだように横たわっ

ていた。

「どうでした？母親の晴江の味は？」朱藤に問われて、

「ああ・・・良かったよ。」と、娘と母親の異なる甘美な女肉を堪能して、満足げな笑みを浮かべて緑川が答えた。

朱藤がタバコの箱を取り出して緑川に勧めた。

三人で美味そうにタバコを燻らしながら、目黒が、「ところで、本部長？本部長はこれまで女の此処に突き立てたことはありますか？」と、死んだようにうつ伏せに横たわり、大腿を閉じる力も喪失して、男達の目の前に股間を開け放ちドロドロと淫液を垂れ流す穴の僅か上に在る菊座の中心を指先でグリグリと突きながら尋ねた。

男の太い骨ばった指先をそこに埋め込まれお竜がウツと唸った。

タバコを口に咥えたまま緑川が首を振った。

「それは、勿体ない！一度この味を知れば病みつきになりますよ！是非試してみればどうですか？」と、熱心に勧めた。

「コイツら、銀子という売春婦上がりの女に調教されて、後ろの穴も前の穴と同様に使える様に開発されていますから、是非味わってみるべきですよ！」と、朱藤も口を挟んだ。

「それでは、早速準備を始めましょう！先ず浣腸して腹の中の汚いものを絞り出してからにしましょう！」と、卑猥な笑みを浮かべてイソイソと準備を始めた。

三本のガラス製浣腸器が並べられ洗面器になみなみと浣腸液が満たされた。

「ほら！何時まで気持ち良く眠っているんだ！」と、横たわる女達を足蹴にして起こした。そして高手小手に縛り上げたままの女達を畳の上に正座させると、頭を畳に着けて尻を高くもたげるような姿勢を取らせた。

男達の目の前には女達の菊花が三つ並んでいた。三人とも少しずつ色素の沈着具合による色の違いや形状の違いはあったが、見詰める緑川の目には艶やかな花が咲き誇っている様に見えた。

「本部長は若い曉美がお気に入りの様でしたね・・・どうぞ。」と、洗面器から浣腸液を吸い上げて200ccの容量一杯に満たされたガラス浣腸器を手渡した。

男達の方に尻を向け、屈辱の姿勢を取らされる女達に向かうと、中央に位置する曉美の後口に嘴管の先端を押し当てた。

冷たいガラス管を自分の肛門に感じて、曉美がヒッと悲鳴を上げた。

人に浣腸などした経験の無い緑川は、緊張した面持ちで、こうすれば良いのかね？と二人の

方を振り返って尋ねた。

「そうです！そのまま先端を尻の穴に奥まで突き立ててピストンを押して下さい。」と、勉強ばかりやって来た頭でっかちの男はこんなことも知らんのか？と、半ば呆れる様に指示を送った。

二人の支援を受けた緑川の手にする浣腸器から生ぬるい液が体内に流れ込んだ。

力任せに押し込まれ、腸が風船の様に膨れる痛みを感じた。

目黒と朱藤が浣腸とはこのようにするものだ一と、見本を見せる様にお竜と晴江に突き立て注ぎ込んだ。

「まだまだ浣腸液は沢山残っていますから何度でもお好きなように・・・」と、次の浣腸を促した。

こうして、女達は都合四回ほど続けざまに浣腸液を注ぎ込まれた。

洗面器に用意した全ての浣腸液を消費し、一息吐いて女達の高くもたげられた尻を見詰めた。一方女達は体内に注ぎ込まれたグリセリン液がその残酷な効果を発揮し出し、腸を掻きむしるような強烈な刺激に苦悶していた。

尻にビッショリと汗を浮かべ、下腹に込み上げる苦痛によりビクビクと痙攣する大きく張った双臀とその中心で緊張を失うまいと菊の蕾がグググッと収縮する姿を酒を口にしながら楽しそうに眺めていた。

「お前たちは人に見られながら糞をするのが楽しくて仕方ないんだろう？ここで見ていてやるからノビノビとやらかすが良いぜ！」

「偉そうに子分を引き連れて繁華街をのし歩いていた女親分がどんな臭い糞をひり出すか見ていてやるぜ。」

限界を迎えつつある女達がこちらに豊かな尻を向けて悩ましく振り立てる姿を楽し気に見詰めながら男達は口々に揶揄し続けた。

「アアー！お願いします！もうお許してください！」極限まで追い詰められた女達が卑劣な男達に哀願した。

「お前たちが、やらかして、すっきりした後、俺たちはお前たちの尻の穴を頂くことになっているんだぜ！、さっさと済ませてケツ穴を使わせる準備をしたらどうだ！」

体内から突き上げる激しい痛み悶絶する女達を更に追い込むように声を掛けるのであった。

「まず、いきなり突き立てる前に腸内の清掃がてらこんな物で掻きまわしてやりましょう

よ・・・」

目黒が卑猥な形状のバイブレーターを手に淫靡な笑いを浮かべた。

目の前に淫具やおしぼりや消毒液などを揃えて男達は女達の崩壊後の次の準備を進めていた。

脂汗を浮かべて藻掻き苦しむ女達の最後の時は迫っていた。

翌朝クリーニングも終わり、こざっぱりしたスーツを身に纏った緑川が朱藤と目黒を伴い淫虐の館を後にするところであった。

「どうです？ 昨晚は楽しめましたでしょうか？」

剛沢が緑川に^{うやうや}恭しく問いかけた。

剛沢の問いに、昨夜来始めて経験した女達との目眩く淫靡な体験が瞬間頭を過ぎり、特に大量浣腸により断末魔の苦痛に喘ぐ女達を責め具をもちいて散々悶え苦しめ、直後の三人の美女の落下無残な排泄図や、腸内洗浄後に食べるように突き立てた第二の性孔が激烈に自分の分身を締め付けて来た時のかつて経験した事の無い目眩く快感が脳裏に浮かびあがったが、それを気取られない様に厳しい表情を浮かべると、気まずそうに黙って小さく首を縦に振った。

「M県に赴任された後もこちらに来る用事が御座いましたら是非お立ち寄り下さい。精一杯サービスさせていただきます」と、緑川の後姿に声を掛けた。

朱藤と目黒の計略により墮落させられたとは言えど、いまだに上級公務員としてのプライドが邪魔をしてヤクザ風情とは口をきかないと、頑なに拒絶するように、無言のまま用意されていた高級車の後の席に納まるとドアをパタンと閉めた。

「ところで、剛沢さんよ・・・あんた何か良いネタを持ってないかい？」

目黒が剛沢の傍に歩み寄って来て小声で尋ねた。

「ネタと申しますと？」 剛沢が知らばくれる様に聞き返した。

「このところS市も平和になって事件が無くて困っているんだ・・・」

「事件が無ければ結構な事じゃないですか？」 と、とぼけた貌で応えた。

「そりゃ大きな事件が起きたら問題だが、小さな事件が起きて迅速にそれを解決したり、事件の発生を未然に防ぐことにより警察と市民の信頼関係が生まれるってもんだ・・・」

何が警察と市民の信頼関係だ！ 本当は自分の点数稼ぎがしたいだけなのに一と、心の中で嘲笑った。

剛沢のつれない態度に焦れたように、「こういう所にわざわざ足を運んでやったんだから何かお土産を付けて帰すってのが礼儀ってもんだろー！」と、話るように声を荒げた。

「お土産ですか？」と、ちょっと考える仕草をしてから、「それじゃこんなのはどうですか？」と、話し始めた。

「最近うちの組を破門したテツって男がいるんですが、そいつの家を家宅捜査して見たらどうですか？きっと物騒な物が見つかりやすぜ・・・」と、住所を記したメモをそっと手渡した。

「有難う、恩に着るぜ！」

「こちらも又、色々お願いすることが在るかと思いますので、持ちつ持たれつと言う事で・・・」と、シレッと笑顔を浮かべて返事した。

剛沢としては最初からテツを警察に売るつもりで泳がしていたのだった。

こうして、組の中の不穏分子を処理する事と警察に義理を売る事の一石二鳥を果たす事となり、心の中でほくそ笑むのであった。

昨日までは謹厳実直なエリート官僚であった緑川は、二人の悪徳警官により、一晩ですっかり墮落させられてしまった。

此处で味わった肉の快感が忘れられなくなり、その後も度々お忍びで通うようになっていた。無料で女の接待を受ける見返りに、その都度、警察内部の情報をもたらしたり、警察内部で大亜門戸会を庇護する立ち回りを演じる様になった。

剛沢にとって貴重な警察内部の協力者になって行くのであった。

逃亡失敗

いつの間にかテツの姿が組の男達の中から消えていた。

男達にそれとなく聞くと、「あいつは破門されて、再びサツに捕まった。」との答えであった。

「仮出所中の再犯だから今度は長くなるだろう・・・もっとも、今度出所して来たら命は無いだろうがな・・・」と、冷たく笑っていた。

あの時テツの誘いに従って一か八か脱走していたらどうなっていたらだろうか？と、悔やまれた。

元目高組の組員が次々と大亜門戸会に寝返る中で、テツも裏切者で自分達を罠に掛けようと

しているのでは無いかと疑心暗鬼に駆られた事と、事前の準備が何もしられていないことが脱走に踏み切れなかった原因であった。

その後も元目高組の女達の媚肉を漁る変態客は絶えることが無く、連日連夜男達に肉体を提供する日々が続いていた。

そして、徐々にでは有るが、晴江を始めとする女達は、自分達の心身にも変化が現れ始めている事実を否応なく意識し始めていた。

何時の間にか、剛沢や銀子達が望むように、日々男達から与えられる羞恥と苦痛に充ちた責苦に慣らされて行き、客が到着したと呼び出しを受ける度に、何故か股間がジンと痺れ、ジワジワと秘裂の内部が自律的に潤って行く事に気付いてハッとするのであった。

銀子達から受けた肉体改造により開発された熟れた女体は、魂を裏切って、その理不尽な虐待を不思議な快美感を持って心待ちにしている事に気が付き始めていた。

このままでは、本当に剛沢達が望むような、客達から与えられる呵責無い責めを被虐の快感として受け入れ、花が水を渴望する様に、常に客から虐待される事を期待する本当の肉奴隷に改造されてしまうという意識に苛まれ、その受け入れがたい事態に恐ろしくて居ても立ってもいられない気持ちになるのであった。

最早、外部からの救出を諦め、隙を窺ってここから自力で脱走するしか、そのような惨めな結末を回避する方法は無いと思われた。

しかし、心は焦れども圧倒的な格闘能力を持つ剛沢が目を光らせている限り、自力での脱走は不可能と観念していたのだった。

剛沢さえ居なければ、あとの組員は恐れることは無いが、まるで^{ひぐま}熊のように強力な剛沢の力の前には三人の力を合わせても敵わないと諦めていたのだった。

そこで、晴江達は剛沢が屋敷を空ける日が来るのをじっと待ち続けていたのだった――

剛沢と黄原が村崎親分の主催する暴力団同士の寄り合いで2、3日屋敷を空けるらしいとの噂が女達の耳に入って来た。

それとなく確認すると、剛沢と黄原が主立った幹部連中を連れて3日間留守にすることは確かなことが判った。

剛沢や剛沢と共に大亜門戸会を創設した喧嘩慣れした幹部連中が居なければ、あとは以前に蹴り倒したことのある、威勢の良いだけの弱いチンピラしか屋敷には残らないから、脱走は

容易と思われた。

そこで脱走は剛沢や黄原がいない間の日にすることを密かに示し合わせて決めていた。

最初の頃は女達を警戒していた大亜門戸会の男達も、今ではすっかり大人しくなった女達に油断して警戒を忘れており、女達にそれとなく聞かれて、剛沢達が暫く留守にすることをうっかり漏らしてしまったことも記憶に留めていなかった。

何時もの様に、客に抱かせるために、女達を牢から引き出し、牢舎の外に面する鉄扉の所で待ち受ける組員に身柄を引き渡した時、女達の反乱が始まった。

たちまち、お竜が得意の空手技で警備の男達をなぎ倒した。

晴江も前回大亜門戸会の男達に殴り込みを受けた時は、全く不意を突かれて、反撃に移る間も無かった事と、大亜門戸会の中でも剛沢を助けて組織を大きくして来た、殴り込み慣れた腕っ節の良い大勢の男達に突然組み伏せられてしまったため、反撃する暇もなく一機に絡め取られてしまったが、年齢にも似合わず、超武闘派組織の女親分として、これまで秘めていた格闘能力を発揮して次々と男達を叩きのめして行った。

そして、男達の持っていた鍵を奪い取り、牢に入れられていた奈和組長を助け出し、地下室から地上に出るべく動き始めたのだった。

「大変だ、女達が脱走した！」

監禁室に仕掛けられた、監視カメラの映像を見ていた男達や、女達の手を這々^{ほうほう}の体で逃れた男が仲間に助けを求めたので、留守番の男達が一斉に騒ぎ始めた。

地下から地上に上がるただ一つの通路である階段の所まで辿り着いたが、大亜門戸会の男達の出動の方が一步速く、大勢の大亜門戸会の組員に行く手を遮られた。

敵の数は遙かに多いが、剛沢さえ居なければ血路を開くことは可能と、女達は覚悟を決めた。

お竜と晴江が互いに目配せしあった。

奈和組長を背負った暁美が、二人に遅れまいと、二人の後にぴったり張り付いた。

以前お竜に挑み掛かって、男の急所を蹴り上げられ惨めに気絶させられた植木という男が、
「あの時は油断していたからやられたが、あれから俺も空手道場に通い練習しているからな、あの時の様には行かないぜ！」と、あの時の恨みを倍にして返してやる一と、言いながら、凄んでお竜に挑み掛かった。

ところが口程にも無く、逆に大亜門戸会のチンピラ達が見守る前で、まるでサンドバッグの様にお竜に散々打ち据えられた末、再び股間を蹴り潰されて白目を剥いて口からブクブクと

泡を吹いて悶絶したまま床に転がった。

植木のだらしなく横たわる姿を見せ付けられて、改めてお竜の実力の前に唾然とする男達であった。

お互いに睨み合う膠着した緊張感に堪えかねたように数人のチンピラが目配せし合いゴクリと生唾と呑み込むと奇声を発して一気に女達に襲いかかった。

決死の覚悟で三下達が数を頼りに、お竜と晴江に襲いかかったが、しょせん二人の敵では無かった。

女達もこれまで散々虐げられて来た恨みを一機に晴らす様に、刃向かってきた男達を容赦無く打ちのめした。

拳を振り下ろしてくる男達の肋を砕き、骨を粉碎した。

これまでの恨みを叩き付けるかのように、無慈悲に打ち据えられる男達の凄惨なシーンを見せ付けられ、血塗れになって床に倒れ伏した無残な姿を目の当たりにして、男達の間に恐慌が走った。

今や、白目を剥いて意識を失った男や、苦痛の喘ぎ声を上げて悶絶する男が、女達の周囲の床に溢れていた。

恩義在る奈和親分から授かった杯をあっさりと投げ捨て大亜門戸会に鞍替えした三下達や、これまで散々女達を心身共にいたぶり抜いて来た男達は、自分達への女達の怒りが如何に強いかを思い知らされ、次は自分があのような目に遭うのではないかと想像すると足が竦んだ。女達の敵意のこもった鋭い視線を浴びると、ぞっと恐怖が込み上げ、この阿修羅の様に強い女達に挑み掛かっても、自分もこの様な目に合うだけだと思えば誰も女達に向かって行こうとする男は居なくなった。

「畜生ー！こいつら女のくせにどうしてこんなに強いんだ！」

床に転がって苦痛に悶える男達を見て、女達の行く手を阻もうと立ち塞がった男達が情けない声を出した。

拳銃^{ハジキ}を使えば、仕留めることは出来るだろうが、大事な商売物を傷付けてしまえば、後で剛沢からどの様に咎められか判らない。

刃物^{ヤッパ}を使っても同じ事で、その上、数々の修羅場を踏んで来たこの女達は刃物を見せても怯む様な相手では無く、逆に奪われてしまえば、相手側に強力な武器を与える事にもなり兼ねない。

「糞！どうすれば良いんだ！」

手出しが出来ない男達を前に、これまでの恨みを込めた憤怒の色を浮かべた女達がジリッと前に進んだ。

そして、その女達の氣勢に押される様に、男達がジリッと後退した。

大勢の男達が自分達の氣勢に押され、ジリジリと後退して行く状況に、女達は後少しでこの地獄のような屋敷から脱出することが出来ると胸に感じた。

「おい！黄原の兄貴が、ボスが留守中に女達が暴れ出したら、使えと言われて用意してあったヤツが有っただろう！」と、一人の男が思い出したように声を上げた。

「そうだ！あれを持って来い！」

リーダー格に声を掛けられて、三下が何かを取りにその場を駆けだした。

既に黄原は、そのような場合に備えて、出口の近くに準備をしておいたようで、男は何かの液体の入ったプラスチック容器を山の様に両手に抱えるようにして、直ぐに持って帰って来た。

階段に陣取る男達は広口のプラスチック容器の蓋を取ると、そのまま女達の足下めがけて次々に投げ始めた。

床には容器から溢れ出た粘調の液体が広がった。

立ち塞がる男達を一機に蹴散らそうと、お竜が大きく体を動かした瞬間、そのドロリとした液体に脚を取られ、大きく空中で体を崩して、液に塗れた床の上に横倒しに転がり落ちた。

「さすがに黄原の兄貴の知恵はたいしたものだ！」

床一面に広がった油液の上で悲鳴を上げて、まともに立ち上がることも出来ず、転倒を繰り返す女達を見て、歓声を上げた。

「へへ・・・これは、何時もお前達が、客とオイルダンスに使うローションだ！オイルダンスは、お前達の得意技じゃなかったのか？」

と、床に広がったオイルに足を滑らせ、バランスを崩して転び合う女達を見ながら笑った。お竜の得意とする空手技も、足下がしっかりとしていないと威力を発揮することが出来ない。攻撃を繰り返すどころか、まともに立つことも出来ない女達に、たちまち大勢の男達が襲いかかった。

男達も足を滑らせて転びまくったが、最後には、圧倒的な数に任せた男達が、抵抗する女達を上から押さえ込む事に成功し、無数の男達に組み敷かれて、苦しそうに、じたばたと身悶

えた。

「こいつは、ツルツル滑って、まるでウナギを捕まえているようだぜ！」と、男達が油でツルツル滑る女達に難儀しながらも、楽しそうに喚声を上げた。

何人もの男達が暴れ藻掻く女達の上に馬乗りになって、ローションに塗れてツルツル滑る衣類を力尽くで奪い取り始めた。

身に付けていた着物を無理やり引き剥がされながら必死に抵抗したが、無数の男達の手で手脚を押さえ込まれ、得意の空手技を封じられては、所詮は虚しい抵抗であった。

大勢の男達に組み敷かれ、圧倒的な男達の力で床に押さえ付けられ、手も足も出ず次第に元通りの裸身を晒して行くのだった。

上着を剥ぎ取られ下着姿を晒した女達のあられもない姿に、余裕を取り戻し始めた男達の好色な目が光った。

暴れる女達の抵抗をはね除け、力尽くで下着を奪い取った。

上から押さえ付ける男達の目に剥き出しにされた白い股間が映り、男達の歓声が上がった。

女達を再び素っ裸に剥き上げ、すっかり余裕を取り戻した男達は、オイルに塗れてツルツルと滑る露出した柔らかい女の素肌に触れて歓声を上げた。

女達が身動き出来ないのを良いことに、調子に乗ってオイルに濡れた手を股間に押し込み内部をまさぐろうとする男達もいた。

女達は男達の嫌らしい手をはね除けようと何人もの男に上から押さえ込まれながら藻掻いたが、銀子によって開発された快感のスポットに偶然触れると、堪えようとしてもビクッと身体が反応し、全身から力が抜けていくのを感じた。

絶望的な状況下、数に任せて自分達を組み敷き、悪戯する男達に思わず憤怒の声を上げたが虚しい足掻きであった。

女達の必死の抵抗に遭い、ウナギを掴むように滑る身体に苦勞しながらも最後は、全裸に剥き上げた女達の両腕を後ろ手にねじ上げて、手錠を掛けることに成功し、終に女達の反乱を鎮圧することに成功した。

男達に組み敷かれながら、本来なら簡単に倒せたはずの三下達に、逆に手もなく取り押さえられてしまった現実に、女達は身を震わせて悔し泣きし、熱い涙を流し続けた。

「お前達！ 剛沢のボスさえ居なければ易々と逃げ出せると思っていたんだろう？ 所が黄原の兄貴がそんな時に備えて二重三重の対策を用意して呉れてたんだよ！」

女達に馬乗りになって抵抗を封じながら男達が勝ち誇ったように笑い声を上げた。

結局、三人の女の反乱は、黄原の準備の前に敢え無く鎮圧されてしまったのだった・・・

女達の脱走未遂の連絡は直ちに旅先の剛沢達に伝えられ、剛沢と黄原はヤクザ仲間の集会を早々に切り上げ戻って来た。

剛沢の目の前に固く後ろ手に縛られた女達が正座させられていた。

「全く、お前達は油断も隙もありやしねえ！」

脱走に失敗し、全裸に縄掛けされただけの姿で剛沢の前に引き出され、怯えたように青ざめた顔を項垂れる女達を前にして忌々しげに声を上げた。

「借金を踏み倒して、ずらかろうとは太い女だ！」と、怒鳴り声を上げた。

「契約書を良く読んで見ろ！『不正な手段により、支払いを免れようとした場合は、元本の三倍を支払うものとする』—と書いて有るだろう！今からお前達の借金は、一人6千8百万だ！」と、女達の目の前で契約書をひらひらさせながら剛沢が宣言した。

女達は逃れられない運命に啜り泣きしながら、がっくりと首を項垂れた。

「その上、大事な子分達に大怪我を負わせやがって！その治療代も借金に上乘せするからな！ 植木の野郎なんか、和久井先生の見立てでは、金玉を蹴り潰された上、もう一生大事な物も使いモンになんねえって話だぜ！ 二度と逃げだそうという気も起こらないようにその身に覚え込ませてやるから覚悟しやがれ！」と、女達を見下ろしながら威嚇した。

自分たちを睨む剛沢の残酷な目の色に、これから自分たちの身に降りかかる恐ろしい予感にガクガクと身を震わせて、「お願いします！お許し下さい！」と、涙を浮かべて憎い敵方の首領に必死に哀願するのであった。

かつての強い女の面影は微塵も残さず、血の気を失い、恐怖に泣き叫びながら必死に敵方の男の慈悲を請うような弱い女に成り果てた女達に、サディスティックな本能が刺激されるのか、ゾクゾクするような残酷な疼きを感じながら、「ならねー！嫌と言うほど骨身に思い知らせてやる！」と、目に残虐の光を溜めて薄笑いを浮かべて宣告するのであった。

女達は涙を流し項垂れながら、冷酷な男達によりこれから自分達に加えられるであろう呵責無い責めを思うと、なぜか股間がジュンと痺れるのを感じた。

女達を牢に押し戻した後、剛沢は唇の端を卑猥に歪めながら黄原に話しかけた。

「昔の遊郭では脱走しようとした女郎をブリブリと云う折檻に掛けたそうだ・・・そしてその折檻の様子を金を取って、好き者の客に見せたそうだ・・・今回不始末をした客や、馴染

み客に彼女奴らの折檻の様子を見せてやろうじゃないか・・・」と、自らの思い付きを楽しむかのように計画を話し始めた。

この間の逃亡騒ぎで女を抱き損ねた客や、嗜虐趣味を持つ十数人の馴染み客が招待されて、拷問室の中に特別に設えられた雛壇のような席に腰掛けて、これから始まる残酷なショーに期待してザワザワとざわめき合っていた。

本日の趣向に合わせて、大亜門戸会の地下の拷問室の中に、昔の女郎屋の折檻部屋のようなセットが用意されていた。

客達の目の前には、水を満々と満たした、大きな桶が三個並べられており、その周囲には割れ竹で作った鞭や、おぞましい拷問道具が並べられており、招待客らの期待を誘っていた。居並ぶ招待客の前に剛沢が現れ、今日は、皆さんお忙しい中ようこそおいで下さった一と、挨拶を始めた。

そして、最前列に腰掛けた客達に、「この間は、内の女達が不始末をしでかして、大変済まなかった。今日は、この間の詫びを女達にさせるからゆっくりと見ていってくれ。」と、言う頭を下げた。

女達が二度と不始末をしないよう、大亜門戸会が如何に厳しく女達を躰けているか、皆さん方に見て貰うのが今日の集まりの目的だから、お代は取らないとも告げた。

剛沢としては、本日の花代は女達に被せる積もりだし、お金を取らないと言っても、ご祝儀を置いていかない招待客は居ないだろうと、心の中で算盤を弾いていた。

頃は良しと見て、剛沢が合図を送ると、奥から割れ竹で激しく女体を打ち据える音が聞こえ、痛切な女達の悲鳴が聞こえて来た。

そして、女郎の折檻室のセットに通じる入り口の暖簾をくぐって、荒縄で厳しく高手小手に縛られた女達が、縄尻を手にした男達からささらになった割れ竹で乱暴に打ち据えられながら追い立てられるように現れた。

女達は、まるで明治時代の遊郭のお抱え女郎のように素肌の上に赤い長襦袢と赤い腰巻きを身に付けさせられ、頭は日本髪を結うという時代がかった扮装をしていたが、既に激しい折檻を受けた後のようで、髪はおどろに乱れ、全身にも打擲を受けた痕を示す赤黒い痣を浮かべて、凄惨な様を晒していた。

そして、縄尻を掴み、青竹を振り上げる男達も、禪一本の裸の上に、印半纏を纏っただけの

女郎屋の牛太郎のような芝居掛かった格好で登場した。

格好は芝居染みているが、女達を責める男達の折檻には、何らの情け容赦は無く、招待客達はその本物の迫力に思わず身を乗り出した。

牛太郎を演じるのは、かつては目高組の三下であった男達や前回お竜達に打ち据えられて恨みを返したいと思っていた男達であった。まだ体にお竜達から受けた青痣を残す者もいた。三下達も目高組から大亜門戸会に鞍替えした直後は、元の女親分や親分の娘に暴力を加えることに気後れしたこともあったが、かつては影を踏むことも出来なかった尊大な女達に暴力を振るうことに次第に痺れる様な快感を感じるようになっていた。

自分達でこの女達を抱こうと思ったら、大金を用意しなければならないため、又タダで暴行を加えられる機会が来ないかと、常々心待ちにしていたのであった。

そして、女達が脱走に失敗したことにより、再び思う存分女達を自在に責めることが出来る機会が訪れたと思うと嬉しくなって、自分から志願した男達ばかりであった。

見物客は、男達が嗜虐の快感に激しく興奮している様子を、禪の前の異様な膨らみから見て取った。

「脚抜けしようとは、太てえアマだ！脚抜けしようとした女郎が、どんな折檻を受けるか、これからその体に篤と教えてやる！」と、床にしゃがみ込ませた女の乱れた髪を驚掴みにして、青竹を振り上げて尻や背中を容赦無くビシビシと叩きながら、芝居がかった台詞を口にした。

「ひえー！お許し下さい」

と、女達は、怯えた様に涙ながらに許しを請うたが、その声は芝居では無く本心からのものであった。

「ならねえ！こうしてやる！」

ささらになった青竹を振り上げると、力いっぱいバシバシと女達を打ち据えた。

激痛に女達が悲鳴を上げた。

涙を流し、悲鳴を上げ、許しを請うのも構わず男達は女達が意識を失うまで打ち据え続けた。

ぐったりした女に別の牛太郎が桶から水を汲み出して、激しくぶっかけた。

そして、意識を取り戻した女に再び激しく打撃を加え続けた。

水に濡れた薄い長襦袢や腰巻きを通して、女の体の線が浮かび上がった。

そして乱れた、腰巻きの裾からしどけなく白い大腿を覗かせた。

変態性を持った見物客達は、本物の折檻の迫力と艶っぽい女の裸身に興奮して、思わず股間を

押さえた。

拷問室の天井には電動のウィンチが仕掛けられているが、今回は時代がかった趣向とするためそのような設備は使わず、天井には木の大きな滑車に取り付けられていた。

男達が天井の滑車に通された綱を緩めると、天井の三箇所からガラガラと何やら鉄製の大きな輪の様な物が降りて来た。

それぞれの鉄の輪には、三箇所に鉄鑢が溶接され、黒光りする太い鎖がこの溶接された鉄環を通っていた。

輪の中心で三本の鎖は一つに集まり、シャンデリアのように滑車に繋がった綱が結び付けられていた。

直径が90センチほどの鉄製の輪には斜め内側に向かって何本もの短い針のような鉄製の棒が突き出ており、その針の先端にはそれぞれ太くて長い蠟燭が突き立てられていた。

180度向かい合った輪の両端には、革製のベルトが固定されており、更にその中間の2カ所からは1メートル近い長さの鉄棒が下に伸びており、釣り針のように曲げられた先端部分にも蠟燭が刺されていた。

この後何が起きるのだろうと、興味深く見つめる見物客に、剛沢がニヤニヤ笑いながら説明した。

「これが何だか判るかい？」

天井から降ろされてきた鉄の責め道具を訝^{いぶか}しげに見詰める見物の男達に剛沢が話し掛けた。

「これは、言わば大亜門戸会流ブリブリの道具さ！」

と、得意気に説明始めた。

「昔の女郎屋のブリブリとよばれた折檻は水責めと叩きだけだったが、それだけじゃ面白くないから蠟燭責めも追加したと云う訳さ！先ずこの輪の両端に取り付けられた革ベルトに女の脚首を固定する。・・・こうすればイヤでも女達は、大股開いて逆さ吊りになるって寸法さ。更に鉄の輪の周囲には8箇所に斜め内向きに蠟燭を差し込む針が植えてある。蠟燭に火を点ければ熱い蠟が雨のように女達の体に降り注ぐ・・・更にこの中間に取り付けた二本の長い鉄棒の意味が判るかい？」

剛沢が途中まで降ろされたまま空中に留め置かれた女体責めの道具に取り付けられた長い鉄棒を手にして笑った。

「この長い鉄棒の針の先は、大股開きの逆さ吊りになった時に丁度女達の前の穴と後の穴の上に来る様になっている。この先端には、特別ぶつとい蠟燭をねじ込んで火を点ければ、煮

えた蠟が狙った様に女達の敏感な孔の奥に流れ込むと云う寸法さ・・逆さ吊りと、水責めと、叩きと、蠟燭責めを同時に受けて女達がどんな反応を示すか見ていってくれ・・・」

残酷な性癖を持つ招待客達は、剛沢の長い説明を聞きながら、大股開きで逆さ吊りにされた女達の繊細な粘膜に覆われた淫靡な孔の中に熱蠟が流れ込んだ時の女達の苦悶を思い描いて冷酷な笑みを浮かべるのであった。

ぐったりした女達を厳しく縛り上げていた、荒縄が一旦解かれ、その間に長襦袢と腰巻きが取られた。

女達の白い肌に残る赤い打撃痕が叩き責めの激しさを物語り、見物客がゴクリと生唾を飲み込んだ。

ぐったりとした女達を、素っ裸に剥き上げた後、あらためて麻縄で後手に縛り上げた。

そして、女達の両足首を掴むとグイッと上に吊り上げ、天井から降ろして来た例の鉄の輪の両端に付けられた足枷に両足首を固定した。

しっかりと鉄の輪に両足を縛り付けられた事を確認してから、男達が滑車の綱を引き上げたので、女達は大股を開いた状態で逆さ吊りの状態となった。

意識を取り戻した女達が自分たちの置かれている体位の異常さに悲鳴をあげた。

女達の悲鳴など意に介さず、男達は黙々と作業を進め、二つの足枷の中間に位置する、輪から長く下に伸びた鉄棒の長さや角度をネジで調節して、女の二カ所の穴の真上に蠟燭がくるように設定した。

鉄環に取り付けられた全ての蠟燭に火が点され、長く伸びた二カ所の鉄棒に取り付けられた蠟燭が、剃毛され童女のようにすべすべした秘部を明々と照らし上げた。

全ての準備が出来て、男達は綱を引き上げた。

女達の体は天井いっぱい引き上げられ、開脚逆さ吊りの形となった。そして逆さになった女達の頭の下には、水を一杯にはられた大きな桶が設置された。

水桶の両側には踏み台を置いて二人の屈強の男が女を挟むように立った。

手にはささらになった竹棒を持っていた。

男達の何人かは、これから女達に加える暴力の予感に興奮して体が熱くなったのか、時代がかった印半纏を脱ぎ捨て、赤い六尺褌一枚になっている者もいた。

赤銅色に焼けた筋骨隆々とした男達のたくましく引き締まった腹筋の下で、男の劣情の強さを見せ付けるように、赤い布地を突き破るように男のモノが隆起していた。

照明を落とされた拷問室の中に、女達を逆さに吊った鉄の環に取り付けられた蠟燭の灯りが、まるでシャンデリアのように怪しく室内を照らしていた。

やがて蠟燭の炎が大きく育ち、熱した蠟が女の下半身目掛けて落下し始めた。

特に長く伸びた鉄棒の先に付けられた蠟燭から垂れる熱蠟の滴は、狙い定めたように敏感な二つの穴の上に落下した。

雨のように降り続く蠟の熱さに女達は悲鳴を上げて身悶えた。

剛沢が男達に向かって顎をしゃくった。

手綱を緩められた鉄環は女を吊したまま降下し、女の体が胸まで水の中に没した。

熱蠟や打擲により悲鳴を上げて思わず開いた口や鼻腔から水が激しく口腔内に流れ込み気道を塞いだ。

肺にまで達しそうな容赦無く流れ込む水に気道を塞がれ、呼吸の出来ない苦しさで、女達が体をくねって激しく身悶えた。

その激しい動きが、蠟燭を立てた鉄環を左右に大きく揺らし、更に女体に注ぐ蠟の雨の量を増やすことになった。

充分窒息の苦しさを味合わせてから、手綱を引き上げ、女の顔を水面から引き上げた。びしょ濡れになった顔で、口腔内に溜まった水を吐き出し、苦しそうに息を吸い込んだ。

「それ！ブリブリ・・・」

と男達が手にした割れ竹で、女達にホッとする間も与えず、打擲を加え始めた。

先日の逃亡騒ぎでは手もなく打ち据えられた女達に仕返しをするのは今とばかり、満面に喜色の笑みを浮かべて割れ竹を振るった。

割れ竹がお竜の柔らかな腹をとらえる度に、豊かに載った脂肪の層に襲撃の波が発生し、下腹や大腿に伝播した。

男達が思い切り打ち据える割れ竹の衝撃で曉美の豊満な乳房は上下左右に激しく振れ、晴江は激痛に苛まれて腰を振り、体を海老のように仰け反らせた。

男達の鞭打ちの打撃で、柔肌に瘡蓋の様に張り付いた蠟が弾け飛び、苦悶に下半身を身悶えさせる度に陰部を覆っていた蠟が剥がれ落ち、赤く熱を持った柔肌が姿を現したが、その受傷した柔肌の上に新たな熱蠟が降り注いだ。

ソレっ！と男達が逆さに吊り下げられた女の身体に手を掛けてグイッと力一杯押した。

男達に押されて女達の身体が宙吊りのまま独楽のように勢い良くグルグルと回った。

回転の勢いで熱蠟が雨の様に降り注ぎ、堪らず悲鳴を上げて、逆さに吊られた身体を身悶え

させた。

グルグルと回転する女達の両側に位置した男達が腹といわず胸といわず大腿といわずあらゆる場所に割れ竹を振るって、白い女達の身体が赤く染まっていった。

回転力が弱くなりやがて止まると、今度は吊り下げた縄の撓りで逆方向に回転を始め、何度も回転逆回転を繰り返した。

逆さ吊りの苦痛と、下半身を容赦なく襲う灼熱の滴と、激しい打撃に女達が狂ったように悲鳴を上げて泣き叫び、男達に許しを請うのを冷酷に無視すると、再び手綱を緩めて、女の体を水の中に没した。

男達は、本心からかつての親分の妻や娘や愛人をいたぶることの快感に浸っているかのようであった。

どうも黒い嗜虐の快感に、男達の硬く隆起した物がまるでテントを支える支柱のように赤禪を下から突き上げ、赤い布地の内側からジワジワと染みを作っていく様子が在り在りと映ったが、残酷な色欲に溺れた男達にはまるで意に介する余裕は無かった。

今は完全に抵抗を封じられた、昔自分達に尊大な態度で接していた女達に、割れ竹の鞭を振るい、水責めにして、恨みを返す快感に溺れた男達は熱く上気した身体からガラガラと滝の様に汗を流していたが、流れ落ちる額の汗を拭くことも忘れた様に、暴行を加え続けた。

水中に没した女達の身悶えがか細くなるまで、充分窒息の恐怖を味合わせてから引き上げて、更に叩き責めを加えた。

女達の顔面を水上に引き上げ、堪えていた息を吸い込もうとした口を大きく開いた瞬間を狙いすまし、再びザブリと水中に落とし入れもした。

新鮮な空気を求めて大きく開いた口の中に激しく水が流れ込み、気道を逆流した水に水中でむせ返った。

窒息状態の朦朧とする意識の中で、下半身の筋肉が痙攣するかの様にピクピクと蠢いていた。見物客には、水中に没して息を吸えない口に代わって、水面から突き出した下半身の二つの口が、まるで呼吸しようかとするようにパクパク開いたり閉じたりを繰り返して、動いている様子が蠟燭の灯りに照らされて淫靡に映った。

そしてその苦しげに開孔する穴の内部に向かって、間近に灯された蠟燭から熱く溶けた蠟が、隠微な管が大きく口を開く度に、どっと容赦無く流れ込んだ。

敏感な体内の粘膜を襲う熱蠟の激痛に反射的に体を仰け反らせた。

その激しい動きが蠟燭を震わせ、溜まっていた熱蠟を更に注ぎ落とした・・・

男達の圧倒的な暴力へのせめてもの抗議か、口内に流れ込んだ大量の水が体内を循環して、放出されたのか、意識も喪失して、反射的にブルブルと身体を痙攣させる女達の大きくこじ開けられた股間から突如噴水の様に黄色い水が吹き上がった。

割れ竹を振るう男達は、突然の女達の放水を避けながら、真上に向かって小水を吹き上げる惨めな敗残の様を晒すかつての上司の女達の姿に快哉の笑い声を上げた。

そして、レモン色の汚水に濡れた女達の身体を洗うかの様に、小水の混じった水桶の中に再び墜とし込むのであった。

堪えようの無い苦痛に責め苛まれ、意識を失って、宙吊りのまま動かなくなった女達に、残酷な男達は休む事無く責め続けた。

やがて、蠟燭も短くなり、女達の身悶えも小さくなり、こうしてブリブリは終わった。

完全に意識を失った女達が、検診台を呼ばれる、以前晴江とお竜が重ねて縛り付けられた台の上にそれぞれ俯せに縛り付けられていた。

会陰部の毛を全て剃り上げられ艶々輝る内股を大きく開いて縛り付けられているため、三人の股間の奥は見物客から丸見えとなっていた。

「今日のために彫り師を呼んでおいたんだ・・・」

剛沢が見物人に説明した。

奥から三人の彫り師が彫り物の道具を持って登場した。

「お願いするのはこの女達だ。この女達の尻の穴の周りに彫り物を入れてくれ・・・うんといやらしいやつをな・・・」

と、彫り師に目配せした。

彫り師達は検診台の傍らに置かれた椅子に腰掛け、道具を取り出し準備を始めた。

椅子に腰掛けた彫り師達の眼前には女達の股間があられもなく大きく拡がっていた。

彫り師達は、作業がやり易いように金属で出来たバネの様なものを女達の股間に取り付け、尻たぶを大きく左右に押し広げ菊花の周辺が完全に拡がったままと成るようにセットした。後ろの孔の周辺の皺が精一杯引き延ばされ、セピア色した艶々とした粘膜が、彫り師達の目前に露わとなった。

全ての準備が調うと彫り師達はおもむろに鉋を手にした。

意識を完全に失ったまま、検診台の上で俯せになり、恥ずかしく股間を晒していた女達だったが、尻穴の直ぐ傍の敏感な粘膜に鉋を突き立てられた瞬間、激痛に意識を取り戻し、激し

い痛みに体を硬直させた。

しかし、体は検診台に厳しく固定されており、身動きすることも出来なかった。

口には舌を噛むことを防止するためか、意識を失っている間に、箆口具を噛まされており悲鳴を封じ込めた。

こうして、抵抗の出来ない女の体に鍼を立てられ墨を流し込まれていった。

繊細な神経を散りばめた秘境に鍼を立てられる堪え難い痛みに女達は身悶え、涙を流して箆口具に遮られて言葉に成らない悲鳴を上げ続けた。

肛門部を襲う激痛にただ耐えるしかない女達は、全身に苦悶の脂汗を浮かべ、鍼が突き立てられた瞬間グッと息を詰め全身を硬直させ、彫り師が鍼を離している間に身体を弛緩させ、ハアハアと荒い息を吐いた。

容赦無く、そして絶え間なく、リズムカルに薄い粘膜で被わられただけの鋭敏な神経を散りばめた敏感な器官の周囲に鍼を立てられ、その都度女達の括約筋が緊張したり弛緩したりし、菊花がグッと収縮したり、しどけなく開いたりを繰り返す様になっていた。

セピア色していた菊の蕾が墨を流し込まれて、次第に毒々しい色彩に変色して行っただ。

苦痛に苦悶する女達の股間を彫り師の肩越しに眺めて剛沢は、女達の体の異変に気付いた。

肛門周辺の繊細な粘膜に鍼を立てられながらも、何時の間にか女達の牝芯はプックリと充血し、膨潤した秘肉の奥からは熱い体液が滲み出し、粘調な液が一つに集まってゆっくりと滴り落ちようとしていた。

それは明らかに全身に滲み出た苦悶の油汗とは違っていた。

「お前達、案外、こんな事が好きなんじゃないか？」

繊細な神経が集中する薄い粘膜への刺青の激痛に身悶えながら女体が無意識に反応して愛液を滴らせ始めたのを発見してゲラゲラ笑いながら剛沢が女達をからかった。

その剛沢の問い掛けに、涙を流し激痛に身悶え、今にも失神しそうになりながら、女達が激しく頭を振った。

女達の心とは裏腹に、これまで陰惨な調教を受け続けてきた肉体は、少しずつではあるが、その身に加えられる逃れられない惨めさや苦痛を逆に被虐の快感として捉えられるように変貌して来ていることが確認でき、将来に楽しみの様なものを見付けた剛沢は嬉しそうに頬を歪めるのであった。

こうして長い時間をかけて、女達の最も隠しておきたい羞恥の排泄器官の周囲には淫猥な彫

り物が彫り込まれた。

晴江のそこには淫靡な菊の花弁に似た孔を中心に毒々しい赤い花弁を開いた彼岸花が彫り込まれ、お竜のその排泄孔からは雷雲が噴き出し、その雲の中から出現する一匹の竜と雲の中に潜り込むもう一匹の竜の絵が彫り込まれ、暁美の場合はその孔を中心とする幾何学模様が同心円状に描かれていた。

秘部への激痛を性的快感として転化する真性のマゾとしての能力を女達が発揮し始めたことを剛沢が指摘したように、長時間に及ぶ激痛を伴う作業の間に、何時の間にか女達は何度も絶頂を迎え、高圧電流をその部分に注ぎ込まれた様に、身体を仰け反らせて、ブルブルと全身を痙攣させ、雌芯から夥しい樹液を何度も放出するようになっていた。

繊細な神経を散りばめた菊花とその周囲に鍼を刺され墨を流し込まれるという、何時果てるとも判らない激痛と苦悶の間に、心神喪失となり混乱した女達の脳髄は、正常な知覚能力を喪失して、何時の間にか秘所を襲う苦痛をまるで性行為の快感の様に転化して感じるマゾ牝としての能力を開花していたのだった。

彫り師から淫靡な部分に彫り込まれながら、身を振り愛液を吐き続けながら何度も絶頂を迎える女達の様子に見物の男達も堪え切れないと云うように股間を押さえた。

女達の愛液を正面から浴び、腹から胸にかけてビッショリと服を濡らした彫り師が、浴びせられた愛液で濡れ輝る鍼を持つ右手を服の裾で拭きながら、剛沢に哀願する様な目を向けた。彫り師達の希望を察知した剛沢が無言で肯いた。

彫り師達がニヤッと口の端を歪めると、無言のまま立ち上がり服の前を開くと、熱く加熱された岩の様に硬く隆起した分身を取り出した。

立ち上がると、女達の股間は、丁度男達の腰位置の前に開け広げられていた。

そして、それを彫り物の作業を続けながら、女の中心を貫く穴の中にゆっくりと押し入れて行った。

男達から熱鉄の様なモノを濡れそぼった華肉の中に挿入されながら、女達は秘部から込み上げる苦痛の転じた快美感からだけでは得られなかった、真の肉欲を貪り取ろうとするかの様に、まるで飢えた獣が口腔内にねじ込まれた肉塊を貪り喰おうとするかの様に女の本能に従いそれを喰い絞めた。

彫り師が鍼を立てる度に、華洞深く埋め込まれた逞しい男のモノに縋る様にビクッと収縮し、激しく締め上げた。

鍼がリズムカルに秘肉を衝く度にそれはリズムカルに収縮を繰り返し、得も言われぬ快感を彫り師達に与えた。

女達が何度目かの絶頂を極めるのと併せるように、彫り師達も熱いエキスを胎内深く注ぎ込んだ。

鍼を女達の股間に立てたまま、男達の腰がピクピクと痙攣していた。

「最後の鍼だ・・・こいつは痛いぜ・・・」

女達の胎内に溜まっていた精を注ぎ込み、少し身体が軽くなった彫り師がボソッと呟いた。彫り師は肛門鏡の様な金属で出来た物を、後ろの孔にズブリと挿入すると、そのまま孔を大きく押し開いた。

「へへ・・・臭いのが匂ってくるぜ！」

女達の最深部から解放された臭いと、愛液を垂れ流す女陰から立ち昇る雌の匂いが混じり合った芳香を鼻腔の奥まで吸い込み恍惚とした表情を浮かべながら、外部に露出した直腸の粘膜に突然鍼を押し立てた。

肛門内部の粘膜を鍼で刺された瞬間、女達はブルブルと腰を振るわせ、ヒエーッ！とおぞましい悲鳴を上げると、まるで抗議するように彫り師達に向かって激しく尿を迸らせ始めた。まるで水道の栓を全開にしたように膀胱内に溜まった温水をシャワーの様に彫り師に浴びせ掛けると、そのまま白目をむき頭を垂れてガックリと失神してしまった。

この様子に見詰める観客からも感極まった様に溜息が漏れた。

女達から断末摩の熱い体液をまともに浴びせられ苦笑いしながらも、彫り師達は最後まで仕事を続けた。

女達が放出した様々な体液を浴びてびしょ濡れになった彫り師達が、一連の作業を終了して道具を置いた時、女達は完全に失神しており、検診台の上にグッタリと上体を預けていた。激しい絶頂の余韻にも似て、時々股間や太股がピクッ、ピクッと痙攣し、前の花園はビッショリと濡れ、彫り師達の置き土産の白い粘液の混じったネットリとした女の樹液を滴らせていた。

女達の足下は女達が放出した様々な液体でビッショリと濡れていた。

その淫猥な器官の卑猥さをさらに強調するような図柄を見て、すっかり上機嫌になった剛沢

は、「いやー、ご苦労、ご苦労！お陰で、恥ずかしい部分が、一段といやらしく見えるようになったぜ！」と、仕事を終えて道具を片付ける彫り師達に向かって労をねぎらった。そして、観客席に向かい、「どうですか？皆さん、彫りたてのここを掘ってみたいと思いませんか？本日は、お代は頂きませんよ。」と呼びかけるのであった。

裏切りの連鎖

「そうかい？お前さん達もやっとその気になったか？・・・勿論お前達に恨みなんか無いさ・・・お前達が俺の杯を受けて大亜門戸会の傘下に入りたいと言うなら、考えてやっても良いぜ・・・」

ソファにどっかりと腰を降ろした剛沢がふんぞり返りながら電話に向かって尊大な口調で話していた。

ガチャンと電話を置くと上機嫌で黄原の方を向いた。

「へへ・・・聞こえていたか？　これまで目高組の傘下に居た黒川組の組長からの電話だぜ・・・俺の杯を受けて大亜門戸会の傘下に入りたいって言って来たぜ！　・・・これまで大亜門戸会に対して失礼な態度を取って済まなかったと、野郎、電話口で必死になってペコペコしていたぜ！」と、大笑いしながら言った。

「これも大亜門戸会が正式に村崎會の傘下に収まる事が出来たお陰だぜ！目高組が潰れて以来、日和見を決めていた目高組に繋がる中小の暴力団や舎弟企業が、大亜門戸会の傘下に入れてくれって、今後どんどん泣き付いて来るぜ！」

確かに剛沢の言う通り、目高組の奈和組長から杯を受けた中小の暴力団やそれに連なる組織はS市の周辺都市や県内やその他全国に併せて40以上あった。

今回の目高組の殴り込み計画では、目高組と大亜門戸会の単独の抗争であり、奈和組長も目高組の方が大亜門戸会よりも圧倒的に優勢であったので応援は不要と、これらの傘下の組から助力を求めなかったのも、無傷のまま残っていた。

彼らは、目高組の敗北後にこれまでに受けた目高組への義理を果たすために大亜門戸会に対して報復するべきか否か決心が付かないまま、ズルズルと今まで時を過ごしていたのだった。元々、彼らは目高組がバックに付いていたからこそ、‘虎の威を刈る狐’みたく、シノギを続けて来れたような弱小の組織ばかりだったから、彼らに仇討ちを期待しても無理な相談だ

ったろう。

それでも、もし、青沼のような指導力の有る男が、これらの組を纏めていれば、強力な勢力となって大亜門戸会に復讐戦を挑んで来た可能性はあった。

しかし、彼ら小粒の親分衆の中には、各地に所在する目高組系列の親分を説得して組織を纏めるだけの器量を持った男はおらず、誰も自分が先頭に立って動く事を躊躇し、結局為すこと無く日和見を決め込むしか無かったのだ。

そこに、大亜門戸会が村崎會の傘下に迎えられたと言う情報が入り、彼らの中にも恐慌が走った事だろう。

村崎會の後ろ盾を得て、圧倒的に強力となった大亜門戸会に敵対する者として剛沢に睨まれたら、自分達の組織など簡単に潰されてしまうばかりか自分の命さえ危ういと、恐怖に居ても立っても居られなくなってしまったのだろう。

今後は、これら元目高組傘下の親分衆が我先にと剛沢の下に詫びを入れ、杯を受けたいと雪崩の様に剛沢の下にやって来る事だろうと黄原は想像した。

黒川が、その雪だるまの様に肥満した体を窮屈そうに小さく折り畳んで正座しながら、禿げ上がった額から流れ出る汗を拭き拭き、必死になって剛沢に弁明の言葉を口にしていた。

黒川はキリフィッシュ興業の灰田や白井組の白井など自分の親しい親分や目高組の系統となっていた企業舎弟のボスを引き連れ、これまでの非礼の釈明及びこれまでの行為を水に流して貰って大亜門戸会の杯を受けたいと希望して剛沢の下を訪れたのだった。

黒川達の後ろでは、共に訪れた9組織の親分連中が、畳に顔を押し付け、顔も上げられない程かしこまって座っていた。

一方剛沢の方は、上座に置かれた豪華な革張りのソファに反っくり返って座り、フンフンと尊大な態度で、そんな黒川達の弁明を聞いていた。

前回の村崎親分に対した時とは違って、今度は自分が優位に立っての面会であるので、礼儀をわきまえないような侮蔑的な態度を見せていた。

なんと、ソファの前には晴江、お竜、曉美の三人の女を全裸のまま跪かせ、客の目の前にも関わらず、ズボンから自らの巨大な肉塊を取り出し、三人の女にしゃぶらせていたのであった。

三人の女は剛沢の股間を取り囲んで、犬の様に四つん這いの姿勢で剛沢の下腹に身を寄せ、

舌を延ばしてそれぞれの方向から隆々とした肉茎を舌先で嘗め上げたり、唇を押し当てて、口唇で優しくその表面をさすったり、交互に口内に入れて吸い上げたり、一人が亀頭部を口に含んでいる間に別に一人が玉袋を頬張り舌先でボールを転がすなど、娼婦としてのテクニックを駆使して剛沢の性感を掻き立てていた。

女達の首には、革製の犬の首輪が嵌められており、それぞれの首輪から延びた鎖を一纏めにして、ソファにふんぞり返り返った剛沢が左手で握っていた。

右手にはブランデーグラスを持ち、グラスが空になる度に剛沢の横に控えた愛人達が注いだり、酒のツマミを剛沢の口に運んだりしていた。

晴江達は、一糸纏わぬ裸身を晒すだけで無く、尻穴に馬の尻尾のようなフサフサとした長い毛を植え付けられたパイプを押し込まれるという屈辱的な姿で剛沢の陰部を口唇を使って愛撫していたのだった。

黒川達が部屋に通されるかなり前から剛沢のモノをしゃぶるように命じられて、必死になって口を使った技巧を駆使しており、その間、間断なくパイプの振動に責め立てられ続け、今や独立した第二の快感スポットとして改造された箇所を内側から襲い来る妖しい刺激に煽られ、何時の間にか秘所はプックリと充血し、女芯の内部にはたっぷりと愛液をたたえ、ピッタリと閉ざした太股の間を通して滴り流れていた。

内部から襲い来る快美感を伴った痺れにより堪えようとしても尻は妖しげに蠢き、剛沢の獣じみた男の性臭に煽られ、興奮してドクドクと血流が増して体温が上昇し、下半身は赤く染まり、うっすらと体に汗を浮かべる興奮状態にあった。

剛沢の機嫌を損ねると、またどのような無理難題を押し付けられるか分からないと言う恐怖感から、惨めさを押し殺して一心不乱に唇でさすり舌先で野獣の匂いがする剛沢の怒張を愛撫始めたのであったが、今は込み上げる性感に頭の中はピンクの靄が掛かった様に薄ボンヤリとした状態になっていたのであった。

剛沢の逸物を口唇を駆使して愛撫を続ける内に、部屋の中に何人かの男達が通されて来たのは気配で分かった。

しかし、一心不乱に剛沢のモノを咥え続ける女達には、後を振り向く事も出来ず、娼婦としてのテクニックを発揮するのに夢中で、人目に裸身を晒す事に羞恥心を感じる正常な神経も長い娼婦としての経験で麻痺しており、剛沢の性器から立ち昇る獣じみた雄の匂いと、尻穴から込み上げるバイブレーターの綾なす怪しげな快美感に翻弄され今は意識も朦朧となり、

冷静な判断力も失っていたため、それが誰かは知ることは出来る状態では無かった。

これまで、衆人の眼前で強制される性行為にも慣れてしまった身にとって、それが誰であり、自分達がどの様な恥ずかしい様を晒していようと、最早気にならない様子であった。

肉欲に呑み込まれ、完全に常軌を失っている女達には、自分達の背後に居る男達が誰で何を話しているのかも、今にも薄れそうになる意識の中では、ほとんど理解出来ない状態であった。

しかし、性の熱病にうかされた様にうっすらとした意識の中ではあったが、何時しか自分達の真後ろで、剛沢に向かって必死の哀願を繰り返す男達の声が無意識の内に脳内に流れ込み、ふと、それが元目高組の傘下の組の組長である黒川達であることに気付いた。

そして、このような惨めな姿をかつての下部組織の親分衆の目に晒していることに驚愕し、熱病に浮かされていた興奮も一度に醒め、羞恥を超えた恐怖感のような感情が一機に込み上げて来た。

その瞬間、全身にドッと汗が噴き出し、堪えようにも全身の震えが止まらず、恥辱と屈辱感で体全体が赤く染まって行くことを感じた。

思わずこの場から逃げ出してしまうような衝動に駆られた事が剛沢に感知されたのか、口技を続ける様に無言の儘、首に巻かれた犬の首輪についた鎖をグイッと引かれた。既に長い時間に渡り自分たちの恥ずかしい姿を元の配下の親分衆の目に晒してしまった今となっては、かつての下部組織の組長等が気付かない様に口唇による愛撫を続けるしかない諦める女達であった。

幸い、黒川達は弁明に必死で、浅ましい娼婦の口技を発揮しているのが、元目高組の女達だとは未だに気が付いていない気配であった。

このまま、元配下の組長達が自分達に気付かないまま、剛沢との面会が終わることを心に願うのであった。

一方、剛沢の逞しいモノの発する野獣の様な臭いと、肛腔を内側から地震の様に揺り動かすパイプの痺れるような振動が正常な神経を麻痺させ、かつての傘下の組長に目撃される羞恥が不思議な快美感のように感じる倒錯的な意識の中で、無意識の内に股間が温かく湿り、犬の様に尻を振ってしまうのであった。

元目高組の下部組織の一員であった黒川達の前に全裸姿を晒し、恥ずかしい口交の様を晒し羞恥を押し殺して、込み上げる不可思議な激情に支配され全身を紅潮させ、必死に剛沢に口

唇の奉仕を続ける女達の尻から生えたフサフサと長い馬のような尻尾が、バイブの心地良い振動に煽られ、思わず知らず蠢かしてしまう尻の動きに合わせてサワサワと揺れて、四つん這いの姿勢から下に垂れた長い毛先が床を掃いている様で在った。

バイブは完全に女達の直腸内に埋没しているため、その全体像は表からは見えず、バイブの底に植え付けられたまるで野生馬のフサフサとした黒い尻尾の様な、無数の長くて柔らかい動物の毛だけが菊門を割って表に露出し、まるで本当の尻尾が尻から生え出ているかの様に見え、それが、堪え切れず尻を振る度に円を描くようにサワサワと揺れ動く様子が妖しくも扇情的に映った。

剛沢に屈辱の奉仕を続けている間にも女達の体内ではバイブが、情け容赦無く、間断なく責め続けていたのだった。

バイブの後端に植え付けられた大量の長い柔らかな黒い毛に覆い隠されて、女達の秘所の様子は、間近に座る黒川達の間からはかろうじて隠されていたが、直ぐ上に埋め込まれたバイブの紡ぎ出す激しい快美感と元の配下の親分衆に羞恥の姿態を見られるという倒錯した興奮に掻き立てられ、女達の秘密の花園はこれ以上無い程充血して、既に女の谷間はパツクリと表に向かって口を開き、その恥ずかしい内部を晒し、毒々しく膨潤した花卉とその奥は水を吸った綿のように豊かな湿気を帯びて艶々と光っていた。

銀子によって開発された裏の快楽源にジンジンと痺れる様に込み上げるバイブレーターの刺激に堪えられずに、ブルブルと尻を震えさせるために、痛い程屹立した木の芽をバイブに植えられた柔らかな毛がサワサワと撫で付けた。

その股間から背筋に逆流する鮮烈な快美感に思わず腰をビクッとくねらせ、剛沢の肉茎を口に含みつつも、その切ない刺激に思わず鼻を鳴らしてしまうのであった。

冷たい針を背筋に刺されたように、背中を駆け抜ける鋭い刺激に、無意識の内に女達の乳首は硬く凝り、前方に突き出していた。

相乗する快感の余り、時折、激しく畳み掛けて襲い来る性感に堪え切れなくなって、思わず大きく腰を振るわせてしまった。

その大きな腰の動きにより肛口に突き立てられている尻尾の先が左右に大きく揺れ動き、その長い豊かな毛に隠されていた甘美な愛液で艶めかしく濡れ輝る深淵がチラチラと黒川達の目の前に姿を見せた。

黒川達は、剛沢を恐れるあまり、まともに顔を上げて剛沢の方を直視する事も出来ず、汗を

拭き拭き苦しい弁明をしていたが、時々、女達が苦しそうに鼻を鳴らす声や、女達の股間から漏れ出る虫の羽音の様なモーターの振動音に無意識につられて、その尻を黒川達に向けて必死に剛沢のモノを頬張る全裸の女達の方をチラチラと盗み見るのであった。

そして、自分達の目の前で、男のモノを剥き出しにして、隆々と屹立させている剛沢の胆力に圧倒されるような物を感じていた。

最初、剛沢の前に案内された時、顔には出さなかったが、自分達を無視するように3人の女に自分の物をしゃぶらせ続ける剛沢の非礼に驚き、内心腹を立てた黒川達であった。

はじめの内は、剛沢に対する緊張感もあり、また、女達が自分達に背を向けていたので、四つん這いになり、背を丸めて、まるで餌に群がる犬の群れの様に剛沢の一物に一心不乱に舌を舐めさせる女達が誰かは、気が付かなかった。

全身に刺青を背負った熟年女を中心として、その両側に若い二人の女が陣取り、全員尻をこちらに向け、剛沢のたくましく隆起した男性器への愛技に自分でも感じているのかビクビクとイヤらしく尻を振りながら剛沢の逸物に口唇を使って一心不乱に奉仕を続けている様だけが目に焼き付いた。

天井に向けて隆起した巨大な男性自身に競い合う様に唇を押し当て、延ばした舌先を舐めあひ、奪い合う様に一本の肉茎を互いに争いあひながら口に含みあう三人の娼婦達の浅ましい姿に何時しか目を奪われて行った。

そして驚いたのは、獣の尻尾の様なフサフサとした毛を植え付けられた道具を突き立てられた尻穴の周りには猥雑な刺青が彫り込まれていた事だった。

商売柄、身体に刺青を入れた女を見ることには慣れている黒川達であったが、肛門の周囲に彫り物をしている女は見たことが無く、その卑猥な佇まいに唖然とするのであった。

しかし、好色家の黒川達にしても、今はそのような女の肢体に興味を持って眺めている余裕などまるで無く、剛沢の許しを請い自分の組織の安全を確保する方が最優先―と、努めて女達を意識しないようにしていた。

女を^{シノキ}商売の道具とし、また何人もの愛人を抱える、女を見る目の肥えた親分衆ではあったが、大方、そこいらの身を持ち崩したパン助上がりの娼婦に自分のモノを咥えさせているのだらうと云う具合にしか思っていなかった。

黒川達も晴江が総身彫りの立派な彫り物をしている事は噂には聞いていたが、実際に目にする機会など有るはずも無く、賭場では片肌脱ぎになって壺を振るお竜の昇り龍の刺青は目にした事はあったが、黒川達の位置からは肩に彫られた刺青も良く見る事は出来ず、尻だけを

こちらに向けて、顔を隠す様に小さく身を曲げる女達の顔をまともに窺う事が出来なかった
ので、まさかそれが、かつての目高組のトップに君臨していた女達のなれの果ての姿だとは、
夢にも思わなかったのであった。

所が、暫く経ってから、その女達が目高組の大姐とお嬢と女胴師のお竜である事に自然に気
付いた時には、思わず心臓が口から飛び出すような衝撃を受けた。

どうにか驚きの声は呑み込んだが、冷たい汗がドッと背中を流れ落ちるのを感じた。

この非常識な対面の演出をしたのは黄原であった。

わざと非礼な態度を取り、元目高組の女達に剛沢の男根を吸わせる場面を見せ付けることに
より、目高組の女達も完全に大亜門戸会の娼婦に墜ち、大亜門戸会に対して完全に屈服して
しまった事を鮮烈に思い知らせ、最早、大亜門戸会に逆らっても無駄で有り、これまでの目
高組への義理を捨てて、大亜門戸会に無条件降伏する意外に道は無い事を思い知らすため仕
組んだのだった。

ついこの間までは、指一本触れることも憚られるような氷のような冷徹な威厳を漂わせてい
た大姐や、全身がまるで鋭利な刃物の様な緊張感を漂わせ、組の中を肩で風を切って歩いて
いたお竜や、まるで古代神話に登場する美と破壊の女神のように組員から畏敬されていたお
嬢達のかつての颯爽とした姿は何処に見られず、剛沢の前に完全に屈服し、犬の首輪を嵌め
られ人間犬のような姿をさせられ、尻穴に挿入されたバイブに責め立てられ、込み上げる性
感に全身を赤く染め、時折堪えられなくなったようにブルッと腰を振るわせながら、頬を窄
めて、鼻を鳴らし、憎い敵方の男のモノを必死にしゃぶらせられる女達の姿を直視すると、
一時的に哀れみの感情を持ったが、あの男勝りの勝ち気な目高組の大姐達が元の系列の組の
親分衆の前で、性感に打ち震え、まるで発情した雌犬の様に股間を充血させ、滴り流れ出す
愛液で膣孔と周囲をビショビショに濡らして、恥も外聞も捨てたように、鼻を鳴らして、敵
方のボスに唇で奉仕している様を見せ付けられては、最早大亜門戸会に逆らう無謀さを痛感
させられたのだった。

裏世界に流れる話では目高組の女達が、大亜門戸会の軍門に下り、大亜門戸会の最下層の娼婦
に墜とされた一と、噂話は漏れ伝わってはいたが、並の男ではとても敵わないような、あの
毅然とした態度を示していた大姐達に関しては、絶対に有り得ない事と、ここに足を運ぶま

で信じられない思いであった。

しかし、今現実には並の娼婦では到底出来ないような浅ましい痴態を演じる元目高組の女達の姿を目の前に見せ付けられては、全てを事実として受け止めない訳にはいかなかった。

時々、腹圧に負けたようにフサフサとした尻尾を植え付けられたパイプが、汗塗れになって必死に閉ざす後ろの門を内側から押し開いて、半分程にゆるにゆるっと迫り出す事があった。卑猥な刺青が施された女達の肛門の襞を内側から大きく引き延ばす様にせり出して来た、周囲を飾る猥褻な刺青にも劣らない様などぎつい彩色された樹脂製のパイプの太さと長さに黒川達は思わず目を瞠った。

こんな巨大な物を跡形残さず体内に埋めていたのか！ーと、改めて驚嘆の目で女達を見詰めるのであった。

自分達も日頃から女をネタに金を稼いでいる稼業なので、そのような能力を女が身に着けるためには相当過酷な肉体調教を施されなければ無理だろうと理解した。

ちょっとやそこら打ったり蹴ったりしても言う事を聞かないような強い女達で在る事は長年仕えた自分達が良く知っている。

その女達を女として絶対に人目に見せる事が出来ないような痴態を晒す性の奴隷の貶めてしまった現実には、改めて打ちのめされ目がクラクラするような衝撃を受けた。

ほんの少しの間でも奈和組長から受けた恩義を返すために大亜門戸会に報復する事を考えた自分達が如何に無謀であったかを心の底から思い知らされ、一機に気持ちが沈んだ。

そして、もうこの男には敵わない！今は変に奈和組長に義理立てして、この男に逆らっても全く勝ち目は無く、それよりも最底辺の娼婦に墮落した元目高組の女達に同情して、剛沢の不興を買うよりは、これまでの目高組への渡世の義理も、この女達も見捨てて自分の命や組を護る方が大事と改めて思い直すのであった。

一方剛沢は、そんな啞然とした表情を浮かべる黒川達を眺め回して、晴江達の置かれている現在の立場を集まった親分衆が完全に理解したことに満足したように薄笑いを浮かべながら女達に奉仕を続けさせた。

パイプはベルトで股間に固定されている訳では無いため、女達が少しの間でも気を抜くと後の門を押し分け、表に飛び出して抜け落ちてしまいそうになることが何度かあった。

しかし、剛沢の許し無くパイプを取り出してしまった後の剛沢の懲罰を恐れるのか、慌てて

片手を伸ばすと、ブーンと大きな唸り音を上げて激しく振動する野太いパイプを腰をビクビクと震わせ、押し殺した悲鳴のような苦悶の呻きと共に激しく鼻を鳴らしながら必死に自らの手で再び直腸内部に押し戻すのであった。

かつての男を男とも思わず、何も恐れるものは無い様な威勢を振りまいていた鉄火女達を身も心も最低の売女^{ばいた}以下のまるで牝奴隷のような娼婦に墜とすためには、どの様な人間性を無視した過酷な肉体調教が繰り返されたことかと思うと、この女達に哀れみを感じざるを得なかった。

しかし一方では、この強い女達をかくも無力な最低の牝に変えてしまった剛沢の力を思い知らされるのであった。

また一方では、かつての強い女の化けの革を剥がされ、込み上げる官能の前に本気汁を垂れ流しながら、犬のように剛沢のモノをしゃぶり上げ、人目も憚らず性の奉仕を続ける女達の浅ましい姿に、今までこんな下らない女達を恐れて、黙って忠誠を尽くして来たのかと思うと妙に腹立たしさのようなものも浮かんで来るのであった。

兎に角、事ここに至っては、この惨めな敗北の姿を晒す女達に憐憫の心を抱いて、剛沢の不興を買うよりは、今は自分達の命と組の存続の方が大事と、剛沢に対する気持ちを読み取られぬように必死に詫びの言葉を続けるのであった。

長時間の弁明にも関わらず、冷淡な態度を取り続ける剛沢から明快な言質が取れない状況に焦った黒川は、これまで目高組に従い大亜門戸会と敵対していた非礼を謝り、この場で指を詰めて詫びます！ーと、涙を流すように必死に叫んだ。

これを聞いて剛沢は、本当に指を詰めるだけの覚悟が有るなら、最初から詰めて持ってくるだろうと思った。

それだけの腹も据わってないくせに大げさな事を言いやがる・・・と、醒めた心の中で芝居がかった黒川の態度を笑った。

散々黒川達を焦らして、パニック寸前になるまで精神的に追い詰めて来たが、そろそろ潮時かと感じていた。

本当に指を詰めろと言ったら、此奴らは青くなるだろうーと思ったが、今は此奴らを追い込むより、恩を売っておいた方が後々優利に運ぶと考えて、

「指を詰めるにや及ばないぜ！・・・お前さん方の申し開きを聞いて、よーく分かった！悪い

のは目高組の奈和の野郎で、お前さん達は、その間抜けな親分に良く従っただけだ！・・・実際お前さん達は、良く忠誠を尽くしたよ。褒めてやっても良いぜ！・・・だが、奈和の野郎はもういない。目高組も組を解散して、お前さん達が忠節を尽くす組はもう無えんだから、俺の杯を受けたって誰も後指差す奴なんかいないぜ！・・・前にも言ったように俺はお前さん達に対して、これっばかしも恨みなんか抱いていないさ・・・

もし、お前さん達が、俺の杯を受けて、これから大亜門戸会の為に忠誠を誓うと言うのなら、それなりの地位を用意してやっても良いぜ！」

突然の宣言に、自分達の身の安全が保証され、無事大亜門戸会の傘下に収まる事が出来る一と、剛沢の言質が得られて、居並ぶ親分衆が一機に安心して小躍りするように喜ぶ様子が剛沢の目に映った。

「本日は、本当に死んでお詫びをするつもりで参りましたのに、これまでの非礼をお許し頂けるばかりか、傘下に加えさせて頂けるなんて、剛沢親分の器量の広さには感激に堪えません！今後は、この黒川、このご恩に感謝して身命を賭して大亜門戸会のために働かせて頂きます！」

と、顔面に笑みを浮かべて大げさな言葉を叫ぶように口走った。

居並ぶ他の親分衆も我も我もと剛沢への忠誠を大声で叫んだ。

元の傘下の親分衆の前で惨めな姿を晒す羞恥に堪えて、必死に剛沢のモノに口唇による愛撫をしていた晴江達であったが、この親分衆の様子を耳にして、遂に堪りかねたように唇を離すと、黒川達の方を振り向いて、怒りに燃える目で睨み据え、

「お前達まで、奈和親分の恩を忘れて、大亜門戸会に尻尾を振ろうと言うのかい！？お前達には渡世人の恥つてものが無いのかい？！」

と、怒りと悔しさに涙を浮かべて叫んだ。

晴江から語気鋭く詰め寄られて、これまで目高組に盲従していた経験から、かつての大姐の気迫の前に一瞬たじろぎそうになったが、ここで優柔不断な態度を取ると剛沢の不興を買って、これまでの努力が水の泡になると思い、此处では剛沢を真似て晴江達には冷酷に接した方が得策と咄嗟に判断すると、

「うるさい！いつまでも大姐風を吹かせるんじゃないねー！薄汚い売春婦風情にお前呼ばわりされる筋合いなんかねえー！ お前達こそ、ケツの穴にでっかいバイブを呑み込んで尻尾を

振りながら、そんなみっともないビラビラを丸出しにしやがって恥ずかしくねえのか！」

と、逆に晴江達の方を睨んで凄んだ。

たった今、剛沢から傘下に入る事を許されたばかりなのに、もう何年も大亜門戸会の下に居た様な尊大な態度で晴江達を面罵するのであった。

今は、すっかり敵方に回ってしまったかつての傘下の親分衆にも汚い言葉を浴びせられ、涙を忍んで屈辱感に唇を噛みしめる女達であった。

かつての配下の親分達に冷たく罵倒された無念さが鉄砲水の如く襲い掛かり、悔し涙に咽ぶ晴江の肛門括約筋の緊張が一瞬緩んだ。

その瞬間、これまで必死の思いで堪えに堪えて来た腸内圧力に負けて、巨大なバイブレーターが晴江の尻穴を奥から押し開き、ズボッと大きな音を立てて表に飛び出した。

辛うじて黒川達の視線から護っていた最後の一線が失われ、晴江が悲鳴の様な声を発した。基部にフサフサとした尻尾を植え付けられた、今さっきまで晴江の直腸を内部から襲っていた生々しく匂い立つ様な巨大なバイブが唸りを上げながら黒川達の目の前にコロコロと転がって行った。

ついさっきまで晴江の腸内に押し止まっていた巨大で醜怪なバイブが畳の上でバタバタと跳ねるように蠢き回り、妖しげな腸内の粘液に塗れてテカテカと濡れ輝る毒々しい色彩を施された表面からは、まるで湯気を立てるように妖艶な匂いを立ち昇らせていた。

黒川達は自分達の目の前に放り出された巨大な淫靡な器具に驚いて目を奪われ、次の目を上げると剥き出しになった晴江の尻に目をやった。

其処には、巨大な肛門栓を失った肉の洞窟が、閉じる機能も喪失して、ポツカリと開いたまま、仄暗い赤黒い内部を見せていた。

そして、その真下には、赤く充血してポツカリと秘奥を開帳し、妖しげな淫液を垂れ流す秘孔が、隠す物を失ってまざまざと映った。

この有様に血走った目を睜り晴江達を凝視していた裏切り者の親分達は、オオッ！と思わず驚きの声を上げ、次の瞬間、剛沢に追従^{ついでしやう}する様に、最早隠す物の無くなった二つの羞恥の肉の洞窟を男達の目の前に晒し、羞恥にブルブルと身を震わせる晴江を指差してドッと笑い声を上げた。

身を振って陰部を隠そうとするのを咄嗟に手にした首輪の鎖を引いて防いだ。

お竜と暁美の肛門括約筋も耐力の限界に達し、今や完全に痺れ切り、最早直腸に突き立てら

れたパイプを咥え続けることは不可能となっていた。

長時間刺激を受け続け、神経もすっかり痺れ切った二人の女の肛口を押し開き、巨大なパイプが見る見るその姿を表に現し始めていたが、憎むべき剛沢達の前の完敗し愁嘆を晒す晴江の姿に心を奪われ、完全に神経が麻痺してしまっている二人にはそれも気付かない様子であった。

黒川達親分連中が固唾を吞んで見守る前で、それは大きな音を立てて肛口より吐き出された。曉美とお竜も遂に忍耐の限界を超えて、肛腔を責めていたパイプを吐き出し、恥ずかしい二つの孔を裏切り者の親分達の目に晒すこととなった。

三人とも剛沢の下腹に顔を埋めたまま、隠す物の無くなった尻を裏切り者の親分達の方に向けて、悔しさと羞恥で身体を震わせて泣き声を張り上げた。

剛沢が首輪に付けられた鎖をグイッと引き、女達がそのまま尻からへたり込みそうになることを妨げた。

まるで目高組を見限り大亜門戸会に寝返った裏切り者の自分達に対して無条件降伏した様に、床に倒れ伏すことも出来ず犬の様に四つん這いの姿勢をとらされたまま、身を揉み泣き叫び、長時間の肛門責めで閉じる能力を喪失したままポツカリと開いてその内部を晒す大きな空洞と、陰虐な責めに感じてしまって女の樹液を滴らせる赤く充血して物欲しげに開いた牝芯をマザマザと晒す女達の無残な姿に淫猥な視線を注ぎ嘲笑を浴びせるのであった。

全員が剛沢の杯を受けて傘下に入る事を確認すると、剛沢は屈辱と羞恥の涙を流し続ける女達を奥に下げさせ、客人の前で失礼な態度を取った事を軽く詫びた。

そして、任侠道の掟に従って正式な儀式を行うべく、部下に用意させ、自らも正装に着替えて姿を現した。

剛沢からの受杯と大亜門戸会傘下への加入の儀式も滞り無く済んでホッとしたような黒川達に、

「お前さん達もこの後、予定が入ってないようなら、簡単な祝宴を開きたいから、このまま残っていてくれ。」

と、剛沢が声を掛けた。

残酷な剛沢の心根を見せ付けられた様で、内心剛沢に対して恐怖心を抱いている男達であり、早く此处から立ち去りたいと思っていたが、剛沢からその様に言われた以上、少しでも剛沢

に逆らう事を避け、歓心を買いたい気持ちから、全員進んで申し出を受け入れた。

広い和室の床の間を背に剛沢が座り、その両側に居並ぶように6人ずつ親分衆が緊張した面差しで向かい合わせに座った。

各人の前にはめいめい膳が用意され、その上には色とりどりの肴が並べられていた。

剛沢の傍に陣取った黒川や灰田達が口々に本日の礼を剛沢に述べた。

齒の浮くようなお世辞をウンウンと聞き流すと、

「本日は皆、遠方からごくろうだったな。これでお前達も晴れて大亜門戸会の一員だ。これまでの経緯は全てさっぱり水に流して、これからは大亜門戸会のため誠心誠意働いて貰いたい。本日は、皆が大亜門戸会の一員となった事のお祝いだ。大した物は無いが、ゆっくり楽しんでいってくれ。」

と、居並ぶ親分衆に挨拶した。

「先ず、酒が無いと始まらないな。・・・おい酒だ！」

と、奥に向かって手をパンパンと叩いた。

襖がスーッと開いて、着飾った剛沢の愛人が入って来た。その手には鎖が握られ、その繋がれた鎖に引き立てられるように、犬の首輪を付けられた全裸のままの晴江が犬のように匍って部屋に入って来た。

この有様に、居並ぶ親分衆が驚きの声を上げた。

鎖で引きずられながら、晴江は頭を低くして尻を天井に向かって高く上げる不自由な姿勢で、部屋の中に進み入れられて来た。

よく見ると晴江の尻穴には日本酒のお銚子が埋め込まれており、その中の酒をこぼさない様に尻を真上に向けて高く持ち上げて匍って来たことが分かった。

両手を前に伸ばし、畳を嘗めそうな程顔を落とし、両の乳房を畳に擦り付ける様に上半身を低くし、一方大腿をピンと伸ばして尻を天井に向けて高く持ち上げるという、その滑稽でもあり扇情的でもある姿に男達が、ホーッと溜息を吐いた。

続いて、お竜と暁美も女達に鎖を引かれて同じような姿勢で部屋に入って来た。

最後に銀子が酒燗器と一升瓶を持って現れると、静かに襖を閉じた。

黒川達は、さつきの女達の痴態は、緊張した状況ゆえの見間違いでは無かったのかと夢を見ていたような気分となっていたが、今ここに正面から晴江達の顔を見て、やはり現実の出来事で有ったのだと再び思い知らされた。

そして、さつきといい今といい、かつての颯爽とした大姐の面影をすっかり無くし、剛沢の命令に従い、従順に羞恥の姿を晒す晴江達を唾然として見詰めるのだった。

「どうしたい？鳩が豆鉄砲でもくらったような顔をして！」

ボーッと女達を見詰める親分衆の茫然自失とした顔を眺めながら、

「もっともお前達もケツ酒ってのは始めてだろうが、見ての通り人肌の爛も用意出来ている。本日は無礼講だ！遠慮無くジャンジャン飲んでいってくれ！」

と、剛沢が女達の晒す余りにも扇情的な景色に度肝を抜かれた親分衆を見舞わしながら、可笑しそうに挨拶した。

本来、不潔な汚物を体外に排出するための排泄器官に透き通った硝子製のお銚子を埋め込み、その中の酒を飲ませようという剛沢の下品な振る舞いに黒川達は、努めて顔には出さなかったが、微妙なものを感じていた。

女達の肛門に突き入れられていたお銚子は透明であったので、薄いガラスの壁を通して押し広げられた直腸内部の赤黒い粘膜の佇まいが在り在りと映った。

そしてそのお銚子の中には、まるで直腸内から湧き出した分泌液のように日本酒がなみなみと溜まっていた。

剛沢は口では、怒っていない、何も恨みに思っていないと言っているが、この新しく傘下に加わったばかりの組織の首領に対して、元の親筋の女達を犬の様に引き出して、更に排便のための孔から酒を注がせるなどと言う、馬鹿にしたような持てなし方に、何か無言の圧力を感じるのであった。

「お一つどうですか？」

めかし込んだ剛沢の愛人達が客の前に腰を屈めて艶然と微笑み、自分の連れて来た全裸の人間犬の首輪の鎖を引いて、大きな尻を客の方に向けるように姿勢を変えさせた。

そして、後ろ向きのためにお膳の方が見えない女達に指示をして酒を注ごうとした。

「そうよ！そこよ！そこでゆっくりとお尻を下げるのよ！」

客の差し出すお猪口に徳利の口を触れさせると、お猪口の中に酒を注ぎ入れるよう指図した。黒川も不気味な緊張感を持って、席に付いていたが、晴江の首輪を引く亜紀から、艶然と微笑まれて、慌てて額の汗を拭いた。

今、黒川の目の前には晴江の良く張った豊かな尻がズンと突き出されていた。

普通の女なら一生人前に晒す事は、無いであろうその部分の様子が、黒川の目にありありと映った。

剛沢の供応は人を食ったものであり、無言の圧力を感じたが、こうして、以前は影も踏めなかったような親分の女房の裸を見ながら、酒を飲むのも悪いものでは無いと思い直すと、毒食わば皿までと、開き切った気持ちになって来た。

そして、肛門の周囲に彫り込まれた真っ赤な毒々しい曼珠沙華の刺青を押し広げるように尻穴からニュと飛び出した透明なガラス製の先の開いた管に向けてお猪口を差し出すのであった。

黒川の手にするお猪口と肛孔を割って飛び出した徳利の先端が触れてカチンと音を立てた時、一瞬晴江の尻がビクンと震えた。

どんなに嫌な客でも命じられたら醜態を晒さなければならない娼婦の身になったとはいえ、未だにかつて見下していた男の前で浅ましい姿を晒すことに耐え難い苦痛を覚えるのであった。

一方、黒川にしてもこれまで神経を擦り減らすように緊張して仕えていた女に、最早遠慮することは無くなったと思うと、気持ちも切り替わり、一機に胸の瘡^{つが}えがとれた様に心が楽になった。

以前から目高組の親分の女房である晴江の事は世間でも稀な美熟女だとは思っていたが、ヤクザ社会の緊張感の中で女性として性欲の対象になど空想したことは一度も無かった。

それが、これまでの張り詰めた精神状態が一機に消失し、憚ることなく目の前の魅惑的な裸体を目にすると、これまで感じたことの無い男の欲望がムラムラと込み上がって来るのを感じた。

そして、男達の目の前で次々と痴態を晒す女達を、今まで大姐として畏敬を持って従って来たのかと思うと、何やら非常に腹立たしいものが、沸々と腹の底から湧き上がって来るのを感じていた。

さつきは、剛沢に口を使って奉仕する晴江達の後ろ姿をチラチラと盗み見したが、剛沢に対する怯えと緊張感で、普段なら催すはずの性欲を感じる余裕も無かったが、こうして大亜門戸会傘下に迎え入れられた今となっては、不安が払拭されて落ち着きを取り戻した状態になっていたのも、余裕を持って晴江姐の全裸像とそして最も肝心な部分をジックリと観察することが出来た。

そして、元大姐のソコの部分の構造に注視する間に、股間が灼く熱を帯び、ムラムラと屹立

し始めた事を感じていた。

噂には聞いていたが、晴江の背に彫り込まれた、騎竜観音の見事な彫り物に目を奪われた。そして、その彫り物は背中から豊かな臀部にまで続いていたが、本来、人に見せるはずの無い、女性の最も大切な場所や女性が最も羞恥を感じるであろう器官を秘めた双臀の間は、透き通るように白い女性本来の肌が露出していた。

所がその、本来は排泄の用にだけ使用される、女性が最も人目に晒す事を憚るであろう孔の周囲には、背の騎竜観音とは明らかに意匠の異なる刺青が彫り込まれていた。

毒々しいほど赤く彩色された曼珠沙華の花弁が、排泄器官の孔の周囲を取り囲むように彫りこまれ、その直ぐ下の鮭の身のような濃いピンク色をした襷を覗かせる、ふくよかな桜色の花弁と好対照を見せていた。

黒川には、その毒々しくも蠱惑的な彼岸花の刺青が、晴江本人の意思に反して後から剛沢の命令により彫り込まれたもので有る事が理解出来た。

その毒々しい花弁を無理やり押し開く様に、その中心から徳利の先が顔を覗かせ、モリモリと左右に良く張った尻を淫靡に蠢かせ、今まさに自分の手にする猪口に酒を注ごうとしていた。

徳利は二合以上入る様な大徳利であり、特殊な調教を受けていない女が下腹に納めるには到底無理な大きさで在ることは女を商売のタネにしている黒川には容易に理解出来た。

僅かに徳利の注ぎ口が顔を覗かす後門は、その皺をすっかり延ばし切り、スベスベした粘膜を晒し、そこに彫り込まれた隠微な華の刺青を蠱惑的に見せ付けていた。

薄いガラス壁を通して無残に押し広げられた仄暗い内部の様子を間近に見て、晴江の腸内に埋め込まれた大徳利の残りの部分の巨大さに舌を巻いた。

まるで直腸全部を使って人間酒瓶になったかの様であった。

間近に目にする女性器の発する妖艶な精に煽り立てられたように、目は血走り、喉は渇き、股間が痛いほど屹立するのを感じた。

そして、激しく性的興奮を煽り立てられる一方、毒々しい赤い花弁の中心から突き出した筒口からは、禍々しい女の情念のエキスが注ぎ出されるような恐れにも似た感情が込み上がり、思わず猪口を持つ手が震えた。

晴江の方も、恥辱の部分に注ぎ込まれる黒川の熱い視線を感じて、「アアー、恥ずかしい！」

と、腰を揉んだ。

かつては、顎で使っていた系列の下級組織の親分の目に自分の惨めな姿を晒し、淫猥な視線が痛い程自分の恥ずかしい所に注ぎ込まれていることを痛感すると、カーッと下半身が熱くなるのを感じた。

そして、その下半身の灼熱感に腸壁を通した燗酒の熱気が加わり、股間が赤く火照って行くのが意識された。

燗酒を満たした薄い硝子製の巨大な徳利から僅かに体外に突き出した注ぎ口を取り巻く輪状の筋肉にドクドクと血流が集中し、その熱い奔流の様な血液の流れは、その僅か下に毒々しく開花する牝芯にも著しい変化を生み出していた。

二つの秘孔の示す体調の変化を見透かされたのか、ホウッと感に堪えた様な呻き声が上った。押さえようとしてもジワジワと赤く充血して行く秘所を下等な男に直視される羞恥と屈辱感に堪えようとしても尻がブルブルと震えた。

互いに震える猪口と狙いが外れたお銚子がカチカチと音を立てて触れ合い、酒が溢れるのを、「ほら！何をやっているのよ！しっかりと酌しないと駄目でしょう！」と、亜紀に叱り付けられるのであった。

お猪口で受けながら、晴江の尻穴から注がれた酒は高級な日本酒で有ることは直ぐに判った。淡く黄色みを帯びた液面からは不潔な臭いでは無く、高価な日本酒の持つ優雅な芳香が立ち昇り、晴江の直腸内で暖められた酒の温度がお猪口を通して黒川の指先に伝わった。

ようやく注ぎ終え、酒を満たされた猪口を手に、目は晴江の秘部に釘付けになったまま、まるで意識が無いようにフラフラと口まで運ぶと、からからに乾いた喉にいきなり流し込んだ。

乾き切った喉を晴江の直腸で暖められた酒がヒリヒリと刺激した。

黒川の向かいではお竜が灰田に酒を注ぎ、隣では暁美が白井に酒を注いでいた。

二人とも目の前に突き出された女の秘所を血走った目でマジマジと見詰め、まるで触れそうになるまで顔を寄せて、その妖しげな刺青の施された中心部から角の様に生え出したお銚子を収められた周辺のたたずまいやガラス越しに見える内部の様子を、生唾を呑み込みながら目に焼き付けていた。

男達の粘り着く様な淫猥な視線と腸内から伝わる焼ける様な熱気に煽られお竜も暁美も股間がジワジワと赤く染まって行った。

そして、そののぼせ上がった股間の体温により汗を浮かべた様に会陰部がジットリと湿って来るのであった。

羞恥の体温上昇に煽られるように赤く充血した股間からは何時の間にか山百合の香りにも似た芳香が立ち昇り始め、高級な日本酒の臭いと雌の匂いが入り交じった妖しげな香りを辺りに振りまき始めていた。

その後も、剛沢の愛人達に犬の様に引き回されて、恥ずかしいお酌を強制される女達であった。

何人かにお酌をして、腸内に埋め込まれたお銚子の中の酒が無くなると、首輪に結ばれた鎖を引かれて、銀子が待ち構える方に連れて行かれた。

そして、待ち受ける銀子が酒燗器で燗の付いた酒を、女達の尻穴から顔を出す徳利の中に流し入れるのであった。

「アアーッ！熱いわ！」

熱く燗をされた酒が徳利の薄い硝子壁を通して直腸の粘膜を焦がすように刺激し、女達に悲鳴を上げさせた。

腸壁を通して下腹を襲う灼熱感に苦しそうに身悶える女達に、

「そう？でもこれぐらい熱くしておかないと直ぐに冷めてしまうわよ。」

と、口の端に冷酷な笑みを浮かべながらうそぶくのであった。

「今はこんなに小さな徳利だが、もっと其処を鍛えて、次からは四合瓶くらい飲み込めるようにしてやるからな！」

すっかり良い気分で酒に浸った剛沢が、腸内に熱い酒を注ぎ込まれて、苦しそうに尻を振る女達に笑いながら声を掛けた。

人には冗談の様に聞こえても、これまで口にしたことは必ず実行して来た剛沢の事であるから、残忍な肛門拡張を強制し無理やり巨大な酒瓶をねじ込むことになるのだろうと、無残な姿を想像し、女達は背筋を凍らせ鳥肌を立てた。

これまで残酷な何人もの男達から熱く熱した浣腸液や氷の様に冷たい浣腸液を何リットルもその穴から体内に注ぎ込まれ、気が狂いそうになる程の苦悶を何度も味わわれて来た女達であったが、今は熱い酒が渦を巻いて流れ込んで来る衝撃を直腸内にピッタリと密着した硝子製徳利の薄い壁越しにその部分に感じるだけであり、硝子壁に食い止められてそのまま

腸内深く流れ込むことは無かった。

所が、不思議なことに、そのことが何か物足りないようなもどかしさを感じ始めていることに気付いて驚く女達がいた。

冷酷な男達から面白半分の下腹がパンパンに膨れ上がるまで残忍な液体を注ぎ込まれる激痛と、その後の男達の冷笑の中で恥ずかしい排便姿を晒すことになる浣腸責めを死ぬ程嫌がっていた筈なのに、何時の間にか激烈な苦悶の中から激痛を超えた快感を呼び覚ます能力を目覚めさせられ、今は一枚の薄い硝子の壁に寸止めされて液が腸の奥底まで嚥下されることが出来ない状態に女達の大腸が、まるで腹を空かした胃袋が喉元で止まったまま降りてこない食べ物を求めて蠢く様にもどかしく悶えるのであった。

剛沢の求めるような、暴力行使者から与えられる被虐を喜びとを感じるような、性の奴隷にだけは決して成るまいと必死に抵抗して来たのに、そんな心を裏切ってまた一つ身体が被虐の快感を求めて暴走を初めたことを意識して、そんな事が在ってはならないと熱い日本酒を注ぎ込まれながらイヤイヤと甘い悲鳴を上げ、むずかるように首を振り続けた。

酒爛器から酒を注ぎ込む銀子の方に向けて臀を高く擡げた姿勢のまま、ふと銀子の方をのぞき見た時、満たされない肉欲に煽られた様に媚肉をグッショリ潤ませて腰をもどかし気に振り続ける人間徳利とされた女達の心を見透かしたように銀子がニンマリと微笑んでいる様子が分かった。

銀子はそんな女達の潤んだ秘部をじっと観察してから、秘裂の間にジットリと滲み出した粘液を布巾でそっと拭き取った。

女達のお酌も何巡かした頃には、長い緊張感から解放された安心感からか、一機に酒の回った男達が、卑猥な言葉を口にして、女達をからかい始めていた。

「しかし、ここの姐さん達は、みんなここの毛が無いんですね？」

お竜のすっかり綺麗に剃り上げられた秘部をしげしげと眺めながら白井が聞いた。

剃毛された股間は、スベスベした地肌を晒し、その内部の幾重にも畳まれた卑猥な褌がまるで濃いピンクのバラの花の様に肉の狭間から垣間見えていた。

「ああ、以前は濃い繁みに覆われていたが、高い金を出して買って下さるお客様に、自分の全てをお見せしたいという女達の希望で、中の構造が良く見えるように剃り上げているんだ。ただ・・・毎日剃るのは面倒だし、肌にも良くないから、永久脱毛ってやつをやってみようかと思っているんだ・・・」

剛沢が銀子の酌を受けながら上機嫌で答えた。

剛沢の答えに感心したように、剃り跡の青い毛根を残す、お竜のまるで童女のような艶々した秘部を繁々と凝視するのであった。

その僅か上では、湧き出る雲と二匹の竜をあしらった卑猥な刺青を施された後門が、突き立てられた徳利によりこれ以上無いほど押し広げられていた。

「それに皆ケツメドの周りに面白い刺青を入れているんですね？」

ずっと疑問に思っていたことを、酔った勢いで質問した。

「ああ・・・此奴ら借金を踏み倒してずらかろうとしたから、懲らしめの為に入れてやったんだ。それに懲りたのかそれ以来、逃げ出す素振りも無くなって、大人しく客に抱かれるようになったぜ。」

赤く酔った顔で嬉しそうに笑いながら説明する剛沢に残忍な物を感じたが、それよりもお竜の晒す卑猥な刺青に興味を奪われじっと注視するのであった。

自分の恥ずかしい部分を白井の息がかかる程近くから見詰められ、思わず羞恥に身を揉んだため、傾いた徳利から酒が畳の上にこぼれ落ちた。

「今日はお前達を大亜門戸会に迎え入れた歓迎会だから、後で、好みの女を好きなだけ抱かせてやるぜ。」

剛沢がニコニコと皆を見回しながら言ったので、目高組を見限り大亜門戸会に鞍替えした居並ぶ親分衆からワッと歓声が上がった。酒が回って緊張もすっかり解けた男達は、女達の扇情的な姿に魅せられ、股間のモノが痛いほど緊張していた所だったのだ。

すっかり酔いが回って、男達の酒のペースも速くなり、お猪口では物足りないのコップ酒に切り替わり、女達のお酌のペースも速くなっていた。

爛をする銀子の隣にも何本もの空の一升瓶が並んでいた。

酩酊した男達は、次第に剛沢に対する緊張感や遠慮が無くなって行き、酌をする女達の尻を撫でたり、秘部をさすり、女芯に指を突き入れたりして、女達に悲鳴を上げさせた。

剛沢から受け取ったペンライトを手に硝子製のお猪口を埋め込んだ内部の様子を照らして観察し、その様子を下劣な言葉で評価して、大きな笑い声を上げる男に尻を向けたまま何も出来ず羞恥の涙に咽んだ。

「おい！もう酒は無いのか！？」と、暁美の後門に埋め込まれた徳利の先を摘んで無理やり

下に押し下げた。

体外への露出部分は少なくとも、腸内にはその何倍もの長さで埋め込まれているため、梃子のように何倍にも増幅された動きが直腸を襲い、激痛に悲鳴を上げた。

晴江の後ろに埋め込まれた徳利の先を摘んで、面白そうに前後に揺さぶる男も居た。

晴江達もお客から尻穴に色々の性具を突き立てられたり、それなりに肛門性感も開発されていたが、いま腸内に埋め込まれている徳利の直径は、過去の性具で経験した事が無い程太い物であったので、ただ肛門を押し広げ直腸内に埋め込まれているだけでも、その大きさを思い知らされている状態であった。

その巨大なものを、男の手でピストン運動させられて、性感を超えた苦痛に身をのたうたせた。

別の男は、お竜の肛門から突き出した徳利の先を口に含み、お竜の尻を抱えると、直接徳利の中の酒を自分の口内に流し込み始めた。

その様子を見た男達から、「お前は、女の尻の穴にキスする趣味があったのか？」と笑い声が上がった。

黒川と灰田と白井が晴江用の売春部屋の露天風呂に浸かりながら、湯船に浮かべた盆の上に載せられた酒を旨そうに酌み交わしていた。

今は恐れていた剛沢の目も無く、三人ともゆったりとした気分になりながら旨い酒に舌鼓を打っていた。

そんな彼らの目の前には、十字架状の白木の磔柱が立てられ、その磔柱には、全裸の晴江が麻縄で縛りつけられていた。

日本風の白木の十字架は男柱であり、横柱に縛りつけられた両脚は、股の付け根から扇のように大きく広げられていた。

そして、湯船に漬かる男達に正面を向けて、隠しようも無く大きく開いた股間の中心の女の秘め場所には、深々と槍が貫いていた。

それはステンレス製の太くて長い棒であり、着色されていない金属地肌を晒し鈍く光っていた。

もちろん、その太いステンレス棒の先端は鋭い刃先ではなく、男性のソレの形状を模した太い淫微な性具が取り付けられていた。

ステンレスの棒のもう一方の端は槍を上下に駆動させる機械装置に接続されており、低いモ

一ター音を響かせながらゆっくりと上下にピストン運動を繰り返し、晴江の股間の柔肉を左右に押し広げては、その中心部をズブズブと奥深く刺し貫き、太い雁先が陰唇の柔らかな襞を絡め取り体外に引きずり出すように入出力していた。

その男根槍の穂先が深々と秘孔を抉る度に磔柱に固縛された晴江の身体はブルブルと震え、眉根をグッと寄せて、唇を噛み締めて、胎内奥深くから込み上げる強烈な快美感を伴った苦痛と汚辱感に耐えていた。

二の腕から大腿まで隈無く刺青を施した晴江の首筋から胸の谷間を通り、下腹にかけて、唯一雪の様に白い地肌を見せるその最下点に当たる、すっかり剃毛されて童女のような亀裂を磔柱の上でこれ見よがしに大きく広げさせられ、明々とした陽光と磔柱の足下に設けられたスポットライトにより炙る様に照らし上げられ、男達の淫靡な視線を遮る物は一切無く、明らかに露出した女芯の中心部を抉るように、太い槍の穂先が周囲の柔らかな襞をゆっくりと捲り上げるように押し広げ、その男のシンボルに似せて形作られた穂先を根元まで深々と膣内に没入し、そして次には、ピンク色した内部の柔らかい襞を引きずり出すように、再びその太くて長い逸物の醜怪な姿を見せる様子が、湯船に漬かって下面から見上げる男達の目に在り在りと映った。

磔柱の根本には、このタンポ槍を上下にピストン運動させる機械装置が固定されており、その装置にセットされた長い槍の先端が、先ほどから晴江の女の命が籠もる部分を容赦なく責め続けているのであった。

その機械装置からはコードが長く延びて末端には操作用のリモコンが取り付けられており、湯船の傍に置かれていた。

「良くできているな。このツマミで早くも遅くも、深くも浅くも、右に振じったり左に振じったり操作出来るんだな・・・」と、感心しながら、時折、黒川達が湯船から交互にリモコンに手を伸ばし、ツマミを操作しては晴江の反応を楽しんでいた。

男達が嬉しそうに口にするように、何時しか晴江は本能に煽り立てられた様にリモコン操作により奥深くまで突き立てられるとヒィヒィと悲鳴を上げ、ユックリとした浅いピストン運動ではさも物足り無いかの様に腰を淫靡にくねらせスネた様に鼻を鳴らし、激しいピストン運動では甘い悲鳴を上げる様になっていた。

これまでに長時間、槍の穂先で女芯を責め続けられており、敏感な器官を刺激し続けられ、磔柱の上で身を揉みながら啜り泣きを漏らす晴江の性感は、後戻り出来ない程に掻き揚げていた。

命の無い機械装置から胎内に突き立てられているとは云え、逞しい男のピストン運動を正確に模した動きに、晴江の華洞からは止めどもなく熱い樹液が湧き出し、休み無く出入りする巨大な張り型をヌラヌラと濡らしていた。

「立派な貝柱を押っ立てながら、美味しそうに咥え込んだ物をベチョベチョに濡らしまくりやがって、そんなに気持ち良いのかい？」

「ヘッ！まるで赤貝の潮吹きだぜ！」

「これが元の高組の大姐とは想像も出来ないぜ！どうした？恥ずかしいと思わないのか？」

心地良い酒の酔いも手伝って尊大な気分となった男達は、以前は畏敬の念をもって傳っていた女に遠慮なく卑猥な言葉を浴びせ掛けていた。

男達が淫靡な笑みを浮かべながら擲擧する通り、まるでポンプから吐出される井戸水のように、太くて長い穂先が晴江の体内に深々と没入する度に晴江の膣内に溜まった豊富な愛液が巨大な塊に押し退けられ、ビュッと陰門より噴き出し、穂先が表に姿を現す度に内部に溜まった愛液が、鰓の張った張り型により掻き出され、張り型を支えるステンレス棒を伝ってダラダラと滴り落ちていた。

「さっきまでは、裏切り者だとか、侠客の風上にも置けない奴らだとか、散々毒突いていやがったくせに、今は良い声で泣いていやがるじゃないか？」

機械仕掛けの陰具に責め立てられ身も世もない風情で身悶える晴江の扇情的な姿を淫靡な目で見詰めながら陰険な笑みを浮かべ、機械装置をリモコン操作しながら、男達が張り型の動きを調整する度に一々敏感に反応し、それに煽られるように身悶える元の女親分の姿に目を細めて冷酷な言葉を浴びせ続けた。

「まあ・・・ゆっくりと楽しむが^い良いやさ・・・これでお前の身体を柔らかく仕上げておいて、お前が機械相手に一回逝った後、俺達三人で腰が抜けるまで可愛がってやるぜ・・・」

―自分達では、力を合わせても到底敵わない圧倒的な暴力行使者である剛沢の前では諦めて無抵抗でいた晴江であったが、いよいよ、この自分達を冷たく見捨てて恥知らずにもオメオメと剛沢の傘下に加わった元配下の裏切り者の親分達に身を任せることになるのかと思うと、悔しさと憤怒の気持ちが蘇り、必死の抵抗を試みたのであった。

客に姿を見せる際に型通りに着用する瀟洒な着物姿で、部屋で待ち受ける黒川達の前に現れ

たので、先程までの鮮烈な全裸姿を晒していた晴江の心にも人間らしい羞恥が蘇ったのか、肉欲に走り、血走った目付きで自分の方を見つめる黒川達を鋭い憤怒の目で睨み付けた。

一方裏切り者の親分達は、晴江が部屋に入ってくるのを待ちかねていたのか、既に全員裸となっており、股間の物を隠そうともせず、逆に晴江に見せ付ける様に大股を開いてその醜怪な物を晒すのであった。

これまで影も踏めなかった美貌の親分の恋女房を好きなだけ抱く事が出来るという、込み上げる淫欲に黒川達の陰茎は、ジャングルの様な濃密な繁みを押し開けて、隆々と醜怪な肉塊を前に向けて突き出していた。

先程まで信じられない様な淫らに乱れた姿を晒していた女が、今は、そのような素振りは微塵も見せず、昔の目高組の大姐時代の冷徹な美しさと気位を取り戻し、成熟した女の色香をその内部から漂わす様な濃い着物を優雅に着こなすーという打って変わった姿に、新たな興奮を巻き上げられた男達は、堪らず、飢えた獣が柔らかな肉を求める様に、上がり框に立ち尽くす晴江の身体に一斉に武者ぶり付いた。

獣欲に燃えて襲い掛かって来た黒川達に、裏切り者！とか、目高組に対する恩義を忘れたのか！？とか、憤怒に任せて毒突き、毛深い太い腕を払い除けた。

目高組の大姐として荒くれ男達の上に君臨していた頃の晴江なら、この様な格下の親分達など苦もなく叩きのめした所で在ったろうが、大亜門戸会のお抱え娼婦として幾度も男達の暴力の前に屈して、野卑な男達の劣情に身を曝して来た今の晴江には、心では必死の抵抗を試みようとしても、何故か女体は既に敗北を認めた様に熱い悔し涙が溢れ出るだけで、力が沸き上がって来ず、易々と下らない男達に絡め取られていくのであった。

女達の意識には、逃亡に失敗して激烈な折檻を受けた時の記憶が拭い難い恐怖として深層心理に残っており、劣情に狂った男の手を本能的に振り払う事は出来ても、男達を殴り倒して危機から脱する様には、恐怖心が歯止めとなって体が動かなかった。

そんな女の哀れでか細い抵抗が、逆に裏切り者の親分たちの獣欲の火に油を注ぐのか、益々残忍な思いに突き動かされた男達は、両手で晴江の着衣を握り締め、帯を弛め、着物の前をはだけさせた。

緩んだ帯を手にした男が思いきり帯を引っ張ったので、晴江の細い身体はクルクルと独楽の様に回り、悲鳴を上げて畳の上に倒れ落ちた。

獣欲に狂い歓声を上げた男達が一斉に仰向けに倒れ込んだ晴江に襲い掛かり、無理矢理着物を奪い去って行った。

再び白い肌が男達の飢えた目にさらけ出され、奪い取った未だ晴江の身体の温もりを留める着物に焚きしめられていた香料の匂いが男達の鼻腔を刺激し、興奮剤に煽られた様に獣欲を一層刺激した。

裏切り者の親分たちは、晴江が超武闘派の暴力団の大姐であり、武術の心得もある事を知っていたので、最初は手強い反撃を受けるのでは無いかと、おっかなびつくり晴江に襲い掛かった訳であったが、心配した反撃も無く、ただ泣き叫ぶだけの弱い女に成り下がった事を知ると、嵩に掛かって元の親筋の女親分にいたぶりを加えるのであった。

緋色の腰巻き一つにした晴江の身体を両側から抱え込む様に、男達は露天風呂の方に連れ出した。

男達は後ろから羽交い締めにし、両側から暴れて抵抗する手脚を抱き抱えて、陽光の差す露天風呂まで運び込んだ。

悔しさに泣き叫び身悶える晴江の最後の抵抗が、暴力行使者には最上のスパイスの様に感じられるのか、晴江と肌を密着させる男達の鼻息が荒くなった。

そんな最後の足掻きの様に泣き叫んで手脚をバタバタとさせて暴れる晴江を、黒川達は、半裸の熟女と格闘するのを楽しむ様に、三人掛かりで押さえ付けて磔柱に固定してしまったのだった。

両手首を磔柱に縛り付けられ、張りのある乳房を交差する様に、胸の前を荒縄で十字に縛り付けられて張り柱に固定されていく間も、激しく顔を左右に振り立て、裏切り者とか、恥を知れ、とか涙を流しながら叫び続けるのであった。

そんな元大姐の必死の叫びも、今や敵方に寝返った下っ端の親分達には、心地良い音色の様に聞こえるのか、淫靡な笑を口の端に浮かべて、暴れる晴江の身体を磔り柱に固定して行った。

両手と上半身を磔柱に縛り終え、ホッと一安心した様に額に浮かんだ汗を拭った黒川達は、男達に向かって喚き立てる哀れな女に毒突く様に、

「何時まで、目高組の大姐の積もりでいやがるんでー！」

と、涙を流して嫌がる晴江の頬を何度も平手打ちした。

「今となっては目高組も解散して、お前達は剛沢親分から借金し、その借金の片を返すために、みっともない娼婦に成り下がったんだろー！売春婦なら売春婦らしくその汚らしいオ

を堂々と見せやがれ！」

と、喚く様に声を上げると、最後まで晴江の下半身を覆っていた緋色の腰巻きの紐に手を掛け、解き始めた。

「お願い、これ以上恥を搔かさないで・・・」

両目に涙を溜めたまま、腰巻きを脱がそうとする男に哀願する様に気弱に目を瞬かせた。
超武闘派の組を仕切っていた烈女もただのか弱い女に生まれ変わったのかと目眩くような快感に浸り、「へへ・・・俺たちは大姐にもっともっと恥を搔かせたいのさ！」

と一声上げると、エイッと、赤い布を一機に奪い取った。

再び憎い男達の目の前に、最も恥ずかしい部分を晒してしまい、ヒッと悲鳴を上げて身体を硬直させた。

「へへ・・・また年甲斐もなくツルツルの■■■■コを晒しやがったぜ！」

男達は痴毛を綺麗に剃り上げられ熟れた亀裂を陽光の下に晒す股間を指差して笑い声を上げた。

「もっと中まで晒しやがれ！」と、固く閉じた晴江の足首を掴んだ。

嵩に掛かった男達に両脚を左右に押し広げられながら、秘裂を男達の目の前に晒さなければならぬ羞恥に、「嫌！見ないで！」と、思わず叫び声を上げた。

「さつきまで散々みっともないビラビラを見せ付けておきながら、何を今更、小娘みたいに恥ずかしがっていやがるんでー！堂々と大股開いて、さっさとその小汚い■■■■コを見せやがれ！」

晴江の虚しい抵抗は、男達の劣情を誘う手管の様にも見えた。

銀子によって娼婦の身体に鍛え上げられた身体は、本人も意識していない間に娼婦として男を誘う技倆を発揮しているのかも知れなかった。

晴江の甘美な涕泣に魅せられて、無力な兎を目の前にして舌なめずりするライオンの様に、獣欲を搔き立てられた男達は、残酷な気持ちを立ち昇らせ、力一杯晴江の両脚を押し広げ、扇の様に開かせた。

「へへ・・・元大姐のご開帳と御座い！」

これ以上拡がらない程、両脚を押し広げた後、男達は磔柱の横木に晴江の様足首を固定していった。

「へへ・・・元目高組の大姐にふさわしい立派な割れ口じゃないか！」

大腿を大きく押し開く様に磔柱の横木に固定し終え、一区切り付いた男達は改めてジロジロと開け放たれた股間を注視するのであった。

「二人も子供を産んでいる40婆のオ●●●とは思えない程綺麗な色艶じゃないか？

まるで二十歳の娘みたいだぜ！」

「肝心の部分がツルツルに剃り上げられて、二十歳の娘じゃなくて、まるで子供のオ●●●みたいだぜ！」

「ハハッ！違げーねーや！」

「それにしても見てみろよ！この馬鹿^{デカ}大きいオサネをよー！流石は元目高組の大姐の貫禄じゃないか！」

気兼ねない仲間内だけになり、元の親分の妻の股間を余裕を持って眺め回す事が出来る様になって、じっくりと女の秘め処の様子を眺めながら、その部分の様に驚いた様に声を上げた。

「まるで男の子みたいに大きなクリをしやがってよー！これがでかい女は感度が鈍いと言うが、確かめてやるよ！」

と、灰田が開け拡げられた股間に指をねじ込んで来たので、晴江が悲鳴を上げて腰を振った。

「ヘッ！生娘見たいに恥ずかしがってやがるが、中はどうでい？・・・おや！？、もうビショビショじゃないか！早く入れて欲しいと待ちかねてやがるぜ！」

銀子によって改造された何時でも前技無しでも男のモノを受け入れる事が出来る身体に改造された晴江の内部は常に暖かな愛液で満たされていた。

「ヘッ！ちょっと触っただけで中からお汁が溢れ出てくるぜ！」

「お前もちょっと前までは、目高組の大姐で御座いと、偉そうに澄ました顔をしていやがったくせに・・・全く好きな女だぜ！」

「目高組の大姐でいるより男相手の娼婦の方がお似合いだぜ！今の身分に成れて本当は嬉しくて承がないんじゃないか？」

「こんなに滴らせやがってよ！そんなにしたいんかよ！？」

男達の揶揄に磔柱に大の字で固定された全身を赤く染め、イヤイヤをする様に顔を左右に振った。

元の格下の男達から淫靡な揶揄を受ける度に、何故か下腹はジンと痺れた様に疼き淫液がジュッと流れ出すのを心の隅で感じていた。

「先ずこれで楽しんで貰おうか？」

と、先端に男性器を模した太い穂先を付けた槍を取り出し、涙を浮かべる晴江に見せ付けた。

こうして、晴江の裸身を縛り付けた磔柱を立てられ、大きく開いた股間を槍で貫く様に男の

モノを模した陰具を挿入されてしまったのであった。

女侠客の意気地も完全に喪失してしまい、淫靡な上下動を繰り返す責め具の前に完全に降伏して、元の配下の親分の前に無力な女の姿をさらけ出し、女体の深奥から甘露な蜜を絶え間なく溢れさせ続ける晴江の姿に男達は目を瞠った。

女肉を押し広げ、卑猥な襞を引きずり、ゆっくり出入りする槍の穂先は、晴江の豊かな愛液に艶々と濡れ光り、槍の柄を伝わって下に筋を引いて流れ落ちていた。

もし、その股間から滴り落ちる艶々と濡れ光る透明の液体が赤い血であったとしたら、その様は、まるで、戦国時代の落城した城の奥方が敵側に捕らえられ、敵方の武将の見守る前で、全裸で磔に掛けられ局部に槍を何度も突き刺されて、大量の血を流しながら刑死する凄惨な姿を連想させた。

「ああー、お願いします・・・もう逝かせて下さい・・・」

機械的にゆっくりと上下するだけの穂先のピストン運動は、晴江の性感を押し止めようもなく掻き揚げていたが、そのゆっくりとした単調な機械的な動きは、男の荒々しい腰の動きの様に、一機に快感の高みまで誘う事は出来ず、そのもどかしい何時までも続く肉体の責めに堪えられず、憎い男達の前に羞しい姿を晒してでも、絶頂を迎えることにより、この辛い責め苦に終止符を打って欲しいと裏切り者の男達に哀願する晴江であった。

かつての恩を忘れ去り、すっかり敵方に回り、食欲に晴江を責め立てる黒川達が、「そんなに、逝かせて欲しいか？」と、淫猥な笑みをたたえて聞いた。

「ああー！お願いします！・・・もう我慢出来ません・・・」

「お前が磔柱の上で大往生を遂げたら、俺たちはお前の身体を頂く事になっているんだぜ！それでも良いんだな！？」

この裏切り者の親分達に貞節を奪われるのは堪え難い屈辱であるが、込み上げる激しい性感に煽り立てられ二進も三進も行かなくなった晴江は激しく首を縦に振った。

叶えられない性感に啜り上げ、舌足らずの甘い声音を発生し、上気した顔を振りながら、以前は睥睨していた傘下の男達に涙を浮かべて哀願し続けるのだった。

以前は影も踏めないような主筋の女であり、平身低頭して、目も合わせられない程、身を低くして仕えていた女を此处まで貶めた事に、心の中で快哉を叫びながら、

「そうかい？それなら、先ず俺たち下部の組の者をこれまでぞんざいに扱って来た事を詫びて貰おうか。」

と、機械仕掛けの性具に串刺しにされ、性感の頂上まで押し上げられ激しく身悶えを繰り返す、懊悩の極みにある晴江にこれまでの詫びを入れろと凄むのであった。

肉欲の疼きに進退窮まった晴江は、泣き叫ぶように、

「これまで、黒川様、灰田様、白井様並びに、それぞれの組の皆様には、・・・失礼な振る舞いをした事を心よりお詫び申し上げます・・・」

そこまでやっとの思いで口にすると、アア・・・と甘い呻き声を上げて身をくねらせた。「アア・・・そのせめてもの罪滅ぼしに、この後、晴江の磨き抜かれた・・・3つの穴・・・全てを使って、・・・アン！・・・黒川様、灰田様、白井様にご奉仕させていただきますので・・・どうかお許し下さヒィ！・・・」

屈辱の涙を流しながら、一方では切羽詰まった性感に意識が飛びながらのような晴江の哀願に、三人の男達は、淫猥な目で互いに見交わすと、もう良いだろうとリモコンのツマミに手を伸ばした。

モーター音がこれまでの低い音から甲高い響きに変わり、たちまち人間の男では出来ないような高速のピストン運動を開始した。

その高速の激しい動きに、磔柱の上で晴江が、引きつった舌足らずの悲鳴を上げて、汗に塗れた顔を激しく左右に振り、体を蝦のように仰け反らせて身悶えた。

その激しい上下運動に呼応するように横木に固定されて大きく開いた太股がブルブルと震えた。

何度も短い悲鳴のような嬌声を上げ続け、ビクビクと小刻みに体を痙攣させ、晴江が磔柱に縛られたまま絶頂を迎えるのは、後僅かと感じられた。

「逝く時にこの赤いボタンを押すと面白い余興が見られると言っていたな・・・」

灰田がリモコンボックスに設けられた大きな赤い押しボタンに指を伸ばした。

絶頂を間近に控え、いまにも意識が飛びそうになる晴江の僅かに残された薄れそうになる意識の中で、灰田達が赤いボタンの話をしているのが耳に入った。

その赤いボタンを押した時に自分の肉体に降りかかる恐ろしい効果を何度もその身に味わわれて来た晴江は、喉の奥から擦れた悲鳴のような声を上げて、

「イヤーッ！お願いします！そのボタンを押さないで！」

と、縄で嚴重に磔柱に縛り付けられた負柔な身を振り、涙を浮かべて残忍な男達に哀願するのであった。

「押すなどと言われると余計押したくなるもんだぜ・・・なあ？」

灰田が気味の悪い笑みを浮かべて、黒川や白井の方を見た。

湯船に首まで漬かった、二人の男も面白そうに卑猥な笑みを浮かべて肯いた。

「まあ、このボタンを押すのはお前さんが気をやった瞬間だ。・・まあノビノビと気をやりねえ・・」と、リモコンを操作してタンポポの早さを益々加速しながら、恐怖に身悶える晴江に向かって声を掛けるのであった。

股間をこじ開けるように激しく摩擦するパイプからはキンキンと脳天に弾ける様な鋭く熱い快感が与え続けられ、股間から込み上げるガンガンする激しい痛感にも似た痛切な刺激が込み上げていた。

そして、その激烈な刺激は交差する神経の中で互いに混じり合い、脳髄を通過する間に、まるで逞しい男のモノで激しく突き立てられているような感覚を送り続けていた。

今や、それが懊悩の極みにある晴江の意識を占領しつつあった。

パイプを先端に仕込んだ槍は確実に晴江を頂点に誘いつつあったのだった。

しかし、僅かに残された意識の中で、絶頂を極めた時がそのボタンを押される瞬間だと理解していたので、少しでも絶頂に押し上げられる事をくい止めようと必死の抵抗を続ける晴江であった。

「イヤッ！・・怖いわ！ アア！・・イキたくない！・・」

泣き叫ぶように全身を激しく悶えさせる晴江の姿を見て、男達は、

「ホーッ、この間まで奈和親分と共に数々の修羅場をかいぐり、白刃の下に身を曝していた大姐にも怖い物が在ったのかい？」

「以前は男勝りの姐さんだと思っていたが随分と女らしい声を上げるようになったじゃないか？」

「まあ、そんなに怖がらずにノビノビと気をやったらどうでえ？」

と、好き勝手な事を口々にほざき合った。

以前はヤクザの女親分として、常に恐怖感と威圧感を周囲に振りまき、女性らしい素振りを見せた事も無い女が、今や最下層の娼婦にまで身を墜とし、客の前に女の本性を垣間見せ、弱々しく怯えた声や仕草を見せることに、この元主筋の女を此处まで追い込んだという状況に痺れる様な快感が込み上げ、互いに顔を見交わして大声で笑い合うのであった。

「さっきまで盛んに鼻を鳴らしながらにイキたいイキたいって何度も叫んでいたじゃないか？折角俺たちが親切に逝かせてやろうと言ってるじゃないか。そんなに意地を張らずそろ

そろイッたらどうでえ？」

笑いながら呟くと、槍の動きを最強に早めた。

既に限界を超えた甘美な刺激を与えられ続け、自分の肉体の堪え得る限度を遙かに超えてしまっていることを思い知らされた晴江は、半ば白目を剥いて虚空を見詰め、全てを諦めたように、「アア・・・もうイク・・・」と、一声呟くように言った。

「そうかい？ だけとお前さんがイッた瞬間にこのボタンが押されるのだぜ！」と、灰田達が互いに顔を見合わせながら笑い合った。

「アア・・・イヤ・・・お願い、助けて・・・」

ネットリと擦れた声で哀願したその瞬間、長時間の性の拷問に耐えかねていた肉体が、遂に崩壊の時を迎え、股間から鋭い衝撃のように絶頂の快感が脳髄を駆け上がった。

「へへ、とうとう逝きやがったぜ！」

散々自分を責め立てたモノに熱い奔流をビュッと浴びせ掛け、身体を蝦の様に反らせて硬直させた。

頂点を極めた余韻でビクビクと全身の痙攣が続き、凄まじい絶頂の快感が晴江の全身を襲った事を確認した灰田は、機を逃さず、リモコンに取り付けられたボタンを思い切り押し込んだ。

その赤いボタンを押した途端、磔柱上の晴江が、ギエーッ！と怪鳥の鳴き声のような断末魔の悲鳴を上げると弾かれたように体を激しく硬直させた。

槍の穂先から、微弱ではあるが高電圧の電流が流れ、膣孔を通して子宮内に流れ込み、体内を駆け巡ったのであった。

「晴江姐さんも、見事、三尺高い磔柱の上で往生を遂げやがったぜ！」

晴江が壮絶な絶頂場面を迎えるのを目にして、三人は感極まったような声を上げて、その凄まじい往生の瞬間を息を呑むように見詰めていたが、次には、かつて自分達が仕えていた大姐御の惨めな敗残の姿を大声で揶揄し合った。

壮絶な絶頂を極めた余韻か、激烈な電撃の余韻か、磔柱の上で白目を剥き口を半開きにしたまま死んだように意識を失ってしまった晴江の股間だけが、今だ小刻みにピクピクと痙攣を続けていた。

そしてグツタリと弛緩した股間から、突然一筋の放水が始まった事を目にして、湯船の中の男達は腹を抱えて笑い合った。

ビチャビチャと地面を激しく叩いた放水が終わっても、晴江は電撃のショックで完全に意識

を失い、がっくりと首を右肩に向けて垂れ、白目を剥いて虚空を見詰め、口から泡を垂らしたままであった。

凄まじい電撃の衝撃で槍の穂先を深々と咥え込んだ下腹はまだビクビクと痙攣を続けていた。

その様は、まるで戦国時代に敗残の奥方が敵の将兵の前に引き据えられ、磔刑に処されて太い槍で秘裂を突き抜かれ、僅かに残された命が消え去るまでの痙攣する肉体の断末摩の足掻きを連想させた。

やがて、全身の筋肉が弛緩し磔柱の上でダラリと垂れ下がっても、晴江の秘部を機械仕掛けの槍の穂先が変わること無く突き上げ続けていた。

その槍の穂先をつたわるように、緊張を失って晴江の股間からいまだ漏れ続けている黄色い液が滴り落ちていた。

その姿は磔刑により処刑された哀れな女が命を失った後も股間から血を滴らせる様と似ていた。

暁美の売春部屋では、激しいリズムに合わせて暁美がポールに絡んで卑猥なダンスを披露していた。

その様を4人の親分衆が歓声を上げながら観覧していた。

音楽が終わり、荒い息を吐きながら休む暁美に、一人の親分が近寄ると、

「いやー！良いダンスだった！感激したぜ。」

とニヤニヤ笑いながら言うと、

「今度はこれを嵌めてもう一度踊ってくれ。」と、大小二本のバイブを差し出した。

そのようなバイブを前後に挿入したまま、股を180度開いたり、激しい屈伸をしたら、二つのバイブは自分の生身にどのような影響を与えるだろうかと想像すると、暁美は男達の卑猥な要求に思わず身震いして小さく悲鳴を上げた。

男達は、暁美の悲鳴にも拘わらず、4人掛かりで抵抗する体を押さえ付けると、無理やり前後の穴にバイブを押し込んでしまった。

そしてダンスの途中でバイブが抜け落ちないように、細い銀色の鎖でバイブを固定し、そのまま禪を掛けるように暁美の下半身に固定した。

バイブの根本には、鎖を通す穴が開けられていたので、この鎖の禪を外す以外にバイブが体

外に飛び出す心配は無かった。

暁美の前後の穴からは二本の角の様にバイブが飛び出し、下腹から尻にかけて、その二つの頂点を結ぶように細い鎖が掛けられていた。

更に男達は、クリップの取り付けられたピンクローターを暁美の乳首に噛ませた。

強いバネの力でクリップの爪が乳首に食い込み暁美の悲鳴が上がった。

しかし程なくすると、ローターの振動が、短い鎖を通して暁美の乳首に伝わり、乳首が固く凝って来るのが男達の目に映った。

二本のバイブのスイッチを入れられ、4箇所から全身を襲う快美感を伴った振動に、暁美はまともに立っている事も出来なくなった。

そして、思わず腰を下ろそうとすると、前後二箇所に埋め込まれたバイブが鎖に引かれて深く体内に突き刺さり、その体内にめり込んでくる器具の意地悪な効果に、思わず悲鳴を上げた。

暁美の体に卑猥な性具を取り付け終わった男達が、へっぴり腰で身悶える暁美の豊かな尻を、平手でピシャッと叩いてダンスを始める様促した。

再び、部屋にはアップテンポの音楽が流れ出した。

男達の凶暴な獣欲の前に降参したように、性感に打ち震える体を鼓舞して、ポールに取り付いた。

ポールを掴んで、片脚を頭より高く上げた時、二本のバイブが股間深く食い込み、暁美に悲鳴を上げさせた。

男達は、暁美の間近まで近寄ると、バイブによりいっぱい押し広げられ、固く食い込む秘所の様子を食い入るように見詰めた。

劣情の炎を瞳の奥深くに燃え上がらせているような、熱くて粘ついた嫌らしい視線を意識すると、押さえようとしても激しい羞恥心が込み上がり、身悶える暁美であったが、一方では何故か、女芯からは熱い物が溢れ出るような全身が痺れるような感触を感じた。

まるで二匹の生き物のように前後の穴の中で蠢くバイブを喰い絞める秘孔からは、何時の間にか粘っこい愛液が滲み出し、その周辺がヌルヌルと光っていた。

音楽に合わせて、激しく体を動かす暁美を二本のバイブと乳首に付けたローターは容赦なく襲っていた。

股間を180度捻じ、床に尻を落とした時、床から突き上げるバイブの衝撃に悲鳴を上げた。

特に暁美が股を大きく捻じた時、男達は好色な眼差しで、バイブを喰い絞める秘所を血走っ

た目で食い入る様に見詰めた。

そんな、男達の熱い視線が、体内から襲うバイブの振動と共に、暁美に不思議な陶酔感を呼び起こしていた。

暁美の全身が興奮で赤く染まり、激しいダンスのリズムに合わせて腰を振る度に、豊かな愛液が周囲に舞い散ることに男達が気付いた。

最早、羞恥心とか人間らしい意識を失い、ただ陶酔したようにリズムに合わせて体を踊らせる暁美が居た。

ポールに太股を絡め、空中に大きく体を仰け反らせた時、遂に頂点に達したのか、ドスンと床の上に落下して、そのまま意識を飛ばしてしまった。

男達は、ポールの下でハアハアと荒い息を吐きながら、絶頂の余韻に体を痙攣させる暁美を見下ろしながら、好色な薄ら笑いを浮かべて、

「もう、準備は万端の様だから、そろそろお嬢の体をいただくか・・・」と、舌なめずりをしながらズボンを降ろすのであった。

剥き出しになった男達のモノが隆々と天を向いていた。

白い目をむいて完全に意識を失ったような暁美の下肢に男達が手を掛け、左右から足首を掴み太股を抱えて、股を横一文字に大きく押し広げた。

「お嬢の身体は柔らかくて良いや・・・こんなに開くぜ！ほら大事な部分が丸出しだぜ！」

両足首を掴んで左右に押し広げながら男達が嬉しそうに声を上げた。

完全に180度に捻じられた股間の中心に充血した花卉がパツクリと開いていた。

二本のバイブを固定していた鎖を解くと、体内からの圧力に押されるように女陰内に埋め込まれていたバイブがその毒々しい姿を現し、ズルズルと体外に押し出されて来て、ポロッと股間からバイブが溢れ落ちた。

その後にはネットリとした愛液を滴らせる、充血して生々しい色を浮かべた肉の洞窟がポツカリと開いていた。

「それじゃ、早速味あわせて貰おうか・・・」

薄笑いを浮かべたまま、男がいきり立つ自分の股間の物をピクピクとか弱く痙攣を繰り返す肉穴に押し当てた。

お竜の売春部屋では、賭場の様に造られた部屋の盆莫蓆の上で、花電車の技を披露していた。

その卑猥な妙技を目高組から鞍替えした5人の親分衆が、酒を酌み交わしながら、卑猥な笑みを浮かべて食い入るように見詰めていた。

幾つかの花電車の持ちネタを披露し、賽子を使って自由に出目を操る芸を披露し終わった後、男達が感嘆したように溜息を吐くと、お竜の艶技に拍手を送った。

拍手しながらも、お竜の艶技で色欲を高ぶらせた男達の目は、食い入るようにお竜の股間を見詰めていた。

「いやー！素晴らしい艶技だった！」

一人の男が満面に笑みを浮かべて手を叩いた。そしてその次に、目に残酷な光を浮かべてお竜に提案した。

「どうだ？いまお竜姐さんの使った賽子を使って俺たちと十番賽子勝負をしないか？」

俺たちが言った目を見事出せれば、お竜姐さんの勝ちで俺たち全員から1万円ずつご祝儀を上げよう。・・・ただし、出せなかった場合は、お竜姐さんの負けで罰ゲームだ！」

お竜は、男達の陰湿な目付きに、何か恐ろしい物を感じたが、客の要求を断る事は許されていなかったもので、首を縦に振るしかなかった。

「それじゃ、勝負を面白くするため、後ろの穴にこれを入れて貰おうか・・・」

男がニヤニヤ笑って、手に長いコードの付いた表面が金属色に輝くローターを持つと、盆菫蓆の上に正座するお竜に近づいた。

そのローターは、お竜も始めて目にする物で、根本からは家庭の電源コードに使うような細くて長いビニールコードが延びていた。

男達はこの売春部屋に入る前に、銀子から新しく作ったばかりの特製ローターだけど、面白いから使ってみろと手渡されたものであった。

男達は、お竜の尻を上げさせると、無理やりお竜の菊門にローターをねじ込んだ。

お竜の体も銀子の調教によって前の穴も後ろの穴も何時でも前技無しで受け入れられるように開発されていたので、そのローターは普通のピンクローターよりは二回りも大きな物ではあるとはいえ、抵抗無くズブズブと埋め込まれて行っただが、乱暴な男達の仕草に小さく悲鳴を上げた。

連日巨大な性具に責め苛まれている女達にとっては、比較的小さな性具と言える物でであったので、お竜の腰の動きを制約する程の物では無かった。

お竜の体内に完全に姿を没しローターから延びた白いビニールコードだけが、卑猥な刺青を施された中心部から体外に出ていた。

男は長いコードをほぐしながら、端に取り付けられたプラグを壁の電源コンセントに差し込んだ。

その長いコードの途中にはコントロールボックスが付いており、お竜の目の前にどっかりと腰を下ろした男が、ニヤニヤしながらそのコントロールボックスを握った。

お竜はその様子を見て、今直腸内に埋め込まれたローターは、家庭用の電源を使う強力なモーターを内蔵しており、コントロールボックスは、そのパイプレーションの強弱を制御する物だと感じた。

そして、膣内に賽子を入れたまま、後ろから薄い肉壁を通して、強烈な振動を浴びた時、膣壁が傷付けられるのではないかと不安になった。

「それじゃ、始めて貰おうか。」

男が、残忍な目の色でお竜を促した。

お竜は、盆莫菴の前に右足を上げて立て膝になると、賭場で賽子を壺に入れる時のように右手の人差し指と中指と薬指の間に賽子を挟み、客の目の前に示し、その二個の賽子を客の方に向けてうっすら開いた仄暗い秘孔の中に差し入れた。

「入ります・・・」

お竜が長年慣れた女同師としての落ち着いた声を発した。

「それじゃ、最初は丁だ！」

男の指示に従い、肉洞の周囲を取り巻く微妙な筋肉を使い、肉洞内部の繊細な襞で賽子の表面を撫でて、二つの賽子を操ろうとした。

微細な賽子表面の状態を読み取るには、大変な神経の集中を必要としたが、薄い肉の壁一枚を隔てた直腸の内部からは、妖しげな異物感が伝わって来て、精神集中しようとするお竜の神経を乱した。

これではいけないと、固く目を閉じ、改めて目に見えない秘孔内奥の賽子の動きに神経に集中しようとした。

その時、コントローラーを握る男の指が小さく動き、手元でカチッという音を立てた。

その瞬間、ブルブルとした低周波振動が、直腸内を揺るがせ、不思議な快美感を伴った刺激が脳髄を駆け上った。

「アアーッ！イヤ！」

以前は、ただの苦痛としてしか感じられなかった直腸からの刺激であるが、度重なる肛門性

交により、性感が開発され始めており、この腸内に収められたバイブからの刺激も息も止まるばかりの性的感覚としてお竜の熟れた女体を襲った。

アア・・・アア・・・と舌足らずの悲鳴を上げて、片膝を立てたまま上半身を身悶えさせ苦悶を続けるお竜は、無意識に両手で自らの乳房を揉み上げていた。

「おい！何時まで良い気持ちで壺を振っているんだ！いい加減に壺を置け！」

突然、加えられた性的刺激に溺れそうになったお竜であったが、男達から怒鳴りつけられて、まだ体は上気し、意識はボンヤリと混濁したままであったが、ハッとしたように秘所を盆莫莖の上に押し付け、膣孔から2個の精子を産み落とした。

「勝負！」

肉体的刺激に煽られ声を上げられないお竜に代わって男達が声を上げた。

お竜が体を除けた盆莫莖の上には、ネットリとした濃厚なお竜の愛液に塗された、二個の精子が残されていた。

「へへ・・・グンニの半じゃないか・・・」

男達が盆莫莖の上に身を乗り出して、粘っこい愛液に濡れ輝る精子を確かめながら、嬉しそうに呟いた。

元より尻穴にバイブを挿入された状態で、神経を集中して精子を操ることも事も出来ず、快美感に押し流されるように、無我夢中に出してしまった賽の目であった。

横座りに体を崩して、いまだ後門から突き上げる刺激にハアハア息を継ぎながら、お竜が男達の様子を怯えたように見詰めた。

「この勝負、お前の負けだな・・・それじゃ約束通り罰ゲームだ！」

男が嬉しそうに笑うと、手元のコントローラーのボタンを押した。

その瞬間お竜の直腸から体内に激しい電流が駆け巡った。

その体内を駆け巡る耐え難い刺激に、お竜は仰向けに倒れ込み、悲痛な悲鳴を上げながら体をブルブル痙攣させた。

男が指でボタンを押し続けている間中、電流がバイブの表面を通してお竜の直腸内に流れ出る仕組みになっているらしい。

「へへ・・・銀子の奴が電気浣腸と言っていたが、大した効き目だぜ・・・」

男はお竜の身悶える様子を、散々堪能した後、ボタンを押していた指を離した。

腸内を荒れ狂った電流は今は止まっていたが、電撃のショックで身体を起こせないお竜が無意識に尻穴に詰め込まれた物を取ろうとするのを男達はお竜の手を掴んで妨害し、

「何をやっているんだ？壺振りのお竜姐さんー今では花電のお竜姐さんと賽の勝負をしようってんだ！これぐらいのハンディは付けて貰わないとな！」

と、笑い声を上げて傍にあった麻縄の束を手にした。

お竜が腸内に入れた物を取り出せない様に、ガッチリと両手を拘束し、

「手は使えなくても、器用なお竜姐さんのオ●●●●だ！盆莫莖の上に置いた賽を腰を落として掬い取るぐらい朝飯前だろう？」

電撃のショックで意識が白くなっているお竜に、男達は次の勝負を急かせた。

男達の要求する様に盆莫莖の上に二つ置かれた賽の上に両腕を後ろ手に縛り上げられたお竜が腰を降ろして吸い上げようとした。

男達に向かって開いた剥き出しの秘裂が淫猥に蠢き、男達の粘っこい視線がそれに集中した。盆莫莖の上に押し付けていた秘部をスッと上に持ち上げた時、盆莫莖の上に置かれていた二つの賽子は綺麗に消えていた。

お竜は額に汗を浮かべ荒い息を吐きながら体内に吸い上げた賽子を操ろうと神経を集中した。

しかし、そんなお竜の努力を嘲笑う様に、男達はお竜の尻穴から延びたコードに取り付けられたリモコンを操作し、お竜が腹の中で賽の目を操るのを妨害した。

そして、お竜が負ける度に、罰ゲームとしてお竜の体内に注ぎ込む電圧は上げられ、お竜の苦悶も激しくなっていた。

たまに、お竜が勝つ事があったが、それは最早、お竜が賽の目を操った結果ではなく、たまに賽の目が男達の指定するように揃っただけであった。

「へへ・・・ここまでお竜姐さんの2勝5敗だぜ。この十番勝負、あと続けて3勝しないとお竜姐さんの負けが決定だぜ・・・」

男達が冷酷な笑みを浮かべて、ぐったりと放心したように体を崩して盆莫莖の上に座るお竜に勝ち誇ったような声を掛けた。

お竜は度重なる電撃を受けて、全身に水を浴びせられたような冷たい汗をかき、意識も既に遠くなり、氣息延々の状態であった。

「へへ・・・それじゃ次の勝負に行こうぜ！」

勝負に負ければ又あの恐ろしい激痛に悶え苦しまなければならない・・・しかし自分の身体には最早賽を操る力など残されていない・・・しかも負ける度に強くなる電圧・・・直腸から直接体内に襲い掛かる電撃の苦しみと恐怖に、お竜は涙を流して拒絶の表情を示した。

男達から受ける拷問の辛さに今や大声で泣き叫ぶお竜であったが、男達はかつて賭場で名を売った男勝りの鉄火女が哀れに泣き叫ぶ姿に益々残忍なものを呼び覚まされるのか、泣きじゃくるお竜の頬を何度も平手打ちにし、勝負を迫るのであった。

「へへ・・・もう賽を吸い込む力も残っていないのかい？・・・しょうがねえな・・・それじゃ俺が入れてやるぜ」

と、二個の賽子を握ると、剥き出しになったお竜の秘裂を押し開き、賽子を押し込むのであった。

「何でえ・・・中はヌルヌルじゃねえか・・・そんなに楽しかったのかい？」

と、賽子を仕舞い終えて、お竜の樹液で濡れた手を柔らかな太股で拭いてから、ピシヤリと豊満な尻を平手で叩いた。

男達に急かされ、全身が痺れたように自由に体を動かせないお竜が、痺れる腰を上げ、物憂げな動きで、体内の賽子を操った。

最早賽の目を操る能力を喪失したと気付いた男達は、後門のバイブを作動させることなく、いやらしい目でお竜のピクピクと痙攣する下腹を見詰め続けた。

「それじゃ、半だ！」

調子付いた男達が威勢の良い声を上げた。

最早、完全に賽の目を操る能力を喪失しているお竜が、恐る恐る、賽子を隠していた股間を盆莫莖の上から上げた。

秘部の下から現れたドロリとした粘っこい粘液に塗れた賽子を見て、男達が大笑いして歓声を上げた。

「ピンズロの丁だぜ、・・・残念だったな、この勝負オメーの負けだな・・・」

口の端に冷酷な笑みを込めて言うと、男は手元のコントローラーをカチカチと動かして電圧を最強にセットした。

男の醸し出す不気味な雰囲気蒼白な顔色を浮かべ、力なく怯えた目で男を見詰めながらブルブルと体を震わせて、イヤ・・・イヤ・・・と引き攣ったような乾いた悲鳴を上げた。

周囲の男もこれから始まる残酷なショーを期待するかのよう、恐怖に蒼白となったお竜を冷たい目で見詰めた。

突然、男がコントローラーのボタンを押した。

弾かれた様にお竜の体が跳ね退き、体内を駆け巡る激しい電流に、下腹部をブルブルと痙攣させ、短い悲鳴を上げながら、真っ白い盆莫菰の上で身をのたうたせ藻掻き苦しんだ。

下腹が激しく痙攣し、腹圧で押しつぶされた膀胱から突然強い圧力で尿が迸った。

下腹から込み上げる激痛に体を折って身悶える苦悶の痙攣を続けるお竜の股間からシャワーの様に激しく吹き出した小水が、白い盆莫菰の上に見る見る黄色い池を作って行った。

「こんなに水気を出してしまったら、これから俺達が抱く時に干からびているんじゃないだろうな？」

「心配するねえ・・・壺振りを卒業して今や娼婦としても名の通ったお竜姐さんだ！全身の穴という穴を総動員して俺達を有頂天にしてくれるぜ！」

ビシャビシャと小便が盆莫菰を打つ音と、男達の冷酷な笑い声だけが、お竜の売春部屋の中に響いていた。

肉の大運動会

黒川達が剛沢から何も咎め立てられる事も無く、逆に、寛大に大亜門戸会に迎えられたとの情報は、瞬く間に、腹を決めかねていた元目高組系列の親分の間に広まり、黄原の予想通り、我も我もと雪崩の様に剛沢の下に押し寄せ、杯を受けて行った。

そして、その都度、晴江達三人は元目高組の下部組織であった暴力団の組長や舎弟企業の社長の饗応に駆り出されたのであった。

剛沢も後から杯を受けに来た組ほど、傘下への加入に当たって苛烈な条件を突き付けて来たが、今となっては、自分の組と自分の命を守るためには、その条件を飲まざるを得ないと、唇を噛みしめて、次々と剛沢から杯を受け取った。

元々どこかの大きな組織の傘の下に入っていなければ存続すら危ういような弱小の暴力団ばかりであったので、目高組の傘下に在った時は、惨めなほど頭を低くして奈和組長に仕えていた男達であった。

何時しか、晴江達もそんな男達に対して尊大な態度で接していたのだった。

しかし、今や立場は完全に逆転して、かつて睥睨していた男達から、その肉体を貪られ蹂躪

され屈辱の涙を流すのであった。

屈辱的な条件を飲み下して大亜門戸会に鞍替えした親分連中は、この尊大に振舞っていた女達に昔年の恨みを晴らそうとし、そして、お前達がだらしなく大亜門戸会に敗北するから、自分達が目高組時代より過酷な上納金や貢献を求められるようになったのだと、やり場の無い憤懣を女達の体にぶつけるように、淫靡に残酷に接したのであった。

こうして全ての目高組系列の組織が、混乱の内に大亜門戸会への鞍替えを終えた後、剛沢が黄原をつかまえて奇妙な指示を与えた。

それは、折角、元目高組の系列組織が大亜門戸会の下で一つになったのだから、記念に何かの行事をやれと言う事だった。

そこで、黄原が企画したのが、新しく加わった組の対抗戦による運動会だった。

「運動会とは、小学生みたいな事を考えやがる。」と、始め剛沢は笑っていたが、黄原の企画を聞いてその気になり始めていた。

広い大亜門戸会の本部の敷地の中には、組事務所と、剛沢の私邸と、組員の起居する宿舍の三棟がコの字型に配置されていた。

そのコの字の中央部分は芝生を植えた、広い庭になっており、以前にお竜がダイナマイトを秘部に突き込まれて死の恐怖を味わわれた場所でもあった。

普段は、なだらかな起伏を持つ芝面にゴルフのホールを掘り、剛沢達がパターの練習に使っている程度の芝生の庭であるが、今日はその芝面に三本の旗竿が立てられ、そこから15メートル程離れた場所に石灰で白線が引かれていた。

秋も深まり、空には雲一つ無く、抜けるような青空が広がっていた。

新たに大亜門戸会に加わった元目高組系列の42の中小の組織からは、それぞれ数名の代表者を送っており、参加した100人以上の男達が、運動会の準備が整った前庭に集められていた。

日頃の着慣れた黒スーツ姿ではなく、着慣れぬジャージや運動着姿の厳つい顔をした男達が、互いに相手の珍妙な姿を指差して笑い合い、「小学生じゃ有るまいし、この年になって運動会も無いだろうー」と、ガヤガヤと好き勝手な事を口にしていた。

芝生の周囲には大亜門戸会の三下達が、様々な模擬店を開き、烏賊を焼いたり、ヤキソバを作ったりして良い匂いが辺りに漂っていた。

そして、これから始まるヤクザの男達の大運動会を収めようと、三脚に設置された何台ものビデオカメラやスチールカメラが並べられていた。

剛沢が小学校の校長のように男達の前に置かれた台の上に登った。

自分達のボスの更にその上のボスの登場に、流石の荒くれ共も一瞬静かになって演台上の剛沢を見詰めた。

「今日は、皆遠い所をご苦労だったな。今回晴れて大亜門戸会に加わった皆の歓迎と相互の親睦を兼ねて大運動会を企画した。幸い本日は雲一つ無い晴天で、絶好の運動会日和だ。皆童心に返った積もりで、楽しんでいって貰いたい。本日の競技のルールと進行に関しては黄原から説明させる。」

と、言うと言台から降りて行った。

剛沢の手前、口には出さなかったが、只の運動会と思っている男達は、気怠そうな顔を見せていた。

剛沢と入れ替わるように黄原が演台に立った。

「今回新たに大亜門戸会の傘下に入った42の組と団体を3つグループに分けた。それぞれのグループのリーダーは黒川、灰田、白井にやって貰う。」

仲間内の親分連中を説得して、他者より先に剛沢の杯を受け、大亜門戸会に鞍替えする手筈を作り上げた功績により、他の組の親分達より優位な位置を占めることに成功した三人の男達が、得意げな顔で前に進み出た。

「自分の組がどのグループになったかは、手元に配ったメンバー表を見るように。」

そして、元目高組の晴江と暁美とお竜は、それぞれのグループに入り一緒に競技に参加して貰う。」

その時、群衆から驚きの声が上がった。

銀子に引き立てられて、晴江達が黄原の立つ演壇の前に姿を現したのだった。

居並ぶカメラの放列が一斉に女達の方を向いた。

3人の女は、一糸纏わず全裸の体に首輪だけを付けられていた。

その首輪には長い鎖が付けられており、それぞれの鎖の端が隣会う女の首輪に繋がっており、その一番端を銀子が握り、一列となって引き出されて来たのであった。

その姿は、奴隷市場に引き立てられる、女奴隷の一団のような感じを与えた。

女達は明るい陽光の中で、大勢の男の前に裸身を晒すのを恥じるように、全身を赤く染め、

前屈みに身を竦ませ、両手で胸と剃毛された童女のような股間を必死に隠していた。

黄原の立つ台の下に横一列に三人の女が整列させられた。

元の下部組織の男達の中から少しでも恥ずかしい部分を隠そうと、身を屈め、股間と両胸を必死に隠していた両手を、女達に寄り添う様に付いて来た剛沢の愛人達が邪険に振り払い、胸を張ってしゃきんと立つように命じた。

命令に逆らう事は出来ず、下等な男達に裸身を晒す羞恥に全身を赤く染め、身体をブルブルと震わせながらも、唇を噛みしめ、手をピタリと身体の横に付けて胸を張り気を付けの姿勢を取った。

剃毛されて被う物の無い股間が居並ぶ男達の前に晒された。

男達の正面には、一文字に切れ込んだ柔らかな肉の狭間が隠しようも無くマザマザと開陳されていた。

成熟した女の無毛の股間とその奥の女っぽい肉の谷間に男達から驚きのどよめきが上がり、生唾を呑み込む音が其処此处で聞こえた。

末端組織の下っ端組員のほとんどは、晴江達大姐のことは、自分達の親分と並んで写った写真で見ると、話に聞いた事が在るだけで、実際に会って目にする機会があった人間は限られていた。

組に飾られた写真で歳に思えぬ美しい人だと感じていた、また話でも大層な美人だと聞いていた自分達の親分を統括していた上部組織の大姐が、一糸身に纏わず、自分達の目の前に引き立てられて来たのを見て、訳も分からず鼓動が早くなった。

自分達の見詰める視線の先に立つ、明るい陽光の下に白い肌を晒す三人の美女を、声もなく見詰める内に股間が熱くなって来るのを感じた。

そして、目の前で裸身を晒す元目高組の女達が自分達と共に競技を行うと聞いて、女に目の無い男達の目付きが変わった。

「先ほど、各リーダーにクジを引いて貰って、黒川のグループには暁美が、灰田のグループには晴江が、白井のグループにはお竜が付く事が決まった。式次第の通り、グループ対抗で競技を行って貰う。」

黄原がホワイトボードに掲示された、競技種目のスケジュールを示しながら説明した。

「各種目一位が3ポイント、二位が1ポイント、三位が0ポイントで最終的に一番多くポイントを獲得したグループが優勝だ。

優勝グループには剛沢会長から100万円の賞金が出ることになっている！」

100万円と聞いて、男達が俄然やる気になって、オーッと歓声が上がった。

「グループの賞金以外にも、各競技で一番活躍した選手には、それぞれ賞を用意しているから是非頑張ってくれ。」

二位と三位のグループには残念ながら、賞金は出ないが、その代わり最下位のグループの女には責任を取って、代表として罰ゲームをやって貰うから、それも楽しみにして貰いたい。」
三人の女の誰か一人が最下位の責任を取らされて、罰ゲームを受けると聞いて、残虐性を持った男達が興味深げに演壇の前に恥ずかしそうに全裸で立たされている晴江達三人の顔を注視した。

最初の競技種目は、三人四脚と名付けた競技であった。

男二人が女を間に挟んで相互の脚を縛って走り、白線を引いたスタートラインから出発して、15メートル先のなだらかな坂の上に在るポールを回ってスタートラインに帰ってくる競技であった。

各グループ5組で争い、男達は毎回交代するが女の交代は無く、競技中出ずっぱりであった。そしてこの競技の特徴は、女は目隠ししているためコースを見る事は出来ず、女を挟む両側の男がリードしなければならない事と、それから何よりも、女は女芯にパイプを挿入されて走る事であった。

パイプはベルトなどで固定されていないので、競技中女はずっと股間に力を入れて喰い絞めていなければならない。

もし、競技中にパイプが股間から落下したり、男が手でパイプを支えたら、スタートラインに戻って、再スタートするというルールとなっていた。

この戦いの様子をビデオに収めて、裏世界で販売する目的で撮影するように剛沢から命じられていた撮影班が、一斉にこれから開始される世紀のいや性器の一戦を収めようと一斉にカメラを構えた。

男達は、自分の脚首と女の脚首をベルトで固定した後、まるで負傷者を運ぶ時のように両側から女の肩に腕を回して支えた。

今回の運動会では競技者は男も全裸での競技となっていたので、男の肌に吸い付くように柔らかい女の肌が密着していた。

日頃良い女と接した事も無い田舎ヤクザにとって、かつては雲の上の存在だった、美しい目

高組の女と裸のまま全身を密着出来た事に感激して、股間に変化が現れだした男もいて、それを目敏く見付けた周囲の男から盛んに揶揄されていた。

全体にイボイボが飛び出した野太いバイブが男に手渡された。

こんな太い物が入るのかと、いぶかりながらも女の股間に押し当てると、良く調教された牝芯は大きく開いて柔らかくそれを呑み込み始めた。

女達は目隠しをされているため、今自分の柔肉を押し開いて肉洞に挿入されようとしているバイブがどのようなモノか分からないため、感覚だけが鋭くなって、男が力を込めて押し込む度に、ウッと呻いて腰をブルブルと悶えさせた。

奥までしっかりと埋め込んだ後、両側の男達は空いた方の手で女の両乳房を握りしめて、「曲がる時には曲がる方のオッパイを引っ張るからな！」と、目が見えない女に指示を送った。

全ての準備が整い、ピストルの音を合図に全員が一斉にスタート切った。

最初は慣れない三人四脚に3人のペースが合わず、そのまま壁が倒れるように揃って地面に倒れ込む場面が続出して、応援する組員から笑い声が上がった。

ようやく競技にも慣れて来て、転ぶ事は無くなり、三組がほぼ横一線になり、なだらかな坂を駆け上り、折り返し点の旗を目指した。

女達は目隠しされて、目が見えないため、視覚以外の感覚が逆に鋭くなっており、股間を突き上げるバイブの振動が通常より鋭敏に伝わっていた。

そして、両側で肌を密着させる男達が、左右から手に握り締めた乳房を面白がって揉み立てるため、バイブの振動にマッチして性感を押し上げていた。

旗を回って下り坂をゴールに向かう時点で、晴江の組がリードしていた。

少し、遅れてお竜の組が、更に遅れて暁美の組が続いた。

所が、ゴールを目前にして、ゴールインを焦った男達がペースを上げて大股で走ったため、小柄な晴江の股間は大きく開き、走行の振動で晴江の女芯からバイブがポトリと落ちてしまった。

「ほら！バイブが落ちたら、スタートラインからやり直しだ！」

思わず対抗グループから声が上がった。

渋々、ルール通りスタートラインに戻り再スタートするしか無かった。

他の組は第二走者にバトンタッチを終えているが、晴江の組は再スタートとなったため大きく出遅れてしまった。

その後も転倒したり、パイプを落としてしまう等、様々な失敗は在ったが、これらの失敗から学習して、大きな失敗も無く、レースも進むようになり、現在暁美のグループが他を大きくリードして最終走者へのバトンタッチも間近になった。

しかし、続けて4回往復を続ける間に、股間を突き立てるパイプの刺激で暁美の性感は押し止める事が出来ない程高まってしまっていた。

何とかゴールには辿り着いたが、ゴールラインに倒れ込んだ暁美の全身は興奮状態で赤く染まりハアハアと荒い息を吐いて、意識も朦朧とした状態であった。

「こんなに、興奮して体がグニャグニャでは走れないな・・・」アンカーの2名が横倒しになった暁美を見下ろしながら溜息を吐いた。

「よし、仕方無い。一度イカせてすっきりとさせてやれ！」と、決心した様に言った。スタートラインに集まったグループの男達が、それを合図に一斉に暁美の熱く火照った肌に手を伸ばした。

アンカーの男が股間に突き立てられたままのパイプを握り、緩やかに抽送した。もう一人が荒い息を吐く暁美の口を襲い、逞しく隆起した自分の肉茎を押し入れた。

周囲の男達は暁美の両乳房を揉み上げ、柔肌を撫で回し暁美の性感を掻き立てた。

男達に責め立てられることにより、それまで股間に収めて走るだけでは得られなかった快感が、急激に込み上げて来て暁美を頂上に向けて追いつけて行った。

そうこうしている間にお竜と晴江の組はアンカーがスタートしていた。

暁美が一度絶頂を極めて落ち着いた後、濡れたパイプと股間を拭き取り、再度挿入してスタートを切ったが、他チームを逆転する事は出来なかった。

結局第一レースは、1着お竜、2着晴江、最下位暁美となった。

晴江もお竜もゴールに到達した途端、絶頂に達しそのまま倒れ込んでしまった。

グループの男達が、ゴールインした女を取り囲んで労をねぎらうように、パイプを操作し、柔肌を揉み上げ、女達を絶頂まで押し上げた。

「第一レースの結果、白井グループが3ポイント、灰田グループが1ポイント、黒川グループは0ポイントだ！」

黄原が結果を読み上げた。

白井グループからワーッとと言う歓声が上がった。

今回は運動会には参加出来ず、模擬店を開いたり、遠巻きに観戦している大亜門戸会の男達も博打事には目の無い男達ばかりであるから、当然仲間内で馬券を作って買っており、勝利

した男達から歓声が上がった。

「第二レースは同じ5組のレースで、今度はケツの穴にパイプを突っ込んで走って貰う。」

黄原が少し小振りのイボ付きパイプをポンポンと手で叩きながら言った。

まだ、絶頂の放心状態から醒めやらぬ女達がボンヤリと聞いていた。

再び、第一レースと同じように三人四脚のレースが始められた。

ただし、今回は後門にパイプを突き立てられていた。

前傾して走ると、後ろに向かって尻尾のように、珍妙な筒具が飛び出す形となり、その滑稽な姿に見物の男達から応援の歓声と共に笑い声と卑猥な野次が飛び交った。

第二レースでも、パイプに快感を押し上げられ走行不能になり、度々コース上に立ち止まるアクシデントがあり、順位は目まぐるしく変わったが、暁美のグループが概ねレースをリードして一着となった。

「これまでの合計で、白井グループが4ポイント、黒川グループが3ポイント、灰田グループが1ポイントだ！」

黄原が結果を読み上げた。

リードする白井グループと追いつけて来た黒川グループから歓声が上がった。

「第三グループは3組のレースで、前と後ろにパイプだ！」

既に前にも後ろにもパイプを突き立てられ10往復した女達は、これまでのレース途中で何度も気をやり、氣息延々として最早まともに走れる状態では無いことは誰の目にも明らかだった。

それでも、逸る男達はレースの決着を付けようと、無理やり何度も絶頂を味合わされて腰がキリキリと痛み、これ以上走れないと泣き叫ぶ女達の頬を平手で叩き力尽くで引き起こすと、女達の哀願にも拘わらず強引に前後の穴にパイプを挿入するのだった。

何とか全員がスタートラインに並んだところでピストルが打ち鳴らされレースがスタートした。

既に何度も責め立てられ神経が敏感になっていた所に、前後から同時に過敏な箇所を襲う強烈な快感に堪えられず、女達は度々立ち止まって動けなくなってしまった。

もう走れないと涙する女を無理に歩かそうとして、前のパイプか後ろのパイプがポロリと抜け落ち、再スタートとなる場面が頻発した。

前後から責め上げる強い刺激に、途中何度も悲鳴のような声を上げて、狂乱して泣き叫ぶ女

達を男達が両側から無理やり急ぎ立てレースを続けようとしたが、女達は最早寸時も立って
いられなくなり、途中でしゃがみ込む場面も続発した。

無理に急ぎ立て、股間からパイプを落とし、再スタートとなるよりは益しと、仕方無くコース
の途中で女の体調が戻るまで休みを取りながらのレースとなった。

たった15メートル程の距離を三往復するために、結局1時間近い時間を消化した。

仲間を応援する男達の声援を受け、死ぬような思いでアンカーがゴールインした時、女達は
口から泡を噴いて完全に意識を失っていた。

「これまでの結果、白井グループが5ポイント、灰田グループが4ポイント、黒川グループ
が3ポイントだ。」

黄原が合計得点を読み上げると、得点差が伯仲したことに、男達から歓声が上がった。

「次の種目は駅弁レースだ。各グループ体力と精力に自信がある男を、選手に選んでくれ。」
黄原が、次の種目の説明をした。要するに駅弁体位と呼ばれる立位で女を担ぎ上げ、スター
トして旗を回って帰って来て、バトンの代わりに女を次の選手にリレーするという競技であ
った。

これなら、男が女のアソコに男根を付き入れて走るだけだから、パイプのように落とす心配
も無く楽だろうと、選手として名乗りを上げた男達が腕をさすりながら準備に入った。

マットを敷いた低い台に女を下半身突き出す形で仰向けに寝かせると、股間をこじ開けて、
興奮で隆起したモノをしつとりと潤んだままの肉洞に付き入れた。

逞しい男の太い物が、女達の柔肉を割って奥まで入り込んで来た。

そしてしっかりと奥まで差し込むと、女の背に手を回して、腰を起点として女の体を上に持
ち上げた。

自分の全体重が牝芯に掛かり、逞しい男のモノが深く肉洞にメリ込む衝撃に女達がウッと呻
いた。

「こいつは重いや！」三人の中ではお竜が一番肉付きも良く体重もあったため、お竜を駅弁
体位で持ち上げた男が、腰をよろめかせて喚いた。

また、スタイルも良く並の男より長身の暁美を抱き上げた男は、自身の身長の高さも手伝い
ふらついて危うく転びそうになった。

「へへ、こいつは軽いぜ！」小柄な晴江は体重も一番軽く、このレースでは優利のように思

えた。

三人の男が女の股間を突き刺したまま女を前に抱える珍妙な姿勢でスタートラインに着いた。

ピストルの合図で男達が一斉に掛けだした。

緩やかな坂道を駆け上り駆け下る走行の衝撃で、女の体が上下に飛び跳ねた。

弾みを付けてズンズンと下から突き上げるその動きは、通常の性行為のピストン運動より激しいモノがあった。

既に散々バイブにより責め上げられていた所は、神経が敏感になっており、この体重を載せた激しい上下運動で、再び強い快感の高みへと押し上げられて行った。

レースは予想通り体重の軽い、晴江のグループがリードしていた。

しかし、そのスピードゆえに男の肉棒を支えとして激しく上下運動を繰り返していた晴江の肉洞が、男に堪えられない摩擦感を与え続け、逆に担ぎ上げる男の方が先にピークに達してしまった。

日頃安い水商売の女しか相手にしていなかった男は、晴江の極上の肉洞に刺激され性感は、押し止めようも無く絶頂に達していた。

「馬鹿野郎！何立ち止まっていやがるんだ！さっさと走れ！」

他の組を大きくリードしながら突如コース上に立ち止まった男に、仲間から怒声が浴びせられた。

しかし、昂進した性欲に我を忘れてしまった男は、コース上に立ち止まったまま、晴江の背を強く抱きしめ、汗に濡れた乳房に自分の汗まみれの胸を押し付けたまま、腰をビクッビクッと痙攣させた。

その様は誰の目にも男が晴江の胎内に精を吐出していることは明らかだった。

男が立ち止まって晴江の体に放出している間に他の組が追い抜いて行った。

漸くゴールに達して、次の男にタッチするため、晴江を台の上に横たえた時、台の上で閉じることすら忘れたように開き切った、女陰の肉孔からは白い液が滴り落ちていた。

「この野郎ー！こんなにオコをヌルヌルにしやがって！」と次の走者が、前の走者の精液で濡れた晴江の華洞に肉塊を突き立て、大急ぎでスタートした。

既に第三走者にバトンタッチされる頃には、激しい上下運送に煽られ、女達の意識は朦朧としていた。

お竜は、霞む意識の中で本能的に自分の熱く濡れた華洞に突き立てられ激しく上下する肉塊

を調教で教えられた技で締め付けてしまった。

男の方も上下運動による摩擦の呼び起こす快感を必死に堪えていた所に、お竜の鍛えられた技を受けて、我慢の限界に達してしまった。

お竜達が相手する客の様に、性経験豊富では無い男にとって、女達の絞め技は、強力であり、たちまち快感の極限を迎えたしまった。

「コラー！何立ち止まっているんだ！？」

快感のあまり立ち止まってしまってピクピク腰を蠢かす男に、応援席から野次が飛んだ。

そんな野次にも拘わらず、男は夢中になって、お竜の体内に熱いモノを放出し続けた。

暁美の組も長身の暁美を腰に乗せて坂道を上下する際にバランスを何度も崩しそうになった。

その都度転落の恐怖で思わず膣孔を堅く締め上げるものだから、男の方も強い緊縮感に堪えられず、途中で度々暁美の膣内に放出するのであった。

最終走者にバトンタッチされる頃には、既に女達は何度も男達に胎内に放出されていた。ゴールに駆け込んでくる駅弁体位で抱えられた女の開き切った股間からは、勢い良く駆け続ける男の肉棒の上下動により膣内から掻き出されるようにドクドクと白い粘液が吐き出されていた。女の股間から漏れ出したネバネバした液は、走る男の脚を伝わって下に流れ続けた。他のチームをリードして暁美を前に抱え上げたアンカーがスタートした。

所が暫く走ってポールを回る時に、突然体の前に抱えていた暁美の体がズルッと落下した。これで自分がトップでゴールすれば、得点で自分の組がトップだと意識して。緊張感で突然股間が萎えてしまったのだ。

「糞！立て！経つんだよ！」

氣息延々とした暁美を芝生に横たえたまま、男は硬度を失ってしまった自分のモノを振り立てながら必死になって叫んだ。

その滑稽な様子に敵方の組の男が笑いさざめき野次り上げた。

周囲から笑われて、必死になった男が焦れば焦る程、肉茎の硬度は失われ、小さく萎縮していった。

その間にも後続の組が近づきつつあった。

男は朦朧として蹲る暁美の髪を鷲掴みにすると、暁美の顔を自分のだらっと垂れたままの肉塊に押し当てた。

暁美はボンヤリした目で目の前に突き出された力なく垂れ下がる肉塊を見詰めていたが、調

教の結果としての条件反射の様に無意識に口を大きく開いて、男のモノを口に含んで行った。
そして、無意識の内に鍛えられた舌技を発揮し出して男のモノをしごき始めていた。
男のモノを口に含んでいる間に、意識が戻り始めて来た。そして、肉塊に絡みついた何人も
の生臭い男の精液の味覚が口内に広がっていった。

対面位での駅弁レースが終了して、次のレースが始まるまで少し間があった。
意識朦朧としていた女達も、この短い休憩時間の間に正常な意識を取り戻しつつあった。
これまでの過酷なレースにより、激しく前後の肉洞を摩擦された女達は、熱を持ったような
疼痛感と膣内に残された男達の精液に気持ちの悪さを感じていた。

「次のレースは女のケツに突っ込んでの駅弁レースだ！」

黄原が嫌らしい笑みを浮かべて宣言した。

次のレースでは女を背後から抱き抱え、まるで幼児に小便をさせる時のような姿勢となった。

「イヤー！止めて！」その余りに惨めな姿に女達が顔を赤くして激しく首を振り立てた。

両足首を男に掴まれて大きく股間を上げられたため、正面からは綺麗に剃り上げられた女の
花園が隠しようも無く左右に開き、その後方に在る菊の花弁に似た秘穴には、怒張した男の
モノが深々と突き立てられている様子が在り在りと見られた。

これまで何度となく男達の目に羞恥の姿を晒して来た女達であったが、明るい陽の光の下で
隠す物も無く深々と抉られる姿を、ギラギラした獣の様な目で食い入るように見詰める野卑
な男達に晒すことに何時にない羞恥感じるのであった。

女を抱き上げる男達も調子に乗って、女の背後から貫いたまま、自分の下腹の上に載せるよ
うな姿勢を取り、両腕で女の大腿を支えると、両手の指を伸ばして大きく開股された股間の
最も奥深くに在る柔らかな肉に花弁を押し開いた。

明るい陽の光の中でピンク色した内部構造があからさまにさらけ出され、女達は身を揉んで
泣き叫んだが、女を担ぎ上げた男達は得意そうに女を田楽刺しに持ち上げたまま左右に体を
振って周囲の男達に見せびらかした。

居並ぶ撮影者達もカメラをズームアップしてその結合部を余すことなく収めた。

剛沢も黄原も久しぶりに見せる女達の恥じらいに身悶える姿に新鮮なものを感じた。

普段男達から抱かれる部屋の隠微な明かりでは無く、明るい健康的な陽光の中で大勢の男達
の前で恥ずかしい姿を晒すことになり、忘れていた羞恥が蘇ったのかと思った。

しかし、スタートラインに並んだ男達は、そんな女達の羞恥の身悶えにも躊躇することなく、

背後からきつい肉穴に深々とおのれの逞しいモノを食い込ませて、スタートの合図を待っていた。

「へへ・・・俺も女のケツの穴にチンを突っ込んだのは初めてだが、凄いい締め付けようじゃないか。これは病み付きになりそうだな・・・」

深々と突き立てた男根を搾り上げるように締め付ける、女達の強い緊縮力に男達が喜悦の声を上げた。

そうこうしている内に号砲が鳴り、男達が一斉に駆け出した。

全力で駆ける男の激しい上下振動が、背後から女達の後門を貫いた。

ドスドスというなまらで下から杭を打たれるような衝撃に女達が悲鳴を上げた。

そして、その激しい刺激は、狭い肉管に締め付けられながら上下に摩擦する男の肉塊にも、耐え難い快感を与えた。

まだ折り返しのポールの手前で、強い快感により走ることが出来なくなり、女を背後から抱え込んだまま、腰を痙攣させる男達に、「オイオイ！もう漏らしてしまったのかよ？！ちょっと早いんじゃないか？！」と。応援席から野次が飛んだ。

その後も、全力で駆けようとする、上下に揺れる女の体に快感を刺激され、射精に追い込まれ、走れなくなってしまうことが分かると、なるべく女を揺らさないよう、女を抱え上げたまま、度重なる放出で腰が抜けたような姿勢でフラフラと歩く男達に野次が飛んだ。

自分はそんなヘマはしないと、代わったランナーもやはりその鋭い快感に悲鳴を上げた。

女達はランナーが代わる度に、激しく上下に後門を突かれ、腸内に夥しい男の精を放出されていった。

容赦無く後から突き上げられる刺激は、前門にも伝わり、強烈な刺激翻弄され朦朧とする中で、本能だけが独走していた。

男達に背後から抱え上げられ、大きく開いた股間の奥で開き切った、充血した陰華から愛液が滴り落ち、男に担がれて走る間、女達は意味不明の悲鳴のような声を上げ、熱い液を左右に飛び散らす様がまざまざと目撃された。

勝負は一進一退のまま、いよいよアンカー勝負となった。

ここで先行していたお竜を抱えた男がポールを回って折り返しに入った所で、お竜を落としてしまった。

勝負の緊張感で、股間の膨張力を失い、お竜を背後から突き上げることが出来なくなってしまうのだ。

「糞！早く立て！」男は自分の一物を摘んで上下に振り立てたが、焦りで半立ちした男根は益々その膨張力を失っていった。

「糞！咥えるんだ！」男は乱暴にお竜の後ろ髪を鷲掴みにすると、白濁した液と黄褐色の液に塗された醜惡なモノをお竜の口にねじ込んだ。

幾人もの精を放出された所に突っ込まれていた肉塊であるので、何人もの男の精液の味と臭いがした。それに自らの腸内の内容物の臭気と味覚が追加されていた。

脳天を貫き通すような鋭い異臭と味覚に苛まれながら、お竜は本能のように教えられた舌技を駆使して男を奮い立たせようとした。

所が、勝負の緊張感は伝染するのか、お竜の組を追い越した、晴江を抱えていた男も少し行った所で、晴江を落としてしまった。

そして、それを追う曉美の組も。

今やゴールを目前に控え、三組の男女が精液と直腸内容物で汚れた肉塊と格闘していた。

女達は既に正常な意識を失っているかのように、憑かれたように男のモノを吸い上げた。

アンカー勝負は誰が最初に固さを取り戻すかに掛かっていた。

後背位での駅弁レースが終了し、女達は憔悴し切った様子で芝生の上に横たわっていた。

最早陽光の中で秘部を晒す羞恥も意識の中に残っていないようであった。

「第三レースは男二人に前後からサンドウィッチにされての駅弁レースだ」黄原次のレースの開始を促した。

その声をともすれば薄れようとする意識の中で聞いた女達が、「もう勘弁して下さい・・・もう堪えられません・・・」と涙を流しながら力無く、黄原に哀願するのであった。

「何言ってやがる！テメー達は、ただ男に担がれて気持ちの良い思いをただだけで、何も疲れるような事をしてい無いじゃないか！前の穴からも後の穴からも本気汁を撒き散らしやがって、本当は嬉しくて仕方無いのだろう？」と、冷たく撥ね付けるのであった。

既に午前中の幾たびものレースで酷使された前後の陰門は、爛れて熱を持ち、激痛が襲っていた。

そんな二つの穴に再び前後から太い肉塊を突き立てられ、女達の悲痛な泣き叫ぶ声にも拘わらず、最後の駅弁レースが始まろうとしていた。

「へへ・・・こいつは二人掛かりだから軽くて良いぜ！」女達を前後から貫いた男達が嬉しそうに笑い声を上げた。

女達は男二人に挟まれたまま、太股を持ち上げられ、男二人の間で宙に吊られるような形で

抱き抱えられていた。女の体重を支えているのは二本の男の陰根だけであった。

号砲が打ち鳴らされ、午前中最後のレースが開始された。

男達の言うように二人で一人の女の体重を分け合う形となったため、男達の走りは非常に軽快であった。

しかしそのため、男達が全速で走る分、女の上下への振れ幅は非常に大きくなり、その振動が男のモノを咥える肉の筒を通して男達に鋭い快感となって返って来た。

女をサンドウィッチにする男達が、ウツと堪らず声を上げた。

良く絞まる肉洞と薄い粘膜を一枚隔てただけで、擦れ合う向かいの男のモノの刺激がもろに快感となって伝わって来たのであった。

「これは、堪らないぜ！」その刺激の強さに、最早全速で走ることは出来なくなり、各組とも歩くようにスピードを落とすのであった。

しかし、そのゆっくりとした速度でも、女の快感の壺に突き立てたままの男達には、単にピストン運動の速度を遅くしたようなものであり、一旦昂じた快感の高まりは容易に下がることは無かった。

そして、女達も朝からの度重なる局部への摩擦運動により、秘所の神経も止めようも無く敏感に昂進させられていたので、男達の動きに煽られ、心で拒絶するのとは裏腹に、鍛えられた秘技を無意識の内に繰り出していた。

一番先行していたお竜が、突然カッと目を見開いて虚空を睨んだまま、意味不明の言葉を叫ぶと、前後を貫く男のモノをブルブルとリズムカルに締め付けた。

お竜の鍛え上げられた二つの秘孔からもたらされる、その余りに強い得も言われぬ快感にお竜を前後から挟んだままの男達は、脳天まで痺れ切りコースの途中で立ち尽くしたまま、前後から激しくお竜の体内に熱い樹液を放出した。

そして、そのお竜の組の絶頂が伝染したように、曉美の組にも伝わり、晴江の組にも伝わった。

コース上で三組九人の男女が、棒立ちになったまま腰をビクビクと痙攣させて、絶頂を極める壮絶な姿に、見守る聴衆からも野次を上げる声も無く、じっと見詰めたまま、ただ生唾を呑み込む音だけが響いた。

こうして、次々とランナーは交代して行っただが、皆前後から鍛えられた女の秘部を責め立てる快感に押し流され、その都度夥しい精液を女の体内に残して行っただ。

そして、その都度女達も凄まじい絶叫を上げて、絶頂を極めて行っただが、既に肉体的極限は

とうに超えている中での無理やり追い詰められた絶頂であった。

こうして、アンカーを迎える頃には、既に女達は意識を完全に失い、蒼白な顔となり、口からは泡を噴いてグッタリとしていた。

しかし、勝負に夢中になっている男達は、そんな女達に憐憫を感じることも無く、ゴールに駆け込んで来た男達から、今アンカーが意識を完全に失った女を引き継ごうとしていた。

「何だ！これは！ガバガバじゃないか！」

既に極限を超え、前も後も開き切ったまま閉じる力を失った女達の肉孔に、おのれの肉塊を突き立てながらいまいましてに叫んだ。

「ああ・・・もう許して・・・」

朦朧とする意識の中で晴江が、前後から突き上げる男達に、力無く哀願した。

「何言ってやがる！勝負はこれからじゃないか！」

接戦の勝負が続いているため、ここで一機に差を広げよう、あるいは差を詰めようと、勝負に夢中になっている男達は、そんな、女達のか細い哀願の声を意識することも無く、ゴールから駆け出して行くのであった。

既に遙か前に肉体の限界を超えてしまっている、女達は前後の肉壁を襲う疼痛感に痺れたように、アアーッ、アアーッと力無い悲鳴を上げ続けるだけであった。

「糞！このアマ！何しやがるんだ！」

晴江を前から貫く男が突然驚いたような叫び声を上げた。

下半身が完全に痺れ切り、制御の聞かなくなった股間から暖かい小水を漏らし始めたのであった。

一旦始まった放水は終わることなく、コース上に点々と水を撒いたような跡を残して行った。漏れ出た小水が大腿をつたわる気持ち悪さに、晴江を抱える男達は顔を真っ赤にして、怒鳴ったが、応援の男達からは面白そうに笑い声や野次が飛んでいた。

こうして、運動会の午前中の部が終了した。

競技終了と同時に口から泡を吐いて倒れ、完全に意識を失ってしまった女達は、担架に乗せられ和久井医師の待つ医務室に担ぎ込まれて行った。

男達は午前中の競技の快感の余韻を楽しむかのように、芝生の上に車座になり、主催者から配られた幕の内弁当や周囲の模擬店から仕入れた肴をつまみに酒を酌み交わし合っていた。

「よお！お前の企画した運動会とやらは、大成功じゃないか！みんな嬉しそうに競技に参加

してたぜ！」

好物のブランデーを口に運びながら、剛沢が上機嫌で、本部席のテントの下に置かれた机を前にした黄原に声を掛けた。

剛沢の若い二人の愛人が剛沢の腰にへばり付くように付き従って来た。

「ええ、みんな喜んでくれて企画した甲斐がありました・・・」

黄原は机の上に拡げられた、スケジュール表に午後の競技の進行予想時間を記入しながら、時間の調整に追われていた。

「この後の予定はどうなっているんだ？」

スケジュール表に向かって何やら書き込んだり、午前中の競技の記録を整理している黄原に尋ねた。

「1時間の昼食休憩の後、午後一番目の種目は綱引きとなります。そしてスプーンレースの後、玉入れとなり、これで全ての種目は終了です。

その後優勝チームの表彰と各レースでの個人賞の発表と続いて、最後は最下位チームの女の罰ゲームとなります。

午前中に思ったより時間を押してしまったので、午後は巻き気味に進めたいと思います。」

黄原がスケジュール表を指で示しながら説明した。

「ふーん、ところで、その罰ゲームとは何をやるんだ？」

「それは、後のお楽しみ・・・と、言うことにしておきましょう・・・ただ、女なら堪えられない程恥ずかしくて苦痛に充ちたお仕置きだと言っておきましょう・・・」

黄原の隣では、来賓として招待された沢田が、ホステス役の銀子と楽しそうに話をしていた。

二人の様子を時折横目で見ながら、午後の予定について剛沢に説明した。

「ところで今日の女達の花代は、どうする積もりだ？」

女達の借金を減らさないため、何かと理由を付けてピンハネして、借金の総額を常に一定に保つように生かさず殺さずに女達を絞り尽くすのが剛沢の方針であった。

「今日は、日常の業務を離れた福利厚生の一環としてのレクリエーション大会ですから、当然、女達は無給です・・・法律でも、労働者の健康の保持増進を図るため、体育活動やレクリエーション活動等について便宜を提供するよう定めていますからね・・・まあ、女達も今日は、一日中お日様の下で良い汗を流す事でしょう。」と、口元に皮肉な笑みを浮かべて説明した。

「安衛法第70条か？・・・この野郎、俺のお株を奪いやがって！」

日頃法律に関する蘊蓄を並べるのが好きな剛沢のお株を奪う様な黄原の機転の良さに、嬉しそうに肘で小突いた。

昼休みが終わり、午後の競技を心待ちにする男達が、自分達の控え場所に集合始めた。

集合を終わった男達は、まだ女達が姿を見せないのでキョロキョロと辺りを見回していた。

その時、組事務所の方から、銀子に首輪に繋がれた鎖を引かれて女達が姿を現したので、男達の歓声が上がった。

女達は、午前中のダメージがまだ残っているのか、皆顔面蒼白で、ヨロヨロとした危なっかしい腰つきで、こちらに向かって歩いて来た。

歩みが少しでも遅れると女達の背後についた剛沢の愛人達が尻を蹴り上げて、歩みを急かせるのであった。

和久井医師から気付け薬を注射され、消炎鎮痛剤を肉襞に塗り込められて、なんとかやっと午後に間に合わせたような状態であった。

「ここで皆に嬉しい知らせがある！」

台に上がった黄原が集合を完了した男達に向かって声を掛けた。

「本日ご来賓の沢田様から、寄付として30万円を頂いた。これも本日の優勝賞金に加えて貰うことにした！」

優勝チームの受け取り額が増加したことに、男達から歓声が上がった。

「更に、大亜門戸会幹部会からも70万円を拠出する事に決まった！従って優勝賞金は当初の倍の200万円だ！皆優勝を目指して頑張って貰いたい！」

賞金額が一挙に倍になったことで、男達から歓声や感激した口笛が飛んだ。

「午後一番目の種目は綱引きだ！」

黄原が集合の終わった男達に競技の説明を始めた。

競技の内容は次のようなものであった。

各チーム一人の男が選手として参加する。

男は地面に四つん這いの姿勢になって、チームの女は逆体位で両手で男の腹にしがみ付き、両脚を男の首に絡めて男の下にぶら下がる。

競技中、女は男の股間に顔を埋めて、男のモノを口の含みシャブリ続ける。

女の膣中にはバイブレータが埋め込まれ、そのバイブには綱が結び付けられており、対戦する女の股間に埋め込まれているバイブと互いに結び付けられている。

選手の男は股間にバイブを埋め込まれた女をぶら下げながら、後ずさりするようにして対戦相手と綱を引き合う。

「女は自分のアソコは見えないが、選手の男には、自分の女と対戦相手のチームの女のアソコが丸見えになる訳だから、自分の女と相手の女のアソコの様子を見比べながら、チャンスと見れば後に引き、バイブが相手に引き出されそうになったら、前に進んで緩めるなど駆け引きをするのが、この勝負に勝つコツだ！」

黄原が台の上で、長い綱が結び付けられた、ピンクローターを拡大したような紅白の二個の長円形のバイブを示しながら説明した。

これから繰り広げられるであろう淫猥なゲームを想像して、男達は、黄原の説明に耳を傾けながら、この後女達の体内に埋め込まれる事になるバイブの巨大さに目を奪われ、生唾を呑み込む音が静かに冪した。

「バイブを引きずり出されたら負け。中央に引かれた白線を男の体が超えたら負け。

男が手を使って綱を引っ張ったり、バイブを押さえたら反則負け。女が咥えている男のモノから口を離したら負け。女が男の体から落ちたら負けだ！ 三人の巴戦だから先に2連勝したチームが優勝で3点獲得。残ったチーム同士で戦って、勝った方が1点獲得。最下位は0点だ。」

抽選で最初の試合は、晴江とお竜に決まった。

男達は手渡されたバイブを繁々と見詰めながら、その巨大さを目の当たりにして驚いたような表情を浮かべた。

それは大人の拳ほどもありそうだった。

「一体全体こんな大きなモノが入るのかな？」

その大きなバイブに目を瞠りながら訝るような声が上がった。

「小さなバイブでは、思いっきり引っ張りっこしたら直ぐ抜けてしまう恐れがあるからな。

その大きさなら一旦身体の中に入ったら膣にピッタリ密着して簡単には抜けないぜ。」

準備に掛かる両チームの男達に、黄原がニヤニヤ笑いながら声を掛けた。

「兎に角女の体を開かせないとな・・・こんな大きな物すんなりとは入らないぜ！」

芝生の上に仰向けに寝かせた女の周囲をまるで砂糖に群がる蟻のように男達を取り囲んだ。

男達は四方から手を伸ばし、豊かな乳房を揉み上げ、柔らかな脂肪を載せた、吸い付くようなしっとりとした白い肌を揉み上げた。

男の太い指が、晴江の股間を無理やりこじ開けて、秘孔にねじ込まれて来たので、ビクッと体を震わせた。

男の無遠慮な指で腫れ上がった敏感な襞を撫で回されて、イヤイヤと首を振り立て悲鳴を上げた。

「へへ・・・午前中はあんなに嬉しそうにダラダラお汁を溢していたのに、随分干からびてしまったじゃないか？」

お竜の両足首を掴んだ男が、思い切りお竜の脚を広げた。

すっかり剃毛され、恥ずかしい女の秘裂を隠す物も無く晒す、柔らかな肉を載せた秘所が押し広げられ、その内部の微妙な構造まで陽光の下に明々とさらけ出された。

アアー、イヤ！と、男達に秘所をまともに眺められ、お竜が恥ずかしそうに顔を染めて首を振った。

「へへ・・・良い匂いがするじゃないか・・・」

剥き出しとなったお竜の股間に顔を近付けながら男が鼻を鳴らした。

昼休みの間に、剛沢の愛人達が女達の股間に香料を塗り込めておいたのだった。

「カラカラに乾いたここを俺の舌で湿らせてやるぜ・・・」

男は舌を延ばすと、お竜の股間に顔を埋めた。

男の尖らせた舌先が秘孔の周囲をなめ回し、その微妙な構造を舌先で楽しんだ。

男のザラザラした舌先が肉襞に沿って這い回り、その卑猥な動きに煽られて、お竜が体をビクビクと痙攣させた。

秘孔の周りを舐め回していた男が、舌先を緊張させて固く細く絞り、孔内に進入させた。お竜の体が一瞬ビクッと体を震わせた。

男達に周囲から柔肌を撫で回され、無理やり快感を煽り上げられて行った。

お竜の腔内を舌を駆使して愛撫する男の舌先に甘いお竜の愛液が味覚されるようになって来た。

女達が甘い鼻息を鳴らすようになっていた。

「口を吸ってやるぜ」

男が晴江の後ろ髪を掴むと、顔を自分の方に振り向け、唇を重ねて来た。

その二人の姿に、ようよう！ご兩人！とか、お熱いねー！とか、野次が上がった。

これだけ濡れてくれば、充分だろうーと、まるでサツマイモのように巨大なバイブを手にした。

スイッチをいれるとズーンとした低い、マッサージ器のような力強い振動が手に伝わって来た。

不気味な低い振動を続けるバイブの先端を、愛液を漏らし始めた、柔らかく開いた秘孔に押し当てた。

股間から突き上げる力強い衝撃に、晴江が体を振らせて逃れようとしたが、周囲の男がその動きを封じ、晴江の口内に舌を挿入した男が、悲鳴を封じた。

「おお！見ろ！肉がどんどん開いて行くじゃないか！」

「こんな太い物をどんどん呑み込んで行くぞ！」

ラグビーボールにも似た長円形のバイブが、女の秘肉を押し開き、ジワジワと大きくなる直径に併せるように秘孔を開いて、体内に呑み込んで行く様子に男達が目を見開いた。

「こんなぶつといモノを良く呑み込めるな！？」

「一体、オメー達はドンだけデカイ物が入るように調教されているんだ？」

さすがに女達もバイブの直径が大きく膨らんで来るに従い、苦しそうに眉毛を蹙め、直径が最大となる中央部を迎えた時には、秘肉を大きく押し広げられる苦痛でむずかる様に腰を悶えさせ、男の太いモノで口を塞がれ声を封じられているため、辛そうに鼻を鳴らして抗議した。

そんな女達の苦痛に一遍の配慮をすることなく男達は、グイグイと押し込んだ。

おおっ！入ったぞ！と、バイブの最も直径の太くなった部分を迎え入れ、その後もズンズンと内部に呑み込んで行く様子に男達が呆れたような声を上げた。

とうとうバイブの全長を全て体内に収め、再びピッタリと閉じ合わされた膣孔からは、バイブに結び付けられた綱だけが、体外に姿を見せていた。

女達の体内では相変わらずバイブが低い振動を続けており、それに合わせるかのように女達の下腹がブルブルと震えていた。

「さあ、準備は整ったぜ！」

男達が額の汗を拭きながら、芝生に横たわったままの女達を見下ろした。

選手の男が69の体位で重なるように、女達の上に覆い被さった。

上になった男が、見事に隆起したモノを女の口にねじ込んだ。

周囲を取り囲む男達も女の手足を持って下から男に抱き付くよう姿勢を取らせた。

「いいか！しっかりと抱き付いて、絶対落っこちるんじゃ無いぞ！手と脚に力を込めてしっかりと抱きしめているんだぞ！」と、下にぶら下がった女に声を掛けた。

「そんなに脚に力を入れられたら、首が絞まって息が出来ないぜ・・・」

選手の男が首に絡めた両脚に力を込めてぶら下がる女に笑いながら言った。

選手が、女を腹の下にぶら下げたまま、四つん這いの姿勢で、競技位置に付いた。

女の股間に埋められた、パイプから延びた綱がたぐり寄せられて、二組の選手の中央で結び付けられ、結び目に赤い布を縛りつけて目印とした。

選手の間芝生には白線が引かれており、両選手の間で今はピンと張られた、綱の中央に縛りつけた、目印の赤い布が白線の真上に来るように調整された。

成る程、これは良く見えるぜ・・・晴江をぶら下げた男が、競技位置について思った。

晴江の膣孔から長く延びた綱は、向かいのお竜の膣孔の中に完全に没しており、二人の女の性器の間を繋ぐ綱は、一筋に弛み無くピンと張っていた。

目の直ぐ下では、体内から襲い来るパイプの振動に堪え切れないのか、腰をブルブルと震わせ、男のモノを口に咥えているため、声には出来ないが苦しげに鼻を鳴らしていた。

そして、目の前数メートルの所には、開き切ったお竜の秘部が、明らかに見え、やはり体内のパイプの振動に煽られ、細かく腰を悶えさせていた。

号砲が打ち鳴らされ、競技が始められた。

それぞれの男は、女を腹の下にぶら下げたまま、体を後ずさりさせた。

二人の女を結び付けていた、綱がいっぱい引き絞られた。

引き絞られた綱に、深く体内に埋め込まれていたパイプが引きずり出されようとして、晴江の膣孔の周囲の肉が火山の様に盛り上がり始めて来る様子が、眼下に見られた。

正面を見るとお竜の膣孔の周囲も大きく盛り上がり始めている様子が見られた。

声を上げられない女達が、悲鳴のように鼻を鳴らした。

このまま一機に引き合い、相手の体からパイプを引き抜いてしまおうかと思ったが、既に晴江の開き始めた膣孔からは、綱を繋いだ白いパイプの先端が充血した秘肉を捲り上げ、徐々に姿を見せ始めているが、向かいのお竜の方はまだ体内に留まったままの状態であることが観察された。

このままでは部が悪いと覚った男は、後ずさを止めて、逆に体を前に進めて、綱の緊張を解いた。

一瞬、張り詰めていた綱が緩んだため、向かいの男が転びそうになったが、何とか姿勢を立て直した。

既に先端部分を外部に覗かせていた晴江のバイブは、張力が緩んだ隙に、鍛えられた膣の筋肉を動かして、自力で体内に吸い込み、元の位置に収めた。

こうして、引いたり緩めたりを繰り返して、二人の試合は長い勝負となった。

ピッタリと肉洞を塞ぐバイブを押したり引いたりしている間に、その強いバイブの振動にも煽られ、二人の女の状態にも表れ始めていた。

膣孔がピクピクと大きく収縮し、その都度充血したサーモンピンクの肉襞を捲り上げて、妖しく蠢くバイブが見え隠れし、それを離すまいと、秘肉が必死に喰い絞める際に、その中心部から熱い汐が前方に向かって、ビュッ、ビュッと放射された。

コアラやナマケモノが手足を絡めて木にぶら下がるような姿勢で、男の体からぶら下がりながら、腰を痙攣させて、汐を噴き合う、その恥ずかしくも滑稽な姿に、見物の剛沢の愛人達が、蔑んだ目で見詰めながら、口を覆って笑った。

本部席のテントの下では、沢田と銀子が大げさに肩を叩き合って笑い転げた。

長時間の勝負となり、女達の疲労状態は明らかであった。

しかし、形勢は、若いお竜の方が優勢に進め、既に晴江の組は、白線の間際まで追い込まれていた。

「糞！こうなったら一機に勝負を掛けるぞ！」

追い込まれた男が、一機に勝負を掛けて逆転を狙うしか無いーと、腹の下にぶら下がる晴江に、そっと囁いた。

晴江にもその声が聞こえたのか、男根を突き入れられて、声を出すことの出来ない口からウッ、ウッと肯くような呻き声を上げた。

そして、自分の真下20センチ足らずの所に見える、ビッショリ汗を浮かべ秘所から湧きだした分泌液に濡れた、膣孔の筋肉が、乾坤一擲の最後の勝負に撃って出るためにギュッと緊張する様子が見えた。

男はフェイントでクイッ、クイッと軽く綱を引き、そのリズムカルであるが弱い攻撃にお竜が油断して緊張を緩めたタイミングを見計らって思い切り後ずさりした。

アッと言う声が上がって、お竜の体内から、秘肉を捲り上げ、バイブが数センチ引きずり出

された。

お竜が悲鳴のような呻き声を上げながら、残された力を振り絞って、残りの部分を引きずり出されるのを堪えた。

見守る観衆から、ワッと歓声が上がった。

お竜の秘孔からバイブのかかなりの部分を引きずり出すのに成功した晴江であったが、その代償に晴江もバイブのかかなりの部分を表に晒していた。

二人の女はバイブの最も太い部分を残しての、引き合いとなった。

しかし、最初の奇襲攻撃に失敗した、晴江には最早勝機は残されていなかった。

若いお竜の方が体力を残しており、まだ体内に残された部分をガッチリ締め上げ、ジワジワとたぐり寄せ始めた。

お竜に引かれて、体外に飛び出していた晴江のバイブが、柔肉を捲り上げるようにして徐々にその全貌を見せ始めていた。

そこだ！頑張れ！とか、もう少しだ！と、最後の力を振り絞り、恥じらいも忘れたように尻を上下や左右に振り立て必死に息む二人の美女に、応援席から声援が飛んだ。

お竜はガッチリと啜え込んだまま、益々張力を強め、それを堪える晴江は、男にぶら下がりながら尻を必死に振り立て、堪えようとしていたが、観衆の目には晴江の秘孔を押し開き、バイブがその巨大な姿を現す様子がありありと見られた。

やがて、膣孔がメリメリと開き、これ以上褻が拡がらないように見えた時が、晴江の体内に埋め込まれていたバイブの最も太い部分が通過した瞬間であった。

最も抵抗の大きな部分を失った晴江は、ビクッと体を痙攣させたが、最早次第に細くなって行くバイブの残り部分を喰い止めることは出来なかった。

夥しい愛液の放出と共に、巨大なバイブが体内より引き吊り出され、宙に舞った。

オオーッ！と歓声が上がった。

「今の勝負、勝者はお竜だ！」

黄原が大声で宣告した。

晴江もお竜も力尽きたように、しがみついていた男の体から落下して、芝生の上に仰向けになり、ハアハアと荒い息を吐いていた。

そんな二人の様子に斟酌することなく、

「次の勝負は、お竜と曉美だ！」と、黄原が冷たく言い放った。

晴江がチームの男達に担がれるように、運び去られるのと交代して、その位置を曉美と曉美

芝生の上に股を開いて仰向けに横たわる暁美に男達が、晴江の体から引きずり出されたパイプを手に迫った。

「これが、今までお前の母親がオ●●●●●●に突っ込んでいたパイプだぜ！ ヨガリ汁でベタベタじゃないか？ 見てみろよ凄い濡れ様だぜ！」

と、ドロリとした濃密な粘液で塗された、ブルブルと強い振動を続けるパイプを芝の上に横たわる暁美の目に見せ付けるのであった。

パイプを手にした男は、パイプが芝の上に転がった時に付着した、土を払っただけで曉美の股間に突き立てようとした。

まだ母親の体温を残すパイプが秘肉を押し分けるように拵けて、その先端が体内に乱暴に挿入されて来た。

今まで経験した事の無いような巨大なパイプを、まだ準備の整っていない秘部に突き立てられ、苦痛で腰を捻ったが、男に太い肉茎を口内に突き立てられ、悲鳴を封じられた。男の荒々しい臭いが口内に充満した。

暁美の周りに群がり、バイブ挿入準備をしていた男達が嬉しそうに声を上げた。

パイプの最も直径の太い所が、肉の関所を通過し、その大半が体内に没していた。

まだ体外に顔を出している部分を男達は、端を押したり、まるで砂の中に埋めるように周囲の襷を引っ張ってその上に被せ、僅かに体外に顔を覗かす白いパイプを覆い隠そうとしていた。

男達の努力の結果、パイプは完全に体内に没し、複雑な構造をした襞の間から、綱が飛び出すだけとなっていた。

全ての準備が完了し、女達を吊り下げた男達が、定位置に着いた。

二人の女の秘孔を繋ぐ綱が、中間点の白線を跨いでピンと張った。

号砲が打ち鳴らされ、二人の女の秘所を使った、淫猥な綱引きが再び開始された。

センターラインを挟んで、一進一退の両者互角の勝負を展開した。

互いに渾身の力を其処の筋肉に込めて引き合い、僅かに相手の秘孔からパイプの先端が見えるまでは行くが、女を吊り下げる男が巧みにいなし、勝負は長時間に及びそうな展開となった。

この長い勝負の間に、お竜を吊り下げる男が、お竜の体調の変化を感じていた。

時折堪えられないように腰をブルブルと震わせ、夥しく愛液を迸らせる、状況からお竜は絶頂に達しようとしていることが分かった。

長時間の秘肉を酷使した戦いでお竜のその部分から絶え間なく襲い続ける快美感は、最早お竜の自制を遙かに超えつつ在ることが男に感じ取られた。

このまま時間を費やしては、不利になることを自覚した男は、乾坤一擲の勝負に出ることにした。

「お竜・・・逝っても良いが、落っこちないようにしっかりと捕まっているんだぜ」

と、自分のモノを咥えさせながら、必死になって男の腹にしがみつくお竜に囁き掛けた。

お竜も男の言葉に、ともすれば飛んでしまいそうになる意識の中で、男のモノを必死に口内で吸い上げながら、ウウウッと応えた。

男はお竜の逝く瞬間の強い緊縮力に賭けようとしたのであった。

男はグイグイとリズムカルに引いて、お竜の快感を押し高め、最後の瞬間に鋭く強く体を引いた。

その瞬間にお竜は弾かれたように体を仰け反らせ、男に抱き付いたまま絶頂に達した。

お竜の絶頂感に伴う強い緊縮力は、曉美の筋力を上回り、曉美の秘孔を押し開いて、充血した秘肉から白いバイブが半分近く露出した。

観衆からどっと歓声が上がった。

しかし、曉美は最後の力を振り絞り、一番直径の太くなる部分で、何とか堪える事に成功した。

絶頂を極めた後のお竜の筋肉は次第に弛緩を始め、逆に曉美に引きずり出され始めた。

曉美のバイブも半分体外に出かかっているが、最後の力を振り絞り、緊縮力を失い始めたお竜からバイブをズルズルと引き出し始めた様子に、観衆が熱狂した。

ズポッと大きな音を立てて、お竜の体内から赤いバイブが引き抜かれ宙を舞った。

その瞬間お竜は、バイブに出口を塞がれ体内に溜まっていた大量の体液をドッと放出して、ドサッと地面に落下して、完全に昇天した。

曉美の完勝に応援席から、口笛が吹き鳴らされ歓声が上がった。

曉美の勝利の後、休む間もなく、晴江のチームが負けたお竜のチームを追い出すように対戦場所にやって来た。

そして、お竜の体から抜け落ちたばかりの、ビッショリと濡れたままの赤いバイブを、晴江の秘孔に押し入れた。

「へへ、次は母と娘の綱引きだぜ！親子だからって言って手抜きするんじゃないぜ！」

バイブを体内に押し込められながら男達が、隠微な笑い声を上げた。

号砲と共に綱引きが開始された。

実の母と娘の綱引きであったが、最下位の罰ゲームを恐れるためか、あるいは股間から突き上げる激しい刺激による疼きに理性を忘れてしまったのか、互いに手を抜くことなく真剣に秘孔の周りの筋肉を引き締め、必死に綱を引き合った。

互いに正常な感情を無くしてしまったのか、男にしがみ付く体を振り立て、汗塗れになり、呻き声に鼻を鳴らして体内に仕込まれたバイブを離すまいと必死に堪え合った。

そんな女達の演じる扇情的な光景に、応援の男達が盛んに喝采を送った。

長い勝負になったが、不意に男にしがみ付く暁美の目が裏返しになり、白目を剥いてドスンと落下してしまった。

長時間イクのを必死に耐えていたが溜まりに溜まった刺激に堪えられず、突然絶頂に達してしまったのだった。

「暁美の落馬により、この勝負晴江の勝ちだ！」

激烈な苦痛と怪しげな快感を伴った勝負の間中、男のモノに縋るように口に法張り無意識に教えられた技巧を発揮してしまった暁美が逝く瞬間、男も暁美の口中に発射してしまっていた。

口から男の粘液の混じった泡を吹く、意識の無い暁美を見下ろしながら、黄原が事務的に宣言した。

直ぐさまお竜のチームが、暁美の組を押しつけるようにやって来た。

腰に力が入らないのか足元の覚束ず、涙を浮かべてイヤイヤをするお竜を、両側から男達が抱え上げて決戦場に連れて来た。

そして、乱暴に暁美の体から取り出した、バイブを芝の上に横たえたお竜の体に植え付けようとしていた。

二度目のお竜と晴江の勝負となったが、長い戦いの末の勝者は、再びお竜であった。

この黄原の考案した綱引きは、後から戦いに参加する者の方が、前者の戦いの間に体を休めて回復する事が出来るので優利であった。

勝者は勝利した後も絶え間なく体内から突き上げるバイブの刺激に苛まれ続け、体を休める

こと無く次の試合に臨まなければならないので、決定的に不利と言えた。

女達の中々連勝出来ない間に、時間ばかりが経過して行った。

そして、この女達を恥辱と苦痛の中に長時間止めておく事が、黄原の最初からの狙いであったようだ。

結局、汗みどろの長い勝負の末に、お竜が連勝して勝者となり3ポイントを獲得した。

晴江と暁美の個人戦では、暁美が勝利し1ポイントを獲得した。

男達に囲まれて、肩で荒い息を吐きながら放心したようにグッタリとする女達に向かって、黄原が、「さあ、綱引き第二ラウンドだ！今度はケツの穴にこれを突っ込んで綱引きだ！」と、長い綱の結び付けられた赤色と白色のボールのような物を示しながら言った。

その黄原の悪魔の声に、既に肉体的疲労の極限を超えてしまって、身動きも出来ない女達は、もう許して下さいと、悲鳴のような声を上げて、身を震わせ泣きじゃくりながら哀願した。元々博打が三度の飯より好きで、金の懸かった勝負に目が無い男達であり、その上、女達の見せる淫猥な姿に魅せられた男達は、悲痛な哀願も歯牙にも掛けず、次の勝負を急がせるのだった。

くじ引きで最初の勝負は暁美と晴江に決まった。

男達は黄原から受け取った、赤と白のボールのような責め具を手に取り、目を丸くした。

「お前達親子は、一体何時もどんなウンコを出してやがるんだ？こんなでかい玉を突っ込めるケツの穴をしやがってよ！」

それは、テニスボールより一回り大きそうな樹脂製の玉を2個、10センチ程の間隔をあけて紐で結んだ物であった。

赤い二つのアナルボールを結んだ物が紅組、白いアナルボールを結んだ物が白組という趣向なのだろう。

二個の白いアナルボールを手にした男達が、ニヤニヤと卑猥な笑みを浮かべて犬の様に四つん這いの姿勢をとる晴江に近づいた。

ほら！しっかりと腹の中に納めるんだぜ！と、言う様に無言で晴江の尻を叩いた。

一人の男が晴江の尻たぶに両手を掛けて力一杯左右に押し広げた。

明るい陽の光の中にセピア色を帯びた蕾がさらけ出され、思わず、ああっ・・・と、か細く声を上げた。

晴江の羞恥を滲ませる風情にも気を留めることなく、かつては雲の上の存在とも云えた主筋の美しい熟女を責め苛む熱狂に煽り立てられ後ろの孔を突き通そうとするのであった。

巨大なアナルボールを肛門に押し当て、グリグリと力尽くで、ねじ込もうとする男達に苦痛の余り悲鳴が上がった。

何時でも何処でも前技無しで、二つの穴に挿入出来るように仕込まれてはいたが、やはり通常の男性器を遙かに超えるような物体の挿入は容易ではなかった。

「お願いします！コールドクリームを塗って下さい！」

余りの苦痛に晴江が尻を振りながら悲痛な声を上げた。

「馬鹿野郎！油を使ったら競技中にスルッと滑り出してしまうじゃないか？」

男はなおも何も潤滑されてないボールを肛門に突き入れようとしていたが、どうにも困難で在ることを覚った。

「こいつは仕方無いな・・・おや？これはどうだ！前の方がベチョベチョじゃないか！」

男は、取り付け作業の間に、晴江が前門から夥しく愛液を漏らしている事に気付いた。

「これは、良いや！このおネバを使わして貰おう！」と、言うのと、二つのボールを有無を言わさず、晴江の膣孔に押し込んだ。

突然メリメリというような軋みを上げて、体内に押し込まれた巨大なボールの苦痛に体を振って身悶えた。

「へへ・・・これは良いや！これなら入りそうだぜ！」男は、濃密な陰液でベツトリと塗されたボールを手に、再び晴江の後門に襲いかかった。

アアッ、アアッと体を痙攣させて苦悶してが、男の予想したように陰液で潤滑されたボールは、晴江の肛門括約筋の必死の抵抗をあざ笑う様に残酷に押し開き、体内に埋没してしまった。

一方曉美の方も同じように潤滑した赤いボールを体内に挿入し終えていた。

何事も無かった様にピッタリと閉ざされた二人の女の尻穴からは、ボールに固定された紐だけが、セピア色の皺の中心から体外に飛び出していた。

紐の先端に取り付けられた金色のリングに競技用の綱が結び付けられ、その中間に中心位置を示す赤いリボンが結び付けられ競技の準備を終了した。

号砲と共に競技が開始された。

今回の晴江の組の男も曉美の組の男も、引いたりいなしたりせずに単急兵に力尽くで勝負を勧める性格の男であったので、最初からまともな力のぶつかり合いとなった。

両者の間でピンと張った綱は、中間点から動くことは無かった。

脂汗に塗れて、綱を引く二人の女の肛門は内部から迫り上がるボールの形を受けて、その隠微な董色の皺を押し広げて、丸くドーム状に盛り上がり、その僅かに開いた穴の中心からは赤と白の樹脂製のボールの色が見え隠れしていた。

「こら！もっとケツに力を入れて尻の穴を思い切り締め付けねーか！」

男が渾身の力を肛門括約筋に込める女に叱咤した。

男から怒鳴られて女達が全身に汗を浮かべて、肛門の筋肉に力を注いだ。

しかし、このような極度の緊張は長時間は保たず、やがて筋肉が疲労し下腹が痺れ始めていた。

晴江の肛門をメリメリと内部から押し開き、白いボールがその姿を表に表し始めた。その姿は徐々に大きくなり、丸い表面が外部に姿を現した段階で、支えを失いポンと飛び出した。腸内に残っていたもう一つのボールの弛んだ紐に突然張力が発生し、出口に向かって急速に引き出された。

残されていた力を込めて辛うじて二個目のボールが体外に引き出されることは避けた。

しかし、急激に腸内を移動したボールを出口で押し止めた衝撃がズシンと晴江の肛門にのし掛かり暫く痺れたような感覚となった。

暁美が母親の腸内からボールを一つ筆り取って、圧倒的に優位になったことに、応援席が色めき立った。

「この野郎！しっかりと啜えていないか！」

一個のボールを奪われ、腸内に残された一個のボールのみで対峙することになった晴江に、男が怒った様に腰を突き出した。

年上の美熟女を責め立てるサディスティックな興奮で、晴江の口の中に含ませた男根は最大限に硬く膨張しており、今にも暴発寸前であった。

男がいきなり突き入れた凶暴な男根が気道を塞ぎ、晴江が咽せたような声を上げた。

しかし、この男の乱暴な叱咤が逆に力になったのか、残り一個のボールに力を込めた晴江が逆に、暁美の肛門を押し開き、赤いボールを奪い取ることに成功した。

形勢が互角に戻った事に、応援席から歓声が上がった。

この後も長時間、緊迫した攻防が続いたが、最後は体力を残した暁美が、母親の腸粘膜を内側から捲り上げて、二つ目のボールを母親の体内から引き抜き、勝利を決めた。

晴江の肛門を割って白いボールが宙に舞った瞬間、晴江の股間からは黄色い液体がビュッと

吹き出し、飛沫を上げて四散した。

敗れた晴江は芝生の上に転がったまま、荒い息を吐き、その痛ましい肛門は閉じることを忘れたかのようにポツカリと口を開けてヒクヒクと痙攣しながら、その内部を明るい陽光の中に晒し続けていた。

一方勝った暁美も下半身が痺れ切りその感覚を失っており、最早戦える状態では無かった。負けた晴江達を押し退けるように、お竜のチームが登場し、芝生の上に転がった白いボールを手にした。

「へへ、まだ大姐の身体の温もりが残っているじゃないか。」

「なんだか少し表面が黄色くなってないか？」

競技の熱狂で興奮に包まれた男達は、晴江の腸内から引き吊り出されたボールを、不潔とも思わないのか手づかみにすると、早速お竜の肛門にねじ込もうとした。

「へへ、大姐が腹の中で暖めていたボールだ！通りが良くなっているんじゃないか？」

と、額に汗を浮かべ目をギラギラさせながら身悶えるお竜の尻の窪みに押し付けた。

アアーッ！痛い！痛いわ！

突然巨大なボールを力尽くで、ねじ込もうとする男達にお竜が悲痛な声を上げた。

「糞！滑りが悪くて入らないな！」

男は、無理やり挿入することを諦めると、お竜の口をこじ開けて、ボールを口内にねじ込んだ。

「舌先で良くしゃぶって、滑りを良くするんだ！」

いきなりボールをねじ込まれ目を白黒させるお竜に男が怒鳴った。

男の前に全てを諦めたように、お竜は、これから自分の狭い肛門を通過することになる巨大なボールが少しでも円滑に通過出来る様、晴江の腸内汚物の味覚を残すボールを舌を使って丁寧に嘗め上げるのであった。

暁美とお竜の勝負は、お竜を操る男が旨くいなしながら勝負を進め、腰が痺れたままの暁美から赤いボールを奪い取る事に成功した。

そして、娘の入っていた赤いボールを受け取った晴江が、疲れの残るお竜と勝負し、晴江が辛勝した。

陰險な黄原が予想した通り、この勝負も最初の勝利で既に疲労困憊したまま続けて2戦目に挑む女の方が、体を休めて体調を整えて勝負に挑む女より圧倒的に不利であり、中々勝者が

決定しない間に時間が経過していった。

最終的に曉美が辛くも2連勝を遂げるまで、その夥しい数の勝負の間、女達は苦痛に苛まれながら、屈辱的で破廉恥な試合を続けたのであった。

勝負は決定しても、女達には達成感はなく、荒い息を吐きながら、意識を喪失したかのように朽ち果てた様に芝生に横たわり、大きく開いたまま大腿を閉じる気力も失ったように開き切った陰門を陽光に晒し続けるのであった。

「女達も大分体力的に参っている様だから、次の試合は少し軽いヤツだ！どこの運動会でもやっているスプーンレースと言うヤツだ！これを女のオコに突っ込んでスプーンに載せたボールを運んで貰う！」黄原が手にして、大きく空に向かって差し上げたのは、男根を模したバイブレータの根本に大きな金属製のスプーンを取り付けた物であった。

スプーンレースと聞いて、手に持ったお玉にボールを載せて走るレースのようなものを連想した男達は、その卑猥な器具を見てゲラゲラと笑いさざめいた。

バイブを女の陰部に完全に埋没させると、秘部の襞の間からスプーンだけが飛び出す格好になる。

女は四つん這いになって尻から突き出したスプーンに生卵を載せ、男は四つん這いの女の口に男根を咥えさせて、女を後ずさりさせながら男根の指示によりコースを進み、折り返しの旗を回って、卵を落とさない様にゴールまで戻って、リレーしていくと言うルールであった。男のモノを咥えたまま、四つん這いの姿勢で後ずさりするレースのためコースが見えない女へのコースの指示は女の口内に突き立てた男根だけを使用し、ランナーは声で指示することはルール違反となっていた。

基本的には3人の選手によるリレーであるが、女達が落として割った卵の数だけ、5名でも7名でも走者数が追加され、最終ランナーが早くゴールに着いたチームが勝ちというルールであった。

お前達がオコを使う試合も本日これが最後だから気合いを入れて行けーと、黄原が氣息延々とする女達を励ますように声を掛けた。

スタートラインに四つん這いで集合した女達をチームの男達に取り囲んで、臀肉を押し広げて、その中心部にバイブを挿入した。

これまでの幾多の淫猥な試合によって既に爛れた様に腫れ上がった膣孔の秘肉に又もや悪

魔じみた異物が挿入され、女達がバイブの発生する強い刺激に悲痛な悲鳴を上げた。

バイブは女達の秘孔の中に完全に姿を没していたが、ピッタリと閉じ合わされた秘所の襞を裂くように、巨大なスプーンが突き出し、女達の体内を責めるバイブの振動に呼応して、ブルブルと震えていた。その大きなスプーンに生卵が載せられた。股間から突き出し長く延びたスプーンに置かれたので槌子の原理で体内のバイブが強く押し上げられ、女達が押し殺した悲鳴を上げた。

「良いか？俺がチンポの先で真っ直ぐ突いたら直進、右に突いたら右に曲がる、左に突いたら左に曲がるだ。チンポを引いたら止まるだ！・・・良いか？」最初のランナーが女の口の中に男根を突き立てながら、四つん這いの姿勢で後ずさりするためコースを見ることが出来ない女に送る指示を説明した。

スタートの合図を待つ間も、尻から長く延びたスプーンの先で生卵が危なっかしく震えていた。

号砲と共に一斉にスタートした各選手であったが、激しく大腿を動かす姿勢のため、じっと静止している時よりも、バイブの振動が一層強烈に膣壁を襲い女達を苦悶させた。

スタートして間もなく体内から襲い来るバイブの振動に耐えられないように腰を悶えさせた晴江が、早々と卵を落とし割ってしまった。

お竜も、暁美もコースの起伏に体勢を崩して、卵を落としてしまった。

「これは、終わるまで何人ランナーが要るか判らないなー！」ゴールで待ち受ける男達が、このレースが前途多難で在ることを予想して声を上げた。

一方、男達も女を進ませるために、女の口内を肉茎で小突き続ける間に、快感が堪えられない程、昂進してしまっ、突然女の口内に精液を放出する男も続出した。

男から声による指示は出来ないルールで在ったので、沈黙の内に突然口内に生臭い精液を放出されて目を白黒させるのだった。

「お前のココがだらしがないから何度も卵を落っこすんだ！」と、腰に力が入らず何度も卵を落とす女に腹を立てた男がコースに蹲る女を蹴り上げて怒鳴りつける姿があちこちで見られた。

心身共に疲弊しきった女達は男達の暴力に抗することも出来ず、ただ大声を上げてヒステリックに泣き叫ぶしかなかった。

女達が通ったコースの跡には、スプーンから落下して、割れた卵から流れ出た黄身や白身が点々としていた。

これに懲りた男達は落下しても卵が割れ難いように、わざとコースを大きく外して芝の深い所を選んで進んだりした。

女達は、長く何時までも続く肉洞内から責め立てられる間断無い刺激に責め上げられ、途中何度も身動きが出来なくなった。

そんな時、男達は、女達なのぼせ上がった体調を下げるため、体内に埋め込まれたバイブを操作して最後までイカせるのであった。

「へへ。こいつはバイブに長い柄が付いていて扱い易いぜ・・・」

男達は膣孔を割って長く飛び出したスプーンの柄を鷲掴みにすると、膣内に完全に姿を没して表から見えないバイブを操作した。

アッ、アッ、アッと高くもたげた尻を間断なく震わせながら、女達は眉根を寄せて、間近に控えた絶頂の瞬間を前にして苦悶を続けた。

男達も、スプーンの柄を掴んで、「それイケ！早くイケ！」と、大きく前後に出し入れした。絶頂に達して、芝の上に俯せになった体をピクピクと痙攣させる女達に向かい、「さあ、これですっきりしただろう？早くレースの続きを始めるんだ！」と、冷たく言うと、無理やり四つん這いの姿勢を取らせて、突き出したスプーンに卵を載せるのであった。

女達は、途中何度も気をやりながら、何時終わるとも知れない、レースを続けさせられた。早朝から始められた運動会もレースが終わる頃には、午後の陽がとつぷりと傾き始めていた。レースが終了した時には、女達は、貧血を起こしたのか全身蒼白となりグッタリと力を無くし、まともに起き上がることも出来ず、再び担架に乗せられて和久井医師の待ち受ける医務室に担ぎ込まれた。

「さあ、最後の種目は玉入れだ！女達にはちょっと休憩して貰うから、今度は女抜きで、野郎達だけで戦って貰う・・・」

黄原が最終種目の説明を始めた。

女が出場しないと聞いて、男達は少しガッカリした表情を浮かべた。

「最終種目の点数は、1位が5点、2位が2点、3位が0点だ・・・」

これを聞いて男達は俄然やる気を得た。

現在までトップのお竜と2位の晴江の差は3点、晴江と最下位の暁美との差は1点という僅差で在ったので、最下位の暁美のチームも一発逆転で優勝を狙うチャンスが出て来たことになり、是非賞金の200万円をせしめんものと、ムラムラと闘志を掻き立てるのであった。

芝生の上には、3本のポールが立てられ、4メートル程の高さのポールの上には、通常の玉入れに使う籠では無く、上面が開孔した透明なガラスの容器が取り付けられていた。

そして、ポールを取り巻く周囲には、色取り取りの無数のゴムボールがばら撒かれた。

「何だ、これは？」

芝生の上に撒かれた柔らかいゴムボールを手に声を上げた。

「これは、縁日の夜店で使う、風船吊りのボールだな？」と、カラフルな色をしたゴムボールを手に別の男が呟いた。

ボールの中には空気と共に少量の水が入っているのも、風船吊りのヨーヨーゴムボールと同じであった。

ピストルの音を合図に、男達は優勝賞金を目指して、童心に帰った様に無心にボールを高く掲げられて、的に向かって投げ上げた。

大きな円筒に半球形の底を付けたようなガラス容器の上端には針を上に向けて植えた網が取り付けられており、容器に届いたボールは、網の上に植えられた何本もの針に引き裂かれ、中の水を容器内に溜めて行った。

黄原が次に何を企画しているかも知らず、男達は他のチームに負けるまいと、一心不乱にゴムボールを的に入れる事に、歓声を上げながら熱中した。

割れた風船から漏れる水の飛沫を浴びて顔をビシヤビシヤにしても童心に帰ったように無心に投げ続けた。

剛沢や黄原や取り囲む大亜門戸会の男女が見守る前で、透明な容器内の水位はどんどんと上昇して行った。

所定の時間が終了して、終了を知らせるピストルが打ち鳴らされた。

伸縮するポールを縮めて、ポールの上端に取り付けられていたガラス容器が人の胸の高さまで降ろされて来た。

容器内に溜まったゴムの破片を取り除き、水だけになった容器の中身の計測が始まった。

しかし、計測を待つまでも無く、透明のガラス越しに見える水量の差は明らかであった。

2リットルは、入りそうなガラス容器の上の方まで、お竜のチームは満たす事に成功していた。

2位と3位は共に容器の4分の3程を満たしており、微妙であったが、曉美のチームが僅かに多く、勝利した。

2位と7点、3位に8点の差を付けて優勝を確信したお竜のチームが飛び上がって歓声を上

げた。

「まだ、喜ぶのは早いぜ！次が本当に本当の最後の勝負だ・・・」

黄原が台の上に立って興奮する選手達に声を掛けた。

黄原の呼びかけに、一体次は何が始まるのかと、一瞬静かになった男達の目に、治療の終わった女達が、首輪に結ばれた紐を剛沢の愛人達に引かれて、建物を出てこちらに向かって来る様子が映った。

今度は、女達全員麻縄で高手小手に縛られており、後から前に回した縄で形の良い乳房を厳しく絞り出すように縛られていた。

後手に縛られているため、恥ずかしい所を手で隠すことも出来ず、綺麗に剃毛された秘部を晒しながら、積み重なった疲労で腰に力が入らずヨロヨロと今にも倒れそうに歩んで来る女達の姿にも憐憫の感情を抱くことが無いのか、朝から休む間もなく突き立てられ腫れ上がったように充血した股間と縄により括り出された豊かな乳房を獣欲の混じった目で交互に見詰めるように凝視した。

「今、お前達が投げたボールの中には、グリセリンの浣腸液が入っている。これからその浣腸液を使つての女達による浣腸勝負だ！この勝負の1位は10点、2位は3点、3位は0点だ！」

黄原の言葉に、再び逆転優勝のチャンスが巡って来た、最下位の晴江のチームや二位の暁美のチームが歓声を上げた。

逆に、大量リードしたことにより、一番多くの浣腸液を流し込まれる不利な立場になったお竜のチームが抗議のブーイングを上げた。

「まあ、人生いろんな所に落とし穴が在るってこった。一番浣腸液の量が多いからって、最初に漏らすとも限ったもんでも無い。・・・まあ、女達がせいぜい頑張るように声援を送ってやってくれ。」と、皮肉そうに笑って台を降りた。

玉入れゲームにより浣腸液を注ぎ込まれた透明の硝子容器の下部に長いゴム管が装着され、容器の下部のバルブを開いてゴムチューブ内をグリセリン溶液で満たした。

ゴムチューブの端は金属製のクリップで封鎖されており、まだ浣腸液が流れ出るのを防いでいた。

浣腸液を満たしたガラス容器がポールに沿って再びスルスルと上に上げられて行った。

女達は、数人の男達の手によってポールの根本に頭を下にして、体重を首と肩で受ける姿勢で麻縄によりポールに厳しく縛り付けられて行った。

これからどの様な残忍なゲームに参加させられるのか？恐らく女達は黄原の意図を薄々気付いてはいたかも知れないが、激しく疲労困憊しており気力も既に喪失して、男達の手で易々と縛り付けられていった。

真上を向いた下半身から両脚は大きく左右に広げられ、地面に打たれた杭に両足首を縛り付けられたため、空に向けて秘所を大きく晒す形で身動き出来ないように固定されてしまった。両脚を大きく広げて斜め前方に突き出す様に固定されてしまったため、正面に陣取る元は傘下の組織の男達の目に、剃毛された秘所がこれ見よがしに突き出し、まるでザクロが弾けたように細やかな襞の内部まで晒し、男達の淫靡な視線を受け続けた。

ボールの先端に固定されたガラス容器の底から長く下にゴムチューブが垂れ下がり、風に揺れたチューブの先端に取り付けられた金属クリップがボールに当たってカチャカチャと無機質な音を立てていた。。

そのガラス容器の形状を改めて見ると、浣腸に使用するイルリガートルをそのまま拡大した形となっていることが分かった。

ボールの下にマングリ返しの形で固定された女達の傍に、数人の大亜門戸会のチンピラが付いた。

今回女達の腸内に浣腸液を注ぎ込む様子を効果的に見せるため、ゴムチューブの先に嘴管を取り付けて、直接腸内に注ぎ込む事はせず、男達は、先ず女達の真上を向いたアナルに巨大なガラス製の三角漏斗をねじ込もうとしていた。

今日幾度となく、異物や男の劣情に狂ったモノを挿入され続けた、後ろの肉の孔は熱く熱を持ち、充血して爛れたように見えていた。

漏斗の柄は大人の親指より、遙かに太かったが、今日これまで呑み込まされた物に比べればまだ細かったのも、その痛々しくダメージを受けた、萎色した陰華は男の力の前に大人しくその門を開き、奥深くに迎え入れた。

女達の逆さを向いて全開に広げた、股間の中心には、円錐形の花が植えられてように開いていた。

太い漏斗の柄を、肛門を割って押し込まれながら、女達は真上高くに設置された巨大なガラス容器に満々と満たされた揺れる浣腸液の液面をじっと見上げていた。

青白い顔に不安そうな表情を浮かべたお竜が、「ああ・・・怖いわ・・・」と、思わず呟くように口にした。

その呟きを聞き付けた大亜門戸会の三下が、

「心配するねえー！俺たちで注意しながら一滴残らず、オメーのケツの中に注ぎ込んでやるぜ！」と、怯えた目をしたお竜を見下ろす様にして嬉しそうに声を掛けた。

本日は、大亜門戸会の三下達に取ってみれば、単に会場を整備し、模擬店を開き、遠巻きに、陰虐な競技を観戦するしかなかったのも、実際自分の手で女達を責めることが出来て、本心から嬉しくて仕方無かったのであった。

準備が全て終了し、ゴム管の端を漏斗の中に入れると、競技のスタートを告げる号砲一過ゴム管の途中で液を止めていたクリップを緩めた。

高所に設置された、特大のイルリガートルからは、強い勢いで浣腸液が流下し、渦を巻くように漏斗の中に流れ込んだ。

そして、流れ落ちた浣腸液は人々の見守る前で、まるで魔法のように女達の体内に消えて行った。

固唾を呑んで見守る男達からまるで下水道に流れ込む雨水の様だぜーと、溜息が流れた。

こうして1リットル程の液が瞬く間に消費された。

しかし、次第に浣腸液が女達の腸内を満たし始めたのか、その吸引のスピードが鈍化し始めたことが、明らかになって来た。

股間から突き出した、シャンペングラスにも似た、透明のガラス器具の淵まで浣腸液で満たすと、男達はゴム管の途中にあるクリップを絞め、一旦放出を停止した。

表面をユラユラと蠱惑的に揺らしながら、液面が低下して行く様は、まるで尻の穴から、妖しげなりキュールを飲み干しているかのように見えた。

そして、漏斗一杯の液が、全て肛門内に飲み干されると、男達はクリップを開いて、再び漏斗一杯に悪魔の液体を注ぎ入れるのだった。

時折、女の体内から逆流するように、泡が上昇して来て、液面に到達してゴボッと弾けるのであるが、見守る男達はそんな光景も、咳き一つ上げず、血走った目でじっと見詰め続けるのであった。

こうして女達は、男達が注ぎ入れた全ての浣腸液を腸内に収めた。

男達が役目の終わった漏斗を抜き取ると、これまでの競技で散々痛めつけられた、痛々しい菊花が、ようやく閉じることを許されてホッとしたようにそっと閉じた。

その直ぐ目の前には、これまた痛々しい様を晒す前門が、怯えたようにフルフルと震えていた。

シーンとした静寂感がしばし続いたが、やがて、額からビッシヨリと汗が噴き出し、苦悶の表情を浮かべ、麻縄で厳しく縛められた身動き出来ない体を揺らすように藻掻き始めた。

そして下腹を内側から掻き毟るような、灼熱感に女達が堪らず、悲痛な呻き声を発し始めた。その女達の喘ぎ声が、合図となったかのように、これまで咳き一つ聞こえずシーンとしていた会場内に自分のチームの女を応援する男達の喚声が甦り始めた。

女達の腸内では、注入されたグリセリンの浣腸液が早くもその残酷な牙を剥き、鉄砲水の様な濁流となって暴れまくっていた。

その台風の洪水にも似た腸内の激流の放出を今日何度も活躍した肛門括約筋が、何とか押し止めようと必死に踏ん張っていた。

女達の苦悶に満ちた身悶えが、大きく成れば成る程、応援する男達の掛け声も大きく成っていった。

女達の悲鳴にも似た呻き声と、勝敗に懸かった金に心を奪われた男達の欲望による声援が、狂気のような雰囲気を醸し出していた。

男達の狂ったような声に後押しされて、女達は最後の瞬間を少しでも後送りすべく、肛門の筋肉を固く喰い絞め、最後の頑張りを見せていた。

しかし、時間の経過と共に、腸内の汚物をドロドロに溶かし、濁流の中に巻き込んだ浣腸液の圧力は、益々強くなる一方で、その強烈な圧力により、肛門の周囲が山の様に隆起し、それを押し止めようと肛門周りの筋肉が緊縮して、大きく盛り上がった箇所を元に押し戻す作業が何時までも続いていた。

女達の肛門の周囲に施された、鮮やかな色彩の淫猥な刺青の図柄が、体内の圧力に押されて拡がり、又、必死の抵抗により押し込める際に収縮する様子が男達の目に在り在りと映った。まるで生き物ように妖しく拡大と収縮を繰り返す刺青を男達は、血走った淫猥な目で睨み続けた。

その肛門括約筋と腸内圧力の格闘は、次第に激しさを増し、隆起の大きさとピクピクと蠢く頻度が次第に早く成って行く様子は誰の目にも明らかであった。

女達は蒼白な顔となり、白目を剥いてまともな意識は既に失っているようにも見えた。

薄れ行く意識の中で、腸内で荒れ狂う暴虐の汚辱の塊を体外に放出してしまえばどんなに楽になるだろうと弱気になった。

ただそれを真上に向かって放出すればそれが汚濁の雨となって自分に降りかかって来る恐

怖と、何よりも最下位になった場合に黄原の用意している不気味な罰ゲームの恐怖が意識を取り戻させ必死に堪えさせていた。

罰ゲームの内容は教えられていないが、あの残忍な黄原の事だから何か物凄く恐ろしいことを考えているに違いないことは感じられた。

それでも長時間に及ぶ腸内からの恐ろしい圧力が女達の正常な意識を奪いつつあった。

度重なる淫猥な調教で鍛えられた肛門の周囲の筋肉に対して、本能だけが最後の瞬間を押し止める様命じているかのようであった。

突然晴江が悲痛な叫び声を発した。

その悲鳴の様な声と共に、堪えに堪えていた堰を破って黄褐色の汚濁の液が噴出を始めた。腸内から吹き上がった大量の汚水は、晴江が縛められているポールに沿って垂直に上昇し、やがて放物線を描いて晴江の体に雨の様に降り注いだ。

最下位が確定した晴江のチームから失望の溜息が上がった。

一方ライバルが減った事に、お竜と暁美のチームからは、どっと喚声が上がった。

人々の笑いさざめく中で、汚物の雨に全身ビッショリと濡れた晴江の体に2回目の発作が始まり、今度は大量の泥状の固形物を含む汚物が、後門を引き裂いて噴出を始めた。

その時丁度風向きが変わり、ポールに縛り付けられた女達から、観衆の方に向かって風が流れ出した。

「うおー！これは臭くて堪らんぜ！」

男達が大げさに鼻を摘み、大声でその惨めな女を笑い立て、口汚く罵った。

晴江が早々に脱落して、勝負はお竜と暁美の一騎打ちとなった。

両チームの男達は狂ったように、脂汗を流しながら最後の足掻きを続ける女達を応援した。

「随分持つもんじゃないか？」

剛沢が面白そうに黄原を横目で見た。

「ええ・・・しかし二人とも、もう後僅かで、お終の様です。」

黄原が、最後の抵抗を試みる女達の様子を冷静に分析しながら呟いた。

その黄原の言葉が終わらない内に、ビビーンという音と共に、暁美の肛門を切り裂いて、汚水が勢い良く放出された。

それに僅かに遅れて、お竜も堪えに堪えていた汚水を天空高く吹き上げ始めた。

優勝が確定したお竜のチームの全員が狂ったような叫びを上げて、飛び上がって喜ぶ様子が

映った。

大亜門戸会の男達も自分達で馬券を作って投票していたので、見事予想を的中させた男達からも歓声が上がった。

予想を外した男達が外れ券を投げ捨て、汚物に塗れた女達の姿を恨めしげに見詰めていた。男達の喚声と怒号の中で、女達は何時果てるとも無く、腸内の汚物をまるで噴水の様に上空に向けて噴出し続けていた。

いまだに腸内に残った残便をブリブリと吐き出し続ける女達を尻目に、表彰式が始まっていた。

優勝したお竜のチームを代表して白井が剛沢から優勝賞金の詰まった分厚い熨斗袋を手渡された。

引き続いて、黄原により各競技の優秀選手の発表と続いた。

名前を呼ばれた男が歓声を上げて拳を高く突き上げた。

「それじゃ、最後にお待ちかねの罰ゲームだ！最下位になったチームの総責任を取って晴江姐さんに罰ゲームをやって貰おうか。」

黄原が台の上から冷酷な宣言を発した。

優勝を逃し、個人賞にも選ばれなかった男達が、その空虚感を満たす代償を求めるように、残酷な欲望に燃えた猟奇的な目で、ポールに逆さまに縛り付けられたままの晴江を睨んだ。晴江の体も他の二人と同じように、全身黄褐色の汚水に塗れ、華麗な刺青を施された柔らかな体の随所には、茶褐色や褐色の固形物がベツトリと付着し、独特の悪臭を発していた。

何時の間にか太陽は地平に沈み、暖かかった空気も秋の夕闇の冷氣に置き換わり、寒さが身に滲みて来て女達は身体を震わせた。

しかし、最下位の責任を一人で背負わされ、罰ゲームを宣告された晴江は、黄原はどんな陰惨な責めを我が身に加えようとしているのだろうと思うと、寒さ以上に底知れぬ恐怖にガタガタと身を震わせるのであった。

ところが、そんな恐怖感に包まれる心の片隅では、不可思議な被虐の陶醉感の様な物が芽生え始め、次第にその痺れるような快美感が大きくなって行き、それがどんな残忍なものを窺い知る事は出来なかったが、黄原の用意した陰虐な責めを受け入れようと、無意識の内に股間を悶えさせ、ジュンと濡らし始めている晴江が居た。

罰ゲーム

すっかり陽が落ちて、陽光に照らされていた昼の熱気も過ぎ去り、露出していた肌にも夜の寒さを感じ始める頃、晴江は芝生の上に相変わらず全裸のままで一人放置されていた。

全身に浴びた糞尿は綺麗に洗い流され、びっしりと付着していた排泄物の汚臭はすっかり拭き去られ、かつては何人も荒くれ男達に傳かれていた女親分の証とでも云うような凄艶な刺青を身体に彫り込んだ艶麗な熟女の姿を取り戻していたが、芝生の上に打ち込まれた四本の杭に手足を厳しく拘束され、その艶美な全裸像を衆目の前に晒していた。

周囲から大きな撮影用照明で照らし上げられ、夜のとばりの中で透き通った白い身体がライトの光を反射して明るく浮き上がって映っていた。

芝生に深く打ち込まれた杭に手足を縛り付けられ、四つん這いの姿勢で固定されていたため、これ見よがしに女性らしいむっちりとした丸みを帯びた尻を高く擡げさせられ、大きく開かされた無毛の太股の間からは、昼間散々男達から蹂躪された媚肉が赤く腫れをもって艶めかしく露出していた。

晴江の周囲を取り巻く何基もの撮影用照明により惨めな女の秘孔が陰も作らず、あからさまに照らし上げられていた。

これから始められる罰ゲームが如何に淫靡で残酷なものとなるか期待するように大勢の男達は何重にも輪となって、無言のまま目だけをギラギラと光らせて、照明に照らし上げられ哀れな生贄の周りを取り囲んでいた。

両脚を地面に打ち込んだ杭に縛り付けられ、パツクリと開いた太股の間は、綺麗に剃毛され隠しようも無く女の最も大切な部分が露出し、その部分に焼けるような男達の淫靡な視線が集中するのを感じると、込み上げる屈辱感と羞恥に顔面を芝の中に押し付け身体を小刻みに震わせるのであった。

芝生に顔を伏せながら黄原の用意した罰ゲームがどのように恐ろしいものかーと恐怖するとともに、不可思議な被虐の待望感のようなものが込み上げて来て肉洞が熱く疼くのを感じた。

晴江を取り巻く輪の最前列には芝生の上には不釣り合いな豪華な本革張りの肘掛椅子が二脚据えられ、剛沢と沢田がふんぞり返るように腰を落とし、彼らの膝の上には全裸のまま後

ろ手に縛り上げられた暁美とお竜が載せ上げられていた。

剛沢達は晴江の罰ゲームが開始されるのを待ちながら、背後から縄により縊り上げられた乳房を揉み上げたり、股間をこじ開けて手を差し入れ、秘芯を愛撫していた。

肘掛椅子の背後に待る剛沢の愛人達が二人の口に酒や肴を運んでいた。

男達に奉仕する愛人達もこれから何が始まるのだろうと、興味深々でギラギラした目で暗闇の中で照明に照らし上げられた晴江の姿を見詰めていた。

男達から指先で弄ばれているお竜も暁美も何時もと違う不気味な雰囲気におおされ、男の手で性感帯を撫で廻されても声を上げることも身悶えさせることも忘れ、じっと前を見詰めていた。

男の指先が潤いを生じない秘裂の上を空しく蠢いた。

その時、漆黒の闇に包まれた静寂の中を何かが近づいて来るように感じられた。

ひたひたと芝生の上で足を運ぶ音が微かに聞こえ、それと共に動物の特有のハアハアと荒い息遣いが確かにこちらの方に近づいて来るのが判った。

これに気付いた晴江を取り囲む男達の視線が一斉に音の方に向けられた。

まるで地獄から使わされた使者の如く、暗闇の中から真っ黒な大型犬がボウッと姿を現し、逸る大型犬を制するよう首輪に付けられた鎖を引き締める黄原の姿があった。

「これが黄原の用意した罰ゲームか・・・」

お竜を膝の上に座らせて熟れた女体を愛撫しながら剛沢がニヤリと頬を崩した。

男達から弄ばれる暁美もお竜も目を血走らせ、声を上げることも出来ず、近づく猛犬と黄原を見詰めた。

地面の上に拘束された頭を低くしていたため、何が起きているのか視認できない晴江であったが、取り囲む男達の異常な興奮に戦慄を覚え、意識は混乱して蒼白となり身体を強張らせた。

晴江を取り囲んでいた輪が解け、精悍な黒い大型犬と黄原を輪の中に迎え入れた。

地面に四つん這いになったまま顔を擡げた晴江の目の前に突然黒い大型犬が現われ、獐猛な顔とまともに対面した。

犬は半開きになった口の間から長い舌をひらひらと外に出し、ハアハアと荒い息を吐きながら得物を値踏みする獵犬のように晴江の裸身をじっと眺めた。

ヒィと、これまで此処に囚われてから一度も上げたことの無い戦慄を帯びた悲鳴が晴江の喉

を突き、身体を硬直させた。

これまで白刃の下に何度も身を置いても恐怖を示すことの無かった烈女が怯えて蒼腿める様子に、取り巻く男達の間からザワザワと呻き声が上がった。

剛沢の愛人達もこの美熟女がこれからこの獵犬のような引き締まった筋骨の黒い大型犬によって蹂躪されるのかと思うと、思わず残忍な笑みを浮かべた。

晴江との対面を済ませ、恐怖を充分味合わせた後、黄原は大型犬を晴江の股間の方に誘った。犬は開け放たれた股間に鼻先を近付け、クンクンとその部分の匂いを嗅いだ。鼻先を押し当てる様に臭いを嗅ぎまわる犬の後ろ脚の間から外性器がムクムクと姿を現し始めていた。

その禍々しい形状と大きさに見物の男達は息を呑んだ。

曉美もお竜も目を見張らせ、息をするのも忘れてその姿を見詰めていた。

大型犬の荒い鼻息がその部分に掛かるのを感じて、身動きを封じられた晴江の身体がブルブルと震えた。

突然、犬は大きく口を開いて晴江の秘裂を長い舌で嘗め上げた。

ざらつく舌先をその部分に感じて、イヤー！イヤー！と身体を震わせ激しく声を発した。

大型犬から舌で嘗め回され狂ったように泣き叫ぶ晴江の姿には、最早男達に伍して戦って来た猛女の面影は無かった。

「お願いします！その罰はお竜が引き受けます！どうか姐さんを助けて下さい！」

剛沢から抱かれながらお竜が悲痛な叫び声を上げた。

「そうかい？そんなに犬とやりたいのかい？それなら晴江が終わったらお前もやらしてやってもいいぜ・・・この犬なら一晩に何人でも相手出来そうだぜ・・・」

背後からお竜の乳房を揉み上げながら冷たく言い放った。

舌先で執拗に股間を嘗め上げた大型犬は、黄原に首輪を引かれ、前足を晴江の背に載せ身体を密着させて来た。

犬の外性器が秘芯に触れるのを感じて、ヒィー！と断末魔の悲鳴が上がった。

硬化した巨大なモノが肉の狭間を貫いて来るのが感じられた。

「オオ！繋がったぞ！」

取り巻く男達の間から喚声が上がった。

曉美もお竜も硬く目を閉ざし、顔を背けた。

根元まで晴江の体内に埋め込んだ犬が、鮮やかな刺青を描いた背の上に黒い大きな体を預けていた。

犬の性器でその部分を貫かれているのを感じながら、これまで何人もの男に抱かれて来てもジッと耐えて来たが、犬だけは嫌だ！犬を相手にするのは耐えられない！と激烈な思いが込み上げて来て、堪え切れずに大声を上げて泣き出し始めた。

人目も憚らずに号泣する晴江の姿を見て、かつては権勢を振り撒いていた下部組織の親分連中や、歯牙にも掛けなかった下っ端組員の前でこれだけ恥を晒せば、最早立ち直ることは出来ないだろうと、ヤクザ社会の頂点にいた女を此处まで墮としたことに目眩くような快感を覚えるのであった。

お竜を抱え上げ秘奥に突き立てた剛沢の肉茎がサディスティックな快感に酔いしれ一段と熱を帯び膨張した。

ピッタリと密着したまま大型犬がピクピクと腰を蠢かせ始めた。

「どうです？よく調教されているでしょう？こうして人間の女とやれる犬は珍しい。秘密のショーでも引っ張りだこで此处に連れて来るのに随分と手間が掛ったんですよ。」

犬の手綱を握り締めたまま黄原が得意そうに口にした。

犬から犯される嫌悪感と屈辱感に、犬のモノを受け入れながら身も世も無く泣き叫ぶ女親分に冷たく声を掛けた。

「どうですか、姐さん？犬のチン■てのも中々オツなものでしょう？気に入ったらまた連れて来て上げやすからね。」

かつてヤクザ社会の頂点に君臨していたプライドもかなぐり捨て、背後から突き立てられながら大声で泣きじゃくる哀れな女の後ろ髪を掴んで声を掛けた。

人間の女と犬の絡みに興奮した剛沢と沢田は膝の上に載せ上げた女の潤いを無くした秘奥を熱く滾ったモノで蹂躪した。

異様な光景に心を奪われる暁美とお竜は背後からどんなに激しく犯されても、声を上げることは無かった。

二人の男はまるで命の無いダッチワイフを抱くように、なす術も無く傍観する美女を犯し続けた。

秘密のショー用に調教された犬は何時果てるともなく執拗に晴江を攻め続け、晴江の悲痛な号泣は何時までも夜の静寂を割き続けた・・・

<淫獄編 完>